瀬戸内町文化財調査報告書第５集

瀬戸内町内の遺跡１
－貝塚時代～近世　分布調査編－

２０１７年３月

鹿児島県大島郡　瀬戸内町教育委員会

瀬戸内町内の遺跡１
- 貝塚時代～近世　分布調査編 -

瀬戸内町教育委員会

序　文

本報告書は、平成26年度から平成28年度にかけて国の補助を受けて実施した、瀬戸内町内の貝塚時代から近世にかけての遺跡の分布調査記録です。瀬戸内町では、平成15年度から平成16年度にかけて町内の遺跡の分布調査を行いましたが、それから10年以上がたち、すでに周知されている遺跡の資料が増加したほか、新たな遺跡も見つかっております。

調査の結果、瀬戸内町内で54の遺跡が確認され、瀬戸内町域の奄美大島南部・加計呂麻島・請島・与路島の各集落で、古くは貝塚時代から人々の生活が営まれていたことが明らかになりました。それと共に、人々の生活の場が貝塚時代より、連綿と現在に受け継がれていたこともうかがえました。

本報告書の刊行によって、町民の皆さまが地域の歴史・文化に、より興味・関心を抱くようになると共に、埋蔵文化財が町の教育や観光に、一層活用されるようになることを期待しております。

末尾になりましたが、分布調査および本報告書の刊行に際して、多数の指導助言をいただきました文化庁文化財部・鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島大学・鹿児島女子短期大学並びに関係者各位、分布調査の際、激励とご協力をいただきました町内の各集落の皆さまに対して、心より厚く御礼申し上げます。

平成29年3月

瀬戸内町教育委員会
教育長　上田　敏也

報　告　書　抄　録

ふりがな	せとうちちょうないのいせき
書　　名	瀬戸内町内の遺跡
副　書　名	貝塚時代～近世　分布調査編
巻　　次	1
シリーズ名	瀬戸内町文化財調査報告書
シリーズ番号	5
編著者名	與嶺　友紀也
編集機関	瀬戸内町教育委員会
所　在　地	〒894-1592　大島郡瀬戸内町古仁屋船津23
発行年月日	平成29（2017）年3月31日

コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号					
瀬戸内町 46525				2014.7.1 ～ 2017.3.31	瀬戸内町全域	町内遺跡 発掘調査 等事業

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
嘉徳遺跡 ほか	散布地	貝塚時代 ～ 近世		土器 布目圧痕土器 カムィヤキ 青磁 白磁 青花 本土産陶磁器 本土産陶器 貝製品 石製品　等	

例　言

1　本書は瀬戸内町教育委員会が文化庁の補助を受け、平成 26 年度から平成 28 年度にかけて実施した町内遺跡分布調査事業による、貝塚時代～近世の遺跡分布の報告書である。

2　遺跡名称は、鼎丈太郎（編）2005『瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書』瀬戸内町教育委員会に基本的に従い、遺跡の所在する小字地名を優先し、小字地名の前に大字地名を付けて遺跡名称とした。なお遺跡範囲が小字地を超える場合は「大字名＋集落遺跡」とした。

3　本書で用いる時代名称と時代区分は、高宮広士・新里貴之（編）2014『琉球列島先史・原始時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究　研究論文集』六一書房に従った。

4　各集落内の遺跡分布図の縮尺は 1/10,000 に統一した。方位は磁北を示す。

5　遺物実測図は遺物の大きさに応じて、1/2、1/3 の縮尺で示した。

6　遺物実測図と遺物写真の番号は一致しない。本書末に、遺物実測図と遺物写真の対応関係を示した表を掲載している。

7　調査・報告書作成にあたって、以下の方々にご指導・ご協力いただいた。
浅野啓介（文化庁）、石田智子（鹿児島大学）、伊波直樹（株式会社島田組）、齋藤達志（防衛省）、新里貴之（鹿児島大学）、竹中正巳（鹿児島女子短期大学）、樋泉岳二（早稲田大学）、永山修一（ラサール学園）、野内秀明（横須賀市）、原剛（軍事史学会）、水ノ江和同（文化庁）、森幸一郎（鹿児島県教育庁）、森達也（沖縄県立芸術大学）、山岡邦章（岸和田市）、山下信一郎（文化庁）、渡辺芳郎（鹿児島大学）

8　遺跡や採集遺物などの写真撮影は主に與嶺友紀也が行い、　挿図作成は鼎さつき・與嶺友紀也が行った。

9　本書の執筆の内、第 4 章第 6 節は竹中正巳氏（鹿児島女子短期大学）より玉稿賜った。その他の章の執筆・編集は與嶺友紀也が行った。

10　本調査に係わる調査記録や採集遺物等は、瀬戸内町教育委員会で保管している。なお本書第 15・16・148 図掲載の遺物のみは個人が所有しているものである。

序文

報告書抄録

例言

目次

第１章　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　調査組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第３節　調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第２章　瀬戸内町の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第１節　瀬戸内町周辺の地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第２節　瀬戸内町周辺の歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第３章　調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　第１節　分布調査の実施方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第４章　調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　第１節　調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　第２節　古仁屋地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　第３節　西方地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
　第４節　実久地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
　第５節　鎮西地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
　第６節　加計呂麻島諸鈍カネク遺跡出土の焼人骨（概報）・・・・・・・・・・・82
第５章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

瀬戸内町教育委員会では、埋蔵文化財の周知・保存・活用を目的として、瀬戸内町内における埋蔵文化財の分布調査を 2003（平成 15）年より実施している。2005（平成 17）年までの調査では瀬戸内町内で 49 の遺跡を確認した。その他、町内に多数ある近代遺跡の一部も確認された。そして、同年にそれまでの分布調査の成果を『瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書』としてまとめた。しかし、報告書刊行から 10 年以上経過し、各遺跡では採集資料のほか、道路工事等の試掘調査に伴う資料も増加しており、新たな遺跡や近代遺跡も確認されている。また、瀬戸内町内では現在も開発行為が行われており、今後も開発行為は続くものと考えられる。そのため、瀬戸内町教育委員会としては、開発行為との調整を円滑に進めつつ、埋蔵文化財の保護を図らなければならない。これらの状況を受けて、瀬戸内町内における埋蔵文化財に関する情報を更新し、埋蔵文化財保護の基礎を再度固める必要がでてきた。

そこで瀬戸内町内における埋蔵文化財の位置、内容の把握および遺跡分布地図の作成を目的に、2014（平成 26）年度から 2016（平成 28）年度にかけて、国庫補助事業を活用して瀬戸内町内の埋蔵文化財の分布調査を実施した。

第２節　調査組織

2014（平成 26）年度

事業主体	瀬戸内町教育委員会	
事業責任	瀬戸内町教育委員会教育長	森山　力蔵
事業統括	社会教育課課長	竹熊　幸一
	社会教育課図書館・郷土館課長補佐兼館長	登島　敏文
調査担当	社会教育課図書館・郷土館主事	鼎　丈太郎
調査指導	文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門調査官	水ノ江和同
	株式会社島田組沖縄支店調査員	伊波　直樹
	防衛省防衛研究所戦史研究センター戦史研究室所員	齋藤　達志
	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター助教授	新里　貴之

調査補助員　鼎さつき・田中祐子・正智子

調査作業員　武田正利・武田政文・永井俊三

2015（平成 27）年度

事業主体	瀬戸内町教育委員会	
事業責任	瀬戸内町教育委員会教育長	森山　力蔵（6 月退職）
		上田　敏也（7 月就任）
事業統括	社会教育課課長	竹熊　幸一（6 月異動）
		高田　信幸（7 月就任）
	社会教育課図書館・郷土館課長補佐兼館長	登島　敏文
調査担当	社会教育課図書館・郷土館主事	鼎　丈太郎

調査指導	横須賀市教育委員会	野内　秀明
	文化庁文化財部記念物課史跡部門調査官	浅野　啓介
	鹿児島県教育庁文化財課文化財主事	森　幸一郎
調査協力	鹿児島大学法文学部人文学科教授	渡辺　芳郎
	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター助教授	新里　貴之

調査補助員　鼎さつき・田中祐子

調査作業員　勇光久・岩元剛・江口しづ代・江口政男・江原正治・黒木政昭・昌谷武昭・島田正俊・武田正利・武田政文・德元薫子・供利義也・永井俊三・平川正博・前田芳之・前枝真嘉・宮原仲清・安真維・山下輝

2016（平成 28）年度

事業主体	瀬戸内町教育委員会	
事業責任	瀬戸内町教育委員会教育長	上田　敏也
事業統括	社会教育課課長	高田　信幸
調査担当	社会教育課生涯学習係主事	鼎　丈太郎
調査指導	文化庁文化財部記念物課史跡部門調査官	山下信一郎
	鹿児島県教育庁文化財課文化財主事	森　幸一郎
	岸和田市教育委員会生涯学習部郷土文化室文化財担当	山岡　邦章
	陸上自衛隊幹部学校教育部戦史教育研究室教官	齋藤　達志
	軍事史学会副会長	原　剛
調査協力	沖縄県立芸術大学全学教育センター教授	森　達也
	鹿児島女子短期大学生活科学科教授	竹中　正巳
	鹿児島大学法文学部人文学科教授	渡辺　芳郎
	鹿児島大学法文学部人文学科准教授	石田　智子
	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター助教授	新里　貴之
	ラサール学園教諭	永山　修一
	瀬戸内町久慈集落	

調査補助員　鼎さつき・奥嶺友紀也

第 3 節　調査経過

2014（平成 26）年度から 2016（平成 28）年度にかけて国の補助を受けて、瀬戸内町内の埋蔵文化財の分布調査を行った。2014（平成 26）年度と 2015（平成 27）年度は現地踏査と資料整理のほか、近代遺跡に関しては、聞き取り調査および資料収集を実施した。2016（平成 28）年度は現地踏査を行いつつ、資料整理および報告書作成を実施した。

以下、各年度の調査内容を日記抄に略述する。

2014（平成 26）年度

7 月～ 3 月　採集資料および出土資料の整理作業（図面作成）を実施。

7 月～ 3 月　アジア歴史資料センターおよび瀬戸内町立郷土館所蔵の瀬戸内町関連資料の目録づくりを実施。

8 月～ 3 月　埋蔵文化財、近代遺跡に関する調査データの整理。

９月　９日　西古見集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。久慈地区（久慈）・西古見地区にて、近代遺跡の分布調査を実施。
９月 11 日　安脚場地区（安脚場）にて、近代遺跡の分布調査を実施。
10 月　１日　西阿室集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。
10 月　２日　実久集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。
10 月　８日　瀬相地区（三浦）にて、第 17 震洋艇壕跡の現状確認調査を実施。
11 月　６日　西古見地区にて、近代遺跡の分布調査を実施。
11 月 15 日　池地集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。
11 月 25 日　須子茂地区（モン崎）にて、近代遺跡の分布調査を実施。
12 月　３日　古仁屋地区（古仁屋）にて、近代遺跡の分布調査を実施。
12 月 10 日　秋徳地区（先鼻）にて、砲台跡の現状確認調査を実施。
１月　８日　瀬相地区（三浦）にて、艦船給水ダム跡の現状確認調査を実施。
１月 29 日　皆津崎地区にて、近代遺跡の分布調査を実施。
２月　３日　古志集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。久慈集落にて、白糖工場跡の表面踏査および聞き取り調査と旧国民学校・奉安殿・貯水施設など近代遺跡関連の施設についての聞き取り調査を実施。
２月　４日　瀬相地区（三浦）・須子茂地区（モン崎）・実久地区（実久）にて、近代遺跡の分布調査を実施。
２月　５日　久慈地区（久慈）にて、第 44 震洋隊について調査を実施。
２月 12 日　皆津崎地区にて、望楼跡の現状確認調査を実施。
２月 19 ～ 21 日　安脚場地区（安脚場）にて、壕跡・塹壕跡・タコ壺跡・探照灯跡の確認調査および、皆津崎地区・安脚場地区（安脚場）・実久地区（江仁屋離）・西古見地区にて、砲台跡や桟橋跡・標柱（陸軍用地）の海上からの確認調査を実施。
２月 24 日　木慈・嘉入の各集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。
２月 26・27 日　於斎・勢里・佐知克・野見山・諸鈍・生間・本生間・諸数・勝能・押角の各集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。瀬相地区（瀬相）にて、大島防備隊・隊門の簡易実測を実施。
３月 24 日　瀬相地区（三浦）にて、近代遺跡蛟竜基地跡の現状確認調査を実施。

2015（平成 27）年度

５月～３月　埋蔵文化財および近代遺跡に関する諸資料の整理作業を実施。
９月 21 日　実久地区（江仁屋離）にて、兵舎跡・井戸跡・砲台跡の現状確認調査を実施。
11 月　９日　久慈地区（古志）・宇検村部連にて、砲台跡・土盛り施設・探照灯跡の現状確認調査を実施。
１月 12・13 日　伊須・蘇刈・嘉鉄・清水・節子・網野子・勝浦の各集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。
１月 29 日　安脚場地区（徳浜）にて、砲台跡・防空壕跡・沈殿施設跡・給水施設跡・タコ壺跡など近代遺跡関連の施設の現状確認調査を実施。
３月７・８日　実久・芝・薩川・瀬武・武名・俵・瀬相・渡連・安脚場・徳浜・諸鈍の各集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。
３月 10 日　久慈地区（久慈）にて、佐世保海軍軍需部大島支庫関連の取水口跡と沈殿池跡の現状確

認調査を実施。

３月 17 ～ 20 日　沖縄県立博物館所蔵の瀬戸内町採集資料の資料調査を実施。

2016（平成 28）年度

５月～３月　埋蔵文化財および近代遺跡に関する諸資料の整理および報告書の作成。

８月８～ 10 日　諸鈍・野見山・勢里の各集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。

11 月 10・11 日　芝・実久・薩川・瀬武・知之浦の各集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。

11 月 29・30 日　阿多地・俵・瀬相・花富・伊子茂・於斎・勢里・押角・勝能・諸数・本生間・渡連・安脚場・徳浜の各集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。

12 月 11 日　与路集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。

12 月 18 日　池地集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。

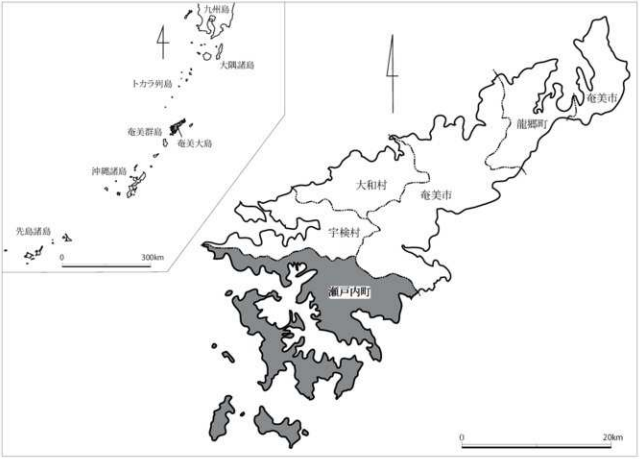
３月　７日　久慈地区（久慈）・西古見地区にて、近代遺跡の確認調査を実施。

３月 14・15 日　古仁屋地区（古仁屋・手安・須手）・久慈地区（久慈）・西古見地区・瀬相地区（三浦・瀬相・呑之浦）・安脚場地区（安脚場）にて、近代遺跡の現状確認調査を実施。

第２章　瀬戸内町の概況

第１節　瀬戸内町周辺の地理的環境

琉球列島は日本列島の南西に位置し、北は九州島から南は台湾島までの間を、弧状に連なる大小



第１図　瀬戸内町の位置

200の島々である。琉球列島は北から大隅諸島、トカラ列島、奄美群島、沖縄諸島、先島諸島に分けられる。奄美群島は琉球列島のほぼ中央に位置しており、奄美大島は奄美群島の北側にある。

奄美大島の地形は全体的に山地が発達し、湯湾岳（694m）を最高峰として、小川岳（528m）、金川岳（528m）、タカバチ山（485m）、油井岳（483m）、滝ノ鼻山（482m）、鳥ヶ峰（467m）など急峻な山々が奄美大島南部を中心に形成されている。山尾根は海岸まで伸び、奄美大島南部の海岸の多くはリアス式海岸となる。このように奄美大島では海岸近くまで山地が発達しているため、平坦地は少ない。

また島内には深い森林が広がり、島内の約85％は森林に占められる。島内には多数河川が流れているが、その多くは短い急流河川となる。このような地形は、奄美大島のすぐ南にある加計呂麻島や請島、与路島にも共通して見られる。なお奄美大島北部の笠利半島だけはこれらの地形とは異なり、山地の発達が乏しく、笠利半島西部には台地が広がる。

奄美大島の地質は、笠利半島に一部石灰岩がある以外は、ほとんどが古生層である。古生層は主に粘板岩・頁岩・砂岩・チャートで構成される。またこの古生層には花崗岩の貫入が見られ、奄美大島の一部では花崗岩の露頭が認められる。

奄美大島の気候は亜熱帯海洋性で温暖多雨となる。年平均気温は21.6℃で、年間降水量は2837.7mmである。特に年間降水量の内、梅雨時期の５～６月の降水量は全体の24％、台風が多数接近する８～９月の降水量は全体の20％を占める。また冬から春にかけては低気圧や前線、寒気の影響から雨や曇りの日が多くなる。

前述した奄美大島に広がる深い森林と、亜熱帯海洋性の温暖な気候は、島内に多様な生態系を形成する大きな要因となっている。奄美大島には多数の貴重な動植物が生息しており、国指定天然記念物に指定されている種としては、アマミノクロウサギ、ルリカケス、アカヒゲ、オオトラツグミ、カラスバト、オートンオオアカゲラ、トゲネズミ、ケナガネズミ、オカヤドカリがある。また近年では世界自然遺産の候補地として注目されている。

奄美大島は現在、奄美市、竜郷町、大和村、宇検村、瀬戸内町の五つの行政区に分かれており、瀬戸内町は奄美大島の南部に位置している。瀬戸内町域には奄美大島以外に加計呂麻島・請島・与路島などの島々が含まれており、奄美大島と加計呂麻島の間には大島海峡が広がる。瀬戸内町域内の地形は、発達した山地とリアス式海岸が特徴で、水深の深い良好な港が多く見られる。特に大島海峡内には、波のおだやかな良好な港湾が見られ、古仁屋港は現在避難港として指定されている。

第２節　瀬戸内町周辺の歴史的環境

・旧石器時代

旧石器時代に関連する資料は、瀬戸内町では未だ発見されておらず、不明である。ただ石器石材に適したチャートの露頭などは確認される。なお同じ奄美群島である徳之島の天城遺跡（伊仙町）では、旧石器時代のものとされるチャート製の剥片が確認されている。

・貝塚時代前期（縄文時代併行）

貝塚時代前期になると、瀬戸内町域でも人類の活動が確認される。当時人々は狩猟採集の生活を送っていたと考えられ、石器・骨製品・貝製品などから生活の一端がうかがえる。特に貝製品の発達は著しく、多様な実用品・装飾品が見られる。また貝塚時代前期の土器からは、九州の縄文土器の影響を見ることができ、奄美群島と九州の交流の様子がわかる。

瀬戸内町域において当該期の遺跡は、安脚場遺跡・嘉徳遺跡がある。安脚場遺跡は、貝塚時代前２

期を中心とした遺跡で、条痕文土器などが採集されている（鹿児島県教育委員会 1990、鼎編 2005）。嘉徳遺跡は、前 4 期を中心とした遺跡で、嘉徳Ⅰ式・Ⅱ式土器のほか、島内外の多数の土器や石器類が出土している（河口ほか 1974）。また石積み遺構なども検出された。

・貝塚時代後 1 期（弥生時代～古墳時代中期併行）

貝塚時代後 1 期の前半は弥生時代に併行する。日本本土では農耕が開始された一方で、奄美群島では貝塚時代前期以来の狩猟採集の生活を引継ぎ、より島嶼環境に適応したものへと発達した。またこの時期には日本本土、特に九州と奄美群島間の交易が活発化し、九州へ南海産大型貝が多数搬出された。奄美群島には九州の弥生土器が搬入され、群島内では積極的に弥生土器が模倣製作された。

貝塚時代後 1 期の後半は古墳時代前期～中期に併行する。この頃の群島内における人々の生活に大きな変化はなかったと考えられる。日本本土、九州との交易は少し落ち着くが、引き続き行われており、古墳の副葬品として南海産大型貝製の装飾品などが見つかっている。奄美群島内では南九州の土器が模倣製作された。

瀬戸内町域における当該期の遺跡には、須子茂集落遺跡がある。須子茂集落遺跡では在地土器のほか、山ノ口式土器や中津野式土器が出土している（鼎編 2010）。

・貝塚時代後 2 期（古墳時代後期～平安時代併行）

貝塚時代後 2 期の人々の生活は、基本的に後 1 期のものと大きく変わらないものと考えられる。ただし貝塚時代後 2 期末には、喜界島など奄美群島の一部の地域では、イネ・オオムギなどの農耕作物が確認され（高宮・千田 2014）、群島内の生活が変わりつつあった可能性がある。またこの頃日本本土では律令国家が成立し、『日本書紀』などには奄美群島の人々が朝貢に訪れた記録がある。

瀬戸内町域における当該期の遺跡は、皆津崎遺跡がある。皆津崎遺跡では、兼久式土器といった在地土器のほか、布目圧痕土器が採集される（河口ほか 1974、鼎編 2005）。また瀬戸内町域では、布目圧痕土器が採集される遺跡が多く確認される（鼎編 2005）。

・グスク時代（11 世紀後半～ 15 世紀前半）

グスク時代になると群島内では、農耕が始まり、家畜飼育の普及や鉄器の生産・使用など、生活が一変したと考えられる。また群島外との交易も活発化し、群島内には様々な人・モノが入ってきたと推測される。これらの流れを受け、喜界島の城久遺跡群（喜界町）が交易拠点として隆盛を迎え、徳之島では、新たな技術が導入されカムィヤキ古窯跡群（伊仙町）の操業が始まった。また同時に社会構造の複雑化が進み、奄美大島の赤木名城跡（奄美市）など按司に関わる構造物が出現した。

瀬戸内町域でもグスク時代に関わる滑石混入土器・カムィヤキ・陶磁器・滑石製石鍋などが、各遺跡で採集される（鼎編 2005）。また西古見城跡や諸鈍城跡といった城郭もあり、諸鈍城跡には在地首長のナングモリバルが、在地首長のグリャバラと琉球王国軍により討ち滅ぼされた伝承がある。

・琉球王国統治時代（15 世紀後半～ 1611 年）

1422 年には沖縄諸島で琉球王国が成立し、15 世紀中頃には奄美群島は琉球王国の統治下となった。琉球王国統治後は瀬戸内町域の内、奄美大島側の東部と加計呂麻島の東部を東間切、奄美大島側の西部と加計呂麻島の西部、請島・与路島を含めて西間切として、行政区が設置される。各間切と間切内の諸集落にはそれぞれ行政管理者が置かれ、同時にノロといった女性祭祀者も置かれた。

・薩摩藩統治時代（1611 年～ 1868 年）

1609 年に薩摩藩が琉球王国に侵攻した後、1611 年に奄美群島は薩摩藩の統治下となった。奄美大島の行政区は、上方（北部）と下方（南部）に分けられた。上方は笠利間切、瀬名間切、名瀬間切、

住用間切に、下方は西間切、東間切、焼内間切にそれぞれ分けられた。また 1720 年は糖業政策を徹底するために行政区の変更が行われ、瀬戸内町城では東方・渡連方・実久方が設定された。

薩摩藩統治時代の初めは貢米制が取られ、群島内では稲を中心にその他の作物が生産された。しかし 1745 年に換糖上納となると、群島内の農業は砂糖黍生産に集中し、農作物の生産が単一化したことによる被害も頻発した。

薩摩藩統治時代末期になると、黒糖の価格下落を受け、薩摩藩は白糖の生産を目的とした白糖工場

第１表　本書で使用する時期区分

<table>
<tr><th colspan="3">日本本土</th><th colspan="2">奄美群島</th><th>沖縄諸島</th></tr>
<tr><td rowspan="3">原始</td><td colspan="2">旧石器時代</td><td colspan="3" rowspan="2">旧石器時代</td></tr>
<tr><td rowspan="2">縄文時代</td><td>草創期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">貝塚時代</td><td rowspan="2">早期</td><td rowspan="2">前１期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">古代</td><td rowspan="2">前期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">中期</td><td rowspan="2">前２期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">後期</td><td rowspan="2">前３期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">晩期</td><td rowspan="2">前４期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">弥生時代</td><td rowspan="2">早期</td><td rowspan="2">前５期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">前期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">中期</td><td rowspan="2">後１期前半</td></tr>
<tr><td rowspan="2">後期</td><td rowspan="2">後１期後半</td></tr>
<tr><td rowspan="3">古墳時代</td><td rowspan="2">前期</td><td rowspan="2">後２期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">中期</td></tr>
<tr><td>後期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">奈良時代</td><td rowspan="2">平安時代</td></tr>
<tr><td rowspan="2">中世</td><td>鎌倉時代</td><td colspan="2">グスク時代</td><td rowspan="2">第１尚氏王朝</td></tr>
<tr><td>室町時代</td><td colspan="2">琉球王国統治時代</td></tr>
<tr><td rowspan="2">近世</td><td rowspan="2">江戸時代</td><td colspan="2" rowspan="2">薩摩藩統治時代</td><td rowspan="2">第２尚氏王朝</td></tr>
<tr><td></td></tr>
<tr><td>近代</td><td colspan="5">明治時代</td></tr>
</table>

第２表　瀬戸内町内の遺跡一覧１

図版番号	地区	集落	遺跡名称	遺跡番号	時代	遺物
1	古仁屋	嘉徳	嘉徳遺跡	525-1-0	貝塚前期	嘉徳式土器，面縄東洞式土器，嘉徳Ⅰ式A土器，嘉徳Ⅰ式B土器，凹線文土器，嘉徳Ⅱ式土器，面縄西洞式土器，面縄前庭式土器，素文土器，喜念Ⅰ式土器，宇宿上層式b土器，赤連系土器，市来式土器，石器，獣骨，魚骨
2		嘉徳	嘉徳集落遺跡	525-4-0	貝塚後期～薩摩藩統治	兼久式土器，布目圧痕土器，カムィヤキ，青磁，白磁，青花，本土産陶磁器，本土産陶器
3		節子	節子集落遺跡	525-5-0	貝塚前期～薩摩藩統治	嘉徳式土器，弥生系土器，布目圧痕土器，カムィヤキ，青磁，白磁，本土産陶磁器，本土産陶器，沖縄産陶器
4		網野子	網野子サト遺跡	525-23-0	グスク～薩摩藩統治	青磁，白磁，本土産陶器，沖縄産陶器
5		勝浦	勝浦集落遺跡	525-6-0	貝塚後期～薩摩藩統治	布目圧痕土器，青磁，本土産陶器，沖縄産陶器，滑石片
6		伊須	伊須集落遺跡	525-7-0	貝塚後期～薩摩藩統治	搬入土器，土師質土器，青磁，青花，本土産陶磁器，本土産陶器
7		蘇刈	蘇刈集落遺跡	525-24-0	グスク～薩摩藩統治	カムィヤキ，青磁，本土産陶磁器，本土産陶器
8		嘉鉄	嘉鉄カイツ遺跡	525-14-0	貝塚後期	スセン當式土器，兼久式土器，布目圧痕土器
9		嘉鉄	嘉鉄サト遺跡	525-25-0	グスク～薩摩藩統治	土器，カムィヤキ，白磁，青磁，青花，輸入陶磁器，本土産陶磁器，本土産陶器，沖縄産陶器
10		清水	清水集落遺跡	525-26-0	グスク～薩摩藩統治	カムィヤキ，青磁，白磁，青花，　褐釉陶器，本土産陶磁器，沖縄産陶器
11		手安	手安集落遺跡	525-27-0	グスク	土器，カムィヤキ
12		須佐礼	油井スサレ遺跡	525-50-0	グスク～薩摩藩統治	土器，青磁，白磁，本土産陶磁器，本土産陶器
13	西方	古志	古志サト遺跡	525-28-0	グスク～薩摩藩統治	土器，カムィヤキ，青磁，白磁，青花，本土産陶磁器，本土産陶器
14		伊目	久慈イメ遺跡	525-29-0	薩摩藩統治	本土産陶磁器，本土産陶器，沖縄産陶器
15		久慈	久慈マエダ遺跡	525-30-0	貝塚後期，薩摩藩統治	須恵器，本土産陶磁器
16		久慈	久慈集落遺跡	525-31-0	貝塚後期～薩摩藩統治	布目圧痕土器，カムィヤキ，青磁，沖縄産陶器
17		久慈	久慈白糖工場跡		薩摩藩統治～明治	白糖石，耐火煉瓦，赤煉瓦
18		管鈍	管鈍集落遺跡	525-8-0	貝塚後期～薩摩藩統治	兼久式土器，布目圧痕土器，土師器，滑石混入土器，青磁，白磁，輸入陶磁器，本土産陶磁器，沖縄産陶器
19		西古見	西古見城跡	525-2-0	グスク	
20		西古見	西古見集落遺跡	525-9-0	貝塚後期～薩摩藩統治	弥生系土器，スセン當式土器，兼久式土器，青磁，褐釉陶器，沖縄産陶器，貝製品，フイゴの羽口，鉄滓
21	実久	実久	実久集落遺跡	525-10-0	グスク～薩摩藩統治	土器，カムィヤキ，青磁，白磁，青花，本土産陶磁器，沖縄産陶器
22		芝	芝タンマ遺跡	525-32-0	グスク～薩摩藩統治	土器，カムィヤキ，白磁，青花，本土産陶磁器
23		芝	芝集落遺跡	525-33-0	グスク～薩摩藩統治	カムィヤキ，青磁，白磁，青花，褐釉陶器，本土産陶器
24		薩川	薩川集落遺跡	525-34-0	貝塚前期～薩摩藩統治	仲原式土器，カムィヤキ，青磁，白磁，本土産陶磁器，本土産陶器
25		瀬武	瀬武サト遺跡	525-35-0	グスク～薩摩藩統治	カムィヤキ，青磁，白磁，本土産陶磁器，本土産陶器，沖縄産陶器
26		阿多地	阿多地イバタ遺跡	525-36-0	貝塚後期～薩摩藩統治	弥生系土器，スセン當式土器，兼久式土器，布目圧痕土器，滑石混入土器，カムィヤキ，青磁，褐釉陶器，本土産陶磁器，本土産陶器，貝製品，石器
27		須子茂	須子茂集落遺跡	525-11-0	貝塚前期～薩摩藩統治	喜念Ⅰ式土器，弥生系土器，弥生土器，スセン當式土器，中津野式土器，兼久式土器，布目圧痕土器，須恵器，滑石混入土器，カムィヤキ，青磁，白磁，青花，褐釉陶器，陶質土器，本土産陶磁器，本土産陶器，沖縄産陶器，滑石片，石器，貝類，動物骨

第３表　瀬戸内町内の遺跡一覧２

図版番号	地区	集落	遺跡名称	遺跡番号	時代	遺物
28	実久	武名	武名チノウラ遺跡	525-37-0	グスク	青磁
29		俵	俵サト遺跡	525-38-0	グスク～薩摩藩統治	青磁，褐釉陶器，本土産陶磁器，本土産陶器
30		瀬相	瀬相ムラウチ遺跡	525-39-0	グスク～薩摩藩統治	青磁，本土産陶磁器，本土産陶器
31		西阿室	西阿室集落遺跡	525-12-0	貝塚後期～薩摩藩統治	兼久式土器，カムィヤキ，青磁，白磁，褐釉陶器，青花，輸入陶磁器，本土産陶磁器，本土産陶器
32		花富	花富ヒラタ遺跡	525-20-0	貝塚前期，グスク以降	土器，青磁，青花，本土産陶磁器
33		伊子茂	伊子茂ナカサト遺跡	525-40-0	グスク～薩摩藩統治	土器，カムィヤキ，青磁，白磁，本土産陶磁器，本土産陶器，沖縄産陶器，石器
34		於斎	於斎集落遺跡	525-22-0	貝塚後期～薩摩藩統治	土器，布目圧痕土器，カムィヤキ，青磁，本土産陶磁器
35		勢里	於斎セリ遺跡	525-51-0	グスク～薩摩藩統治	土器，カムィヤキ，青磁，白磁，本土産陶器
36		押角	押角ムラウチ遺跡	525-41-0	グスク～薩摩藩統治	青磁，本土産陶磁器，本土産陶器
37		勝能	勝能サト遺跡	525-42-0	グスク～薩摩藩統治	土器，カムィヤキ，青磁，白磁，本土産陶磁器，本土産陶器，沖縄産陶器
38		勝能	勝能イザネク遺跡		グスク～薩摩藩統治	土器，カムィヤキ
39		諸数	諸数集落遺跡	525-43-0	グスク～薩摩藩統治	土器，カムィヤキ，青磁，白磁，青花，本土産陶磁器，本土産陶器
40		本生間	生間ミタ遺跡	525-44-0	グスク～薩摩藩統治	カムイヤキ，青磁，本土産陶磁器，本土産陶器
41		渡連	渡連ムラウチ遺跡	525-21-0	グスク～薩摩藩統治	土器，カムィヤキ，青磁，本土産陶磁器，本土産陶器，沖縄産陶器
42		安脚場	渡連アンキャバ遺跡	525-13-0	貝塚前期～薩摩藩統治	条痕文土器，室川下層式土器，面縄前庭土器，神野B式類似土器，嘉徳式土器，阿波連浦下層式土器，布目圧痕土器，カムィヤキ，青磁，本土産陶磁器，本土産陶器，フイゴの羽口，石器
43		徳浜	諸鈍トクハマ遺跡	525-15-0	グスク～薩摩藩統治	カムィヤキ，本土産陶磁器，本土産陶器，沖縄産陶器
44		諸鈍	諸鈍城跡	525-3-0	グスク	
45		諸鈍	諸鈍クリ遺跡	525-16-0	グスク～薩摩藩統治	土器，カムィヤキ，本土産陶器
46		諸鈍	諸鈍カネク遺跡	525-17-0	貝塚後期～薩摩藩統治	弥生系土器，スセン當式土器，兼久式土器，布目圧痕土器，士師器，滑石混入土器，カムィヤキ，青磁，白磁，本土産陶器，沖縄産陶器，滑石製品，貝製品，フイゴの羽口
47		諸鈍	諸鈍サト遺跡	525-45-0	グスク～薩摩藩統治	土器，カムィヤキ，青磁，白磁，本土産陶磁器，本土産陶器，寛永通宝
48		野見山	野見山オオサト遺跡	525-46-0	グスク～薩摩藩統治	滑石混入土器，カムィヤキ，青磁，白磁，本土産陶磁器，本土産陶器
49		秋徳	秋徳集落遺跡	525-47-0	グスク～薩摩藩統治	土器，青磁，青花，本土産陶磁器，本土産陶器，骨製品
50		請阿室	請阿室集落遺跡	525-48-0	貝塚後期～薩摩藩統治	スセン當式土器，カムィヤキ，青磁，本土産陶磁器，本土産陶器，沖縄産陶器，ガラス玉
51		池地	池地アガンマ遺跡	525-19-0	貝塚後期～薩摩藩統治	土器，布目圧痕土器，カムィヤキ，青磁，青花，本土産陶磁器，本土産陶器
52		池地	池地オーコーバリ遺跡	525-18-0	貝塚後期～薩摩藩統治	土器，布目圧痕土器，滑石混入土器，カムィヤキ，青磁，白磁，青花，本土産陶磁器，本土産陶器
53		池地	池地サキンマ遺跡	525-52-0	グスク	土器，青磁，白磁
54		与路	与路集落遺跡	525-49-0	貝塚後期～薩摩藩統治	弥生系土器，スセン當式土器，兼久式土器，布目圧痕土器，滑石混入土器，グスク土器，カムィヤキ，青磁，白磁，青花，本土産陶磁器，本土産陶器，沖縄産陶器，石器

※1　図版番号は第2図に対応　※2　遺跡番号は鹿児島県教育庁作成の遺物台帳番号に対応。
※3　嘉徳遺跡は2005年報告「嘉徳アサト遺跡」、池地アガンマ遺跡は2005年報告「池地オーコーバリ遺跡」、池地オーコーバリ遺跡は2005年報告「池地アガンマ遺跡」に対応。

を奄美大島に建設した。場所は瀬留（竜郷町）、金久（奄美市）、須古（宇検村）と久慈（瀬戸内町）の４ヵ所である。白糖工場には、白糖精製のための蒸気機関が使用されるなど、当時最新の技術が導入された。

・近代以降（1868 年～）

明治時代になると、瀬戸内町をはじめ奄美群島は鹿児島県内の行政区となった。大正時代からは、瀬戸内町は国防上の要所として注目され、大島海峡周辺の要塞化が進められた。そして太平洋戦争末期には、震洋艇の基地も設置された。なお近代以降の詳細は別冊に記載する。

第３章　調査方法

第１節　分布調査の実施方法

分布調査は 2003（平成 15）・2004（平成 16 年）度に実施した、分布調査の方法（鼎編 2005）を基本として行った。分布調査は、開発行為などが行われる可能性の高い現集落内、およびその集落周辺の平野部を重点的に行い、その他の平野部や丘陵地における分布調査は適宜行った。

分布調査の実施方法は、現地踏査による遺物の採集である。遺物を採集した際は、細かく採集地点を記録した。各遺跡の遺跡範囲の作成には、遺物の採集地点と周辺の地形を基に作成した。また集落によっては、埋め立てなど地形の改変が行われているため、古写真なども参考にした。

第４章　調査成果

第１節　調査概要

瀬戸内町は、奄美大島南部・加計呂麻島・請島・与路島の島々で構成されている。その地形は発達した山地とリアス式海岸が特徴的で、平野部は少なく、谷地に点々と形成されている。このような地形は瀬戸内町全域で確認され、谷地に形成された平野部に各集落が位置している。また瀬戸内町域では、水深の深い良港が多く見られるが、特に大島海峡内は水深が深く、波のおだやかな良港が見られる。

これまで瀬戸内町域では、49 の遺跡が確認され、遺跡の時代は貝塚時代前期～薩摩藩統治時代までである（鼎編 2005）。2014（平成 26）年度から 2016（平成 28）年度にかけて実施した分布調査によって、新たに５遺跡が見つかり、現在瀬戸内町域では合計 54 の遺跡が確認される。調査手法によるものもあるが、54 遺跡中 51 遺跡が平野部であり、現在の集落内もしくは集落周辺に位置する遺跡がほとんどである。過去の調査では、貝塚時代前期からグスク時代以降にかけて、次第に遺跡分布が外洋側から海峡内に拡大する傾向や、遺跡立地の変化が指摘されている（鼎編 2005）。これらの傾向は、2014（平成 26）年度から 2016（平成 28）年度にかけての分布調査によって増加した資料などを含めても、大きく変わらない。

第２図　瀬戸内町内の遺跡

第２節　古仁屋地区

（１）嘉徳集落

・嘉徳集落の概要

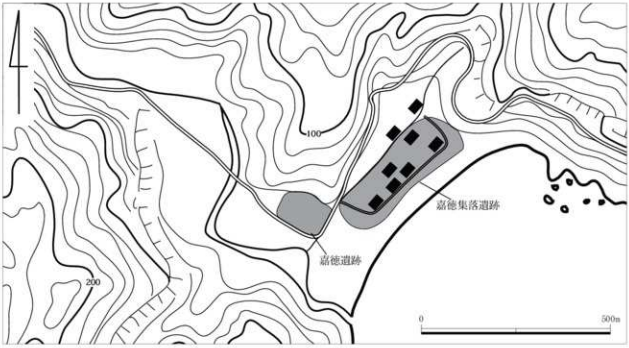
嘉徳集落は奄美大島側の諸集落の中で、最も東側に位置する集落で、外洋に面している。集落の北・東・西側は山に囲まれ、集落の後方には山尾根が張り出す。そしてその山尾根より、北西側には沖積地が広がる。集落の南側には入り江が見られる。その入り江にそって砂丘地が発達しており、その他、集落の後方にある山尾根の先にも一部砂丘地がある。嘉徳集落は入り江にそった砂丘地上に位置している。また集落の南西側には嘉徳川、集落の後方にも小河川が流れており、嘉徳川に合流する。

・嘉徳遺跡（525-1-0）※（）内は鹿児島県教育庁作成の遺物台帳番号に共通

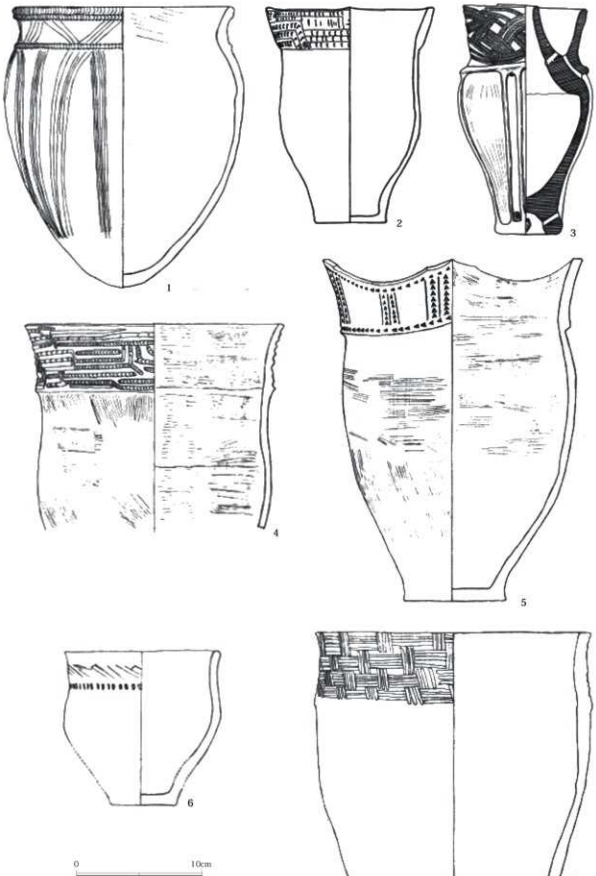
嘉徳遺跡は嘉徳集落の北西側、集落後方に張り出す山尾根の先にある砂丘地上に位置する（第３図）。嘉徳遺跡は 1973（昭和 48）年、砂利採掘業者の砂丘の採掘によって発見され、1974（昭和 49）年、鹿児島県文化財専門員の河口貞徳を中心として、瀬戸内町教育委員会によって発掘調査が行われた。遺物包含層は３つあり、特に第１包含層と第２包含層からは、遺構と多数の遺物が確認された（河口ほか 1974）。

検出された遺構の多くは石組み遺構である。石組み遺構は円形・半円形、もしくは方形状を呈するもので、大小の円礫・角礫によって構築されている。石材の多くが火を受けており、遺構内からは炭化物が大量に検出されたことから、石組み遺構は調理場としての機能が推定されている。そのほか土坑がいくつか検出されており、そのうちの１つからは、二重口縁をもつ面縄東洞式土器が横倒しの状況で確認されている（河口ほか 1974）。

遺物の多くは土器・石器で、土器は大量に出土している。ほかに獣骨や魚骨が少量出土している。嘉徳遺跡では多数の在地土器と搬入土器が確認されている。在地土器としては、嘉徳式土器・面縄東洞式土器・嘉徳Ⅰ式Ａ土器・嘉徳Ⅰ式Ｂ土器・凹線文土器・嘉徳Ⅱ式土器・面縄西洞式土器・面縄前



第３図　嘉徳集落内の遺跡



第４図　嘉徳遺跡発掘資料１（河口ほか 1974 より）

庭式土器・素文土器・喜念Ⅰ式土器・宇宿上層式ｂ土器・赤連系土器がある（第４図）。これらの中でも嘉徳Ⅰ式Ａ土器・嘉徳Ⅱ式土器を中心に、面縄東洞式土器・凹線文土器・面縄西洞式土器が主体的に出土している（河口ほか 1974）。これらのことから、嘉徳遺跡は貝塚時代前４期を中心に、貝塚時代前３期～前５期にかけての遺跡と考えられる。

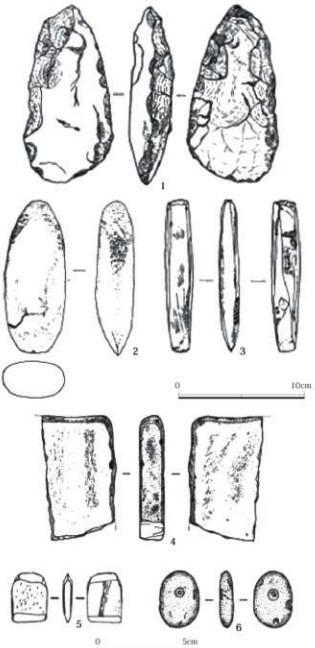
また市来式土器など、南九州からの搬入土器も出土している。嘉徳遺跡では、市来式土器を模倣した在地土器も確認され、市来式土器の影響を見ることができる。

嘉徳遺跡より出土した石器の多くは叩石で、その次に石斧が続き、他には石皿・砥石・石錘・錘飾・小型鑿形石器などがある（第５図）。石斧には、砂岩・頁岩・変成岩などの石材が使用される。石斧の種類は半磨製石斧・磨製石斧・打製石斧が確認される。石皿・砥石は砂岩製である。小型鑿形石器は頁岩製である。全面が研磨され、両端には刃がつけられている。錘飾は変成岩製で、両面はわずかに研磨される。中央よりやや上に両面穿孔される。

・嘉徳集落遺跡（525-4-0）

嘉徳集落遺跡は、1988（昭和 63）年に鹿児島県教育委員会による分布調査により発見された（鹿児島県教育委員会 1990）。

嘉徳集落遺跡に関連する遺物は、現在の嘉徳集落内で採集できることから、嘉徳集落



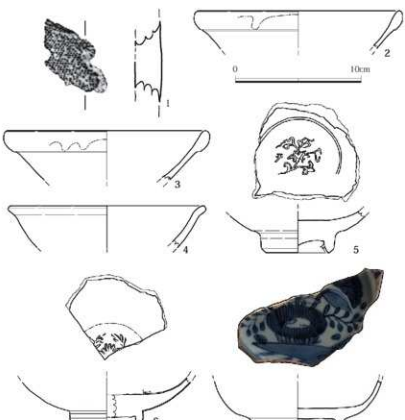
第５図　嘉徳遺跡発掘資料２（河口ほか 1974 より）

第６図　嘉徳遺跡

第７図　嘉徳遺跡出土遺物

第８図　嘉徳集落遺跡遠景

第９図　嘉徳集落遺跡採集遺物



第 10 図　嘉徳集落遺跡採集遺物実測図（1 のみ S ＝ 1/2、他は S ＝ 1/3）

遺跡は、嘉徳集落と同じ砂丘地上に位置し、その遺跡範囲は集落範囲と同規模のものと推定される。（第３図）。

嘉徳集落遺跡では、兼久式土器・布目圧痕土器・カムィヤキ・青磁・白磁・青花・本土産陶磁器・本土産陶器などが採集される。

第 10 図－１は布目圧痕土器で 9 世紀後半～ 10 世紀代のものである。第 10 図-2･3 は白磁の碗で、口縁部が玉縁状に肥厚する。大宰府条坊跡における分類（以下、大宰府○類、宮崎編 2000）のⅣ類にあたり、年代は 11 世紀後半～ 12 世紀前半である。

第 10 図 - 4 ～ 6 は青磁の碗である。4 は口縁部が外反する。上田秀夫による分類（以下、上田○類、上田 1982）のＤⅡ類にあたり、年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。5 は見込に陰圏線と印花文が見られる。釉を全面に施釉した後、外底面の釉を剥ぎ取る。6 は見込に陰圏線と印花文が見られる。釉を見込から高台畳付にかけて施釉する。年代は 14 遺跡後半～ 15 世紀前半である。第 10 図 - 7 は青花の皿で、見込には草花文が見られる。釉を内底から畳付まで施釉した後、畳付の釉を剥ぎ取る。景徳鎮窯産で、17 世紀後半～ 18 世紀代のものである。

（２）節子集落

・節子集落遺跡（525-5-0）

節子集落は伊須湾の北岸、最も外洋側に位置する集落である。集落の北・東・西側は山に囲まれる。

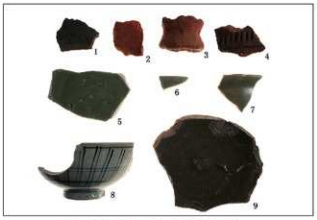
集落後方には沖積地が見られ、山裾近くまで広がる。集落の南側には入り江が広がり、入り江に沿って砂丘地が発達する。節子集落はその砂丘上にある。また集落の西側には節子川が流れる。

節子集落遺跡は、1988（昭和 63）年に、鹿児島県教育委員会による分布調査によって発見された（鹿児島県教育委員会 1990）。節子集落遺跡に関わる遺物は、現在の節子集落内全域で採集される。このことから節子集落遺跡は、節子集落と同じ砂丘地上に位置し、その遺跡範囲は集落範囲とほぼ同規模のものと推定される（第 13 図）。

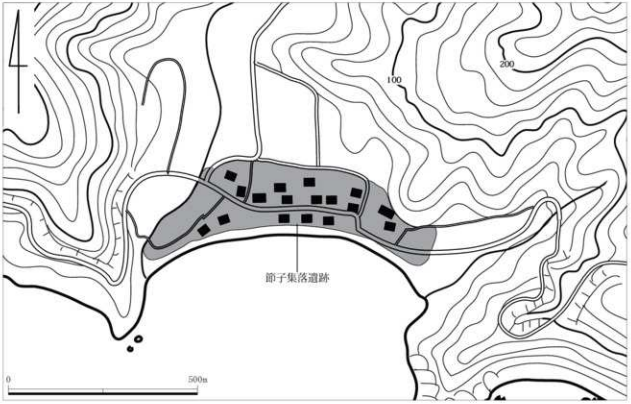
節子遺跡では、嘉徳式土器・弥生系土器・布目圧痕土器・カムィヤキ・青磁・白磁・本土産陶磁器・本土産陶器・沖縄産陶器などが採集される。

また完形品のカムィヤキの壺が、節子集落後方の畑地（第 14 図・第 17 図-4）、節子川西側の畑（第 15 図）、節子川に合流する小川（第 16 図）で発見されている（鼎 2007）。

第 11 図　節子集落遺跡遠景



第 12 図　節子集落遺跡採集遺物



第 13 図　節子集落内の遺跡

第 17 図 - 1 は、嘉徳式土器で横位の沈線文を 2 本施し、その間を刺突文で充填する。貝塚時代前 4 期のものである。第 17 図 - 2 は弥生系土器で、底面を上げ底にした脚台状の底部である。貝塚時代後 1 期前半のものである。第 17 図 - 3 は布目圧痕土器で、年代は 9 世紀後半～ 10 世紀代である。

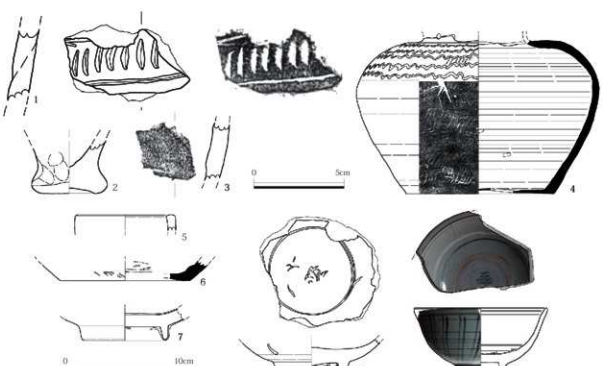
第 17 図 - 4 は、ほぼ完形のカムイヤキの壺である。頸部から肩部にかけて波状文が施される。外面には平行文タタキ目、内面には格子目当て具痕がそれぞれ見られる。器壁は薄手である。また頸部・底面には、穿孔されている。第 17 図 - 6 はカムィヤキの壺か甕である。外面に平行文タタキ目、内面に格子目当て具痕がそれぞれ見られる。4・6 はカムィヤキ A 群（新里編 2005）にあたり、年代は 11 世紀後半～ 13 世紀前半である。

第 17 図 - 5 は青磁の香炉である。第 17 図 - 7・8 は青磁碗である。7 の見込には、不明確だが印花文が見られる。釉を全面に施釉した後、外底面の釉を輪状に剥ぎ取る。年代は 14 世紀後半～ 15 世紀代である。8 の外面胴下部には蓮弁文、見込には印花文が見られる。釉を全面に施釉した後、外底面の釉を輪状に剥ぎ取る。上田 B Ⅲ類（上田 1982）にあたり、年代は 15 世紀代である。第 17 図 -9 は、本土産陶磁器の肥前染付碗である。年代は 19 世紀前半～中頃のものである。

第 14 図　節子集落伝世品 1

第 15 図　節子集落伝世品 2

第 16 図　節子集落伝世品 3



第 17 図　節子集落遺跡採集遺物実測図

(3) 網野子集落

・網野子サト遺跡（525-23-0）

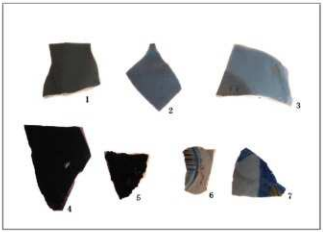
網野子集落は伊須湾の北側に位置し、周囲には節子集落や勝浦集落がある。集落の北・東・西側は山に囲まれ、集落の東西には山裾が迫る。集落後方には沖積地が見られ、山裾近くまで広がる。集落の南側には入り江が広がり、入江にそって砂丘地が発達する。網野子集落はその砂丘地上にある。また集落の南東側には、網野子川が流れている。

網野子サト遺跡に関する遺物は、網野子集落内でも、集落の中央部にある公民館周辺で採集される。このことから網野子サト遺跡は、網野子集落と同じ砂丘地上に位置し、その遺跡範囲は集落の中央部周辺、網野子川より西側に広がるものと推定される（第 21 図）。

網野子サト遺跡では、青磁・白磁・本土産陶器・沖縄産陶器などが採集される。

第 19 図 - 1 は青磁碗である。外面には鎬蓮弁文が見られる。年代は 13 世紀後半～ 14 世紀前半である。第 19 図 - 2・3 は白磁皿である。釉を胴部内外面、および内底面に施釉し、外底面には施釉しない。大宰府Ⅸ類（宮崎編 2000）にあたり、13 世紀後半～ 14 世紀前半のものである。

第 18 図　網野子サト遺跡遠景



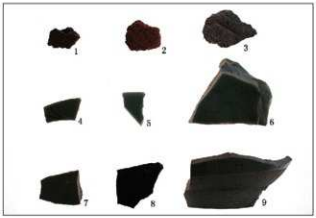
第 19 図　網野子サト遺跡採集遺物

第 20 図　網野子サト遺跡主要採集地

第 21 図　網野子集落内の遺跡

第 22 図　勝浦集落内の遺跡

第 23 図　勝浦集落遺跡遠景



第 24 図　勝浦集落遺跡採集遺物

(4) 勝浦集落

・勝浦集落遺跡 (525-6-0)

勝浦集落は、伊須湾の北側、伊須湾の奥にある集落である。集落の北・東・西側は山に囲まれ、集落の北西側には山裾が迫る。集落後方には沖積地が見られ、山裾近くまで広がる。集落の南側には、入り江が見られ、入り江に沿って砂丘地が形成される。勝浦集落はその砂丘地上に位置する。勝浦集落の西側には勝浦川が流れる。

勝浦集落遺跡は、1988（昭和 63）年に鹿児島県教育委員会による分布調査によって発見された（鹿児島県教育委員会 1990）。勝浦集落遺跡に関する遺物は、現在の勝浦集落内で採集できる。このことから、勝浦集落遺跡は勝浦集落と同じ砂丘地上にあり、その遺跡範囲は集落範囲に近いものと推定される（第 22 図）。

勝浦集落遺跡では、布目圧痕土器・青磁・本土産陶器・沖縄産陶器・滑石片などが採集される。

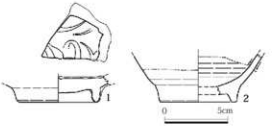
第 25 図 - 1 は青磁碗である。見込に印花文が見られる。釉を全面に施釉した後、外底面の釉を輪状に剥ぎ取る。龍泉窯産である。

第 25 図 - 2 は沖縄産陶器の碗である。胴下部はわずかに丸みを持ち、腰部には浅い抉りが見られる。灰釉を胴下部まで施釉する。年代は 17 世紀代～ 18 世紀前半である。

(5) 伊須集落

・伊須集落遺跡 (525-7-0)

伊須集落は伊須湾の南側、外洋側に近い位置にある集落である。集落の東・西・南側は山に囲まれる。集落後方には沖積地が見られ、山裾近くまで広がる。集落の北西側から、南東側にかけて入



第 25 図　勝浦集落遺跡採集遺物実測図

り江が見られ、その入り江にそって砂丘地が発達する。この砂丘地の内、山尾根に分断された北西側の砂丘地上に、伊須集落は位置する。伊須集落からは対岸の節子集落を目視できる。

伊須集落遺跡は、1988（昭和 63）年に鹿児島県教育委員会による分布調査によって発見された（鹿児島県教育委員会 1990）。伊須集落遺跡に関する遺物は、現在の伊須集落内で採集できるほか、山尾根を挟んで南西側の砂丘地からも採集できる。このことから伊須集落遺跡は、伊須集落と同じ砂丘地上に位置し、その遺跡範囲は伊須集落全体から、山尾根を挟んで南西側まで広がると推定される（第 29 図）。

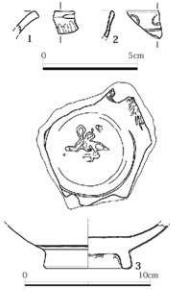
伊須集落遺跡では、搬入土器・青磁・青花・本土産陶磁器・本土産陶器などが採集される。その他、1988（昭和 63）年には土師質土器も採集されている（鹿児島県教育委員会 1990）。

第 28 図 - 1 は搬入土器である。小破片のため判然としないが、口縁部が外反するものと推測され、外面には棒状工具による細かいナデを施す。弥生土器との関連を考えたい。

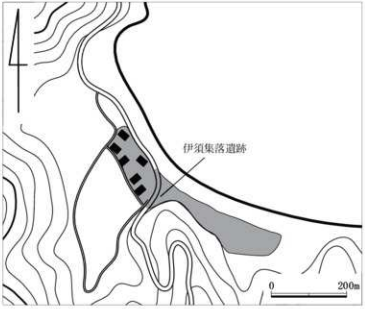
第 28 図 - 2・3 は龍泉窯産の青磁碗である。2 は口縁部外面に雷文が見られる。上田 C 類（上田 1982）にあたり、14 世紀後半～ 15 世紀前半のものである。3 は胴下部外面に、圏線が一条見られる。胴部内面に唐草文、見込には印花文と陰圏線が見られる。釉を全面に施釉した後、外底面の釉を蛇の目状に剥ぎ取る。

第 26 図　伊須集落遺跡遠景

第 27 図　伊須集落遺跡採集遺物



第 28 図　伊須集落遺跡採集遺物実測図



第 29 図　伊須集落内の遺跡

(6) 蘇刈集落

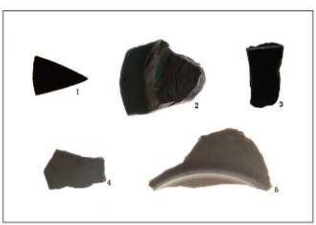
・蘇刈集落遺跡（525-24-0）

蘇刈集落は奄美大島側の東側に位置する集落で、大島海峡に面している。集落の北・東・西側は山に囲まれ、蘇刈集落の東側は山裾に接している。集落後方には沖積地が見られ、山裾近くまで広がる。集落の南側は入り江となり、入り江にそって砂丘地が形成される。蘇刈集落は、その砂丘地上に位置する。集落の東側には蘇刈川が流れる。また蘇刈集落の南西方向には外洋を望むことができる。

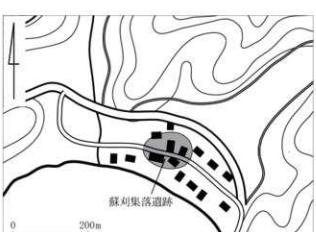
蘇刈集落遺跡に関する遺物は、現在の蘇刈集落内で採集できるが、集落の中心部から北西側の山裾周辺に、採集地点が限られている。このことから、蘇刈集落遺跡は蘇刈集落と同じ砂丘地上に位置し、その遺跡範囲は集落の中心部から、北西側に留まるものと推定される（第 32 図）。また砂丘地の広さに反して、遺跡範囲が非常に限られていることから、埋め立てや基盤整備などで遺跡がすでに破壊されている可能性もある。

蘇刈集落遺跡では、カムィヤキ・青磁・本土産陶磁器・本土産陶器などが採集できる。第 31 図 - 2 は青磁碗である。釉を外底面を除いて、全面に施釉する。

第 30 図　蘇刈集落遺跡遠景



第 31 図　蘇刈集落遺跡採集遺物



第 32 図　蘇刈集落内の遺跡

第 33 図　蘇刈集落遺跡主要採集地

(7) 嘉鉄集落

・嘉鉄集落の概要

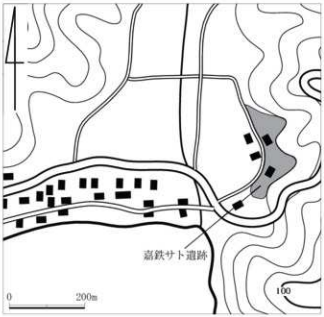
嘉鉄集落は奄美大島側の北東側に位置する集落で、大島海峡に面している。周辺には蘇刈集落や清水集落がある。集落の北・東・西側は山に囲まれ、集落の東側は山裾が迫る。集落後方には沖積地が見られ、山裾近くまで広がる。集落の南側は入り江となり、入り江に沿って砂丘地が形成される。嘉鉄集落の中心は、入り江に沿った砂丘地上にあるが、東側の山裾近くの沖積地にも、集落の一部がある。

・嘉鉄サト遺跡（525-25-0）

嘉鉄サト遺跡に関する遺物は、嘉鉄集落の一部が所在する、山裾近くの沖積地で採集され、採集地点は、周辺よりやや標高が高い平坦地となる。このことから嘉鉄サト遺跡は、嘉鉄集落東側の沖積地にあり、その遺跡範囲は平坦地一帯と推定される（第 34 図）。

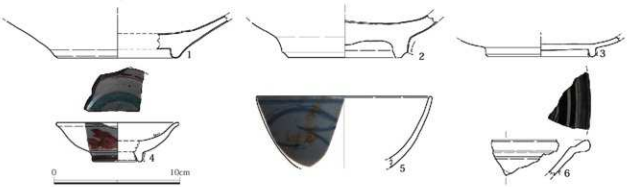
嘉鉄サト遺跡では、土器・カムィヤキ・白磁・青磁・青花・輸入陶磁器・本土産陶磁器・本土産陶器・沖縄産陶器などが採集される。

第 36 図－１は青磁盤である。内面には蓮弁文、見込には陽圏線が見られる。釉を全面に施釉する。龍泉窯産で、年代は 14 世紀中頃～ 15 世紀中頃である。第 36 図 -2 は青磁皿である。釉を内面から畳付にかけて施釉する。第 36 図



第 34 図　嘉鉄集落内の遺跡１

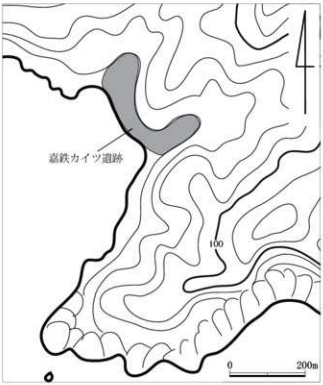
第 35 図　嘉鉄サト遺跡採集遺物



第 36 図　嘉鉄サト遺跡採集遺物実測図

第 37 図　嘉鉄サト遺跡遠景

第 38 図　嘉鉄カイツ遺跡遠景



第 39 図　嘉鉄集落内の遺跡 2

-3 は白磁皿である。釉を全面に施釉した後、畳付の釉を剥ぎ取る。徳化窯産で、18 世紀後半～ 19 世紀代のものである。

第 36 図 -4 は輸入陶磁器の色絵皿である。内外面に文様が見られる。釉を全面に施釉した後、見込の釉を輪状に、畳付の釉を剥ぎ取る。南中国産で、18 世紀～ 19 世紀のものである。第 36 図 -5 は本土産陶磁器の染付碗である。口縁部の外面に圏線と雲龍文、内面に圏線が見られる。肥前産で、17 世紀後半のものである。第 36 図 -6 は本土産陶器の鉢である。口縁部は鍔縁状で、内面に白土による刷毛目の波状文が見られる。肥前産で 18 世紀代のものである。

・嘉鉄カイツ遺跡（525-14-0）

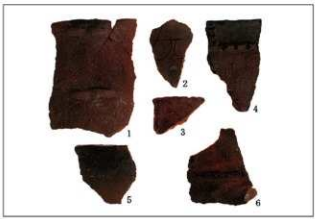
嘉鉄カイツ遺跡は、嘉鉄集落の南東、蘇刈集落より先の岬にある。嘉鉄カイツ遺跡は 1973（昭和 48）年、砂取り工事の際発見され、この工事によって遺跡の大半は破壊された（河口 1974）。そのため遺跡の範囲は判然としないが、河口貞徳による報告（河口 1974）と若干の採集遺物から、岬の南西部にある砂丘地全体が、嘉鉄カイツ遺跡の遺跡範囲になると推定される（第 39 図）。

嘉鉄カイツ遺跡周辺の地形としては、遺跡後方には山裾が迫り、後方の谷から小川が流れる。また、遺跡前方の海にはリーフも見られる。

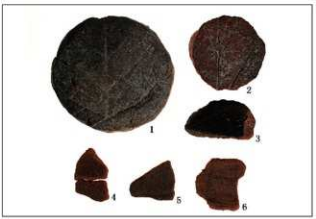
嘉鉄カイツ遺跡では、スセン當式土器・兼久式土器・布目圧痕土器などが採集される。

第 42 図 - 1 はスセン當式土器の甕である。口縁部がやや外傾し、胴部が強く張る。口縁部と胴部に横位の短い突帯を貼り付け、突帯の横に、沈線文を施す。貝塚時代後 1 期後半のものである。第 42 図 - 2 は貝塚時代後期の土器と推定される。外面に沈線文を施す。

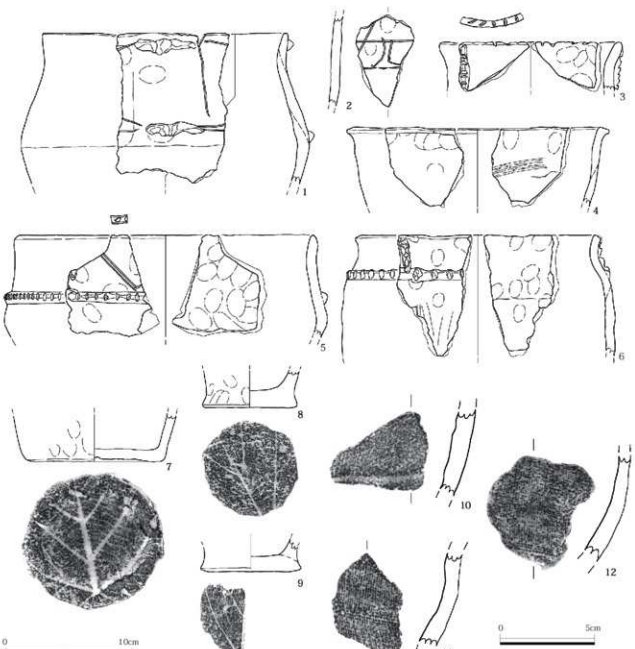
第 42 図 - 3 ～ 9 は兼久式土器の甕で、貝塚時代後 2 期のものである。3 は口縁部が外反する。口唇部に刻目を施し、口縁部には縦位の刻目突帯を貼り付ける。4 は口縁部が外傾し、胴部は張らない。5 は口縁部が直口し、胴部が強



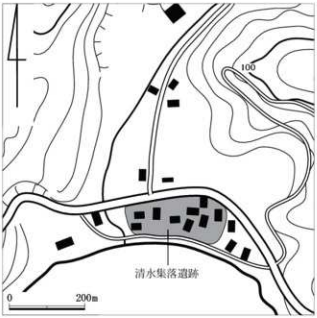
第 40 図　嘉鉄カイツ遺跡採集遺物１



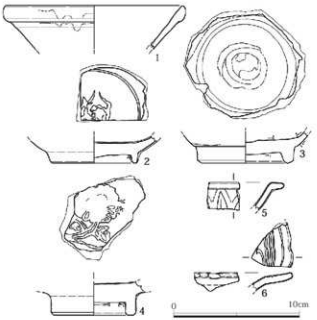
第 41 図　嘉鉄カイツ遺跡採集遺物２



第 42 図　嘉鉄カイツ遺跡採集遺物実測図



第 43 図　清水集落内の遺跡



第 44 図　清水集落遺跡採集遺物実測図

第 45 図　清水集落遺跡採集遺物

く張る。口唇部には刻目を施す。口縁部に縦位の刻目突帯、胴上部に横位の刻目突帯を貼り付け、口縁部に沈線文を施す。6 は口縁部がやや外反し、胴部が張る。口縁部に縦位の刻目突帯、胴上部に横位の刻目突帯を貼り付ける。7 は大型の平底である。8・9 はくびれ平底である。第 42 図 - 10 ～ 12 は布目圧痕土器である。年代は 9 世紀後半～ 10 世紀代である。

(8) 清水集落

・清水集落遺跡 (525-26-0)

清水集落は奄美大島側の北東側に位置する集落で、大島海峡に面している。周辺には嘉鉄集落や古仁屋がある。集落の北・東・西側は山に囲まれる。集落後方より、山裾近くまで沖積地が広がる。集落の南側は入り江となり、入り江に沿って砂丘地が形成される。その砂丘地上に清水集落がある。また清水集落からは、加計呂麻島の渡連集落や諸数集落を見ることができる。

清水集落遺跡に関する遺物は、現在の清水集落内で採集できることから、清水集落遺跡は、清水集落と同じ砂丘地上に位置し、その遺跡範囲は集落範囲に近いものと推定される（第 43 図）。

清水集落遺跡では、カムィヤキ・青磁・白磁・青花・褐釉陶器・本土産陶磁器・沖縄産陶器などが採集される。

カムィヤキの器壁は厚手である。外面のタタキ目はナデ消され、内面には細い平行文当て具痕が残る。カムィヤキ B 群（新里編 2005）にあたり、

第 46 図　清水集落遺跡遠景

13 世紀後半～ 14 世紀代のものである。

第 44 図 - 1 は白磁碗で、口縁部が玉縁状に肥厚する。大宰府Ⅳ類（宮崎編 2000）にあたり、11 世紀後半～ 12 世紀前半のものである。

第 44 図 - 2・5・6 は青磁皿である。2 の見込には、不明瞭だが、印花文と陽圏線が見られる。釉を全面に施釉した後、外底の釉を剥ぎ取る。年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。5 は外面に蓮弁文が見られる。龍泉窯産で、14 世紀後半～ 15 世紀代のものである。6 は稜花状の口縁部をもつ。内面にはラマ式蓮弁文が見られる。龍泉窯産で、14 世紀後半～ 15 世紀代のものである。

第 44 図 - 4 は青磁碗である。見込に印花文が見られる。釉を全面に施釉した後、外底面の釉を蛇の目状に剥ぎ取る。第 44 図-3 は染付碗である。胴下部外面に文様が見られる。釉を胴部内面から、腰部外面まで施釉する。福建・広東系窯産で、17 世紀代のものである。

(9) 手安集落

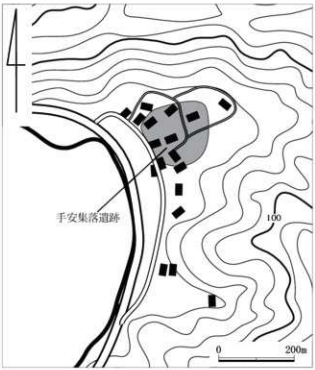
・手安集落遺跡（525-27-0）

手安集落は、奄美大島側のほぼ中央に位置する集落で、大島海峡に面している。周辺には須手集落や久根津集落がある。集落の北・東・南側は山に囲まれる。集落の西側には入り江が見られ、干潟が広がる。干潟より東側には、山裾近くまで沖積地が広がり、沖積地の海側に手安集落がある。

手安集落遺跡に関する遺物は、現在の手安集落の中心部で採集できる。このことから、手安集落

第 47 図　手安集落遺跡遠景

第 48 図　手安集落遺跡主要採集地

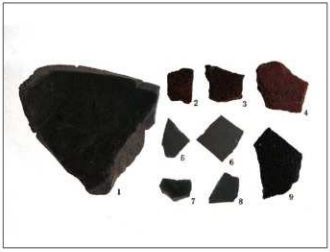


第 49 図　手安集落内の遺跡

第 50 図　手安集落遺跡採集遺物

第51図　須佐礼集落内の遺跡

第52図　油井スサレ遺跡遠景



第53図　油井スサレ遺跡採集遺物

遺跡は手安集落と同じ沖積地上にあり、その遺跡範囲は手安集落の中心部周辺と推定される（第49図）。

手安集落遺跡では土器・カムィヤキなどが採集される。

(10) 須佐礼集落

・油井スサレ遺跡（525-50-0）

須佐礼集落は、大奄美大島側のほぼ中央に位置する集落で、大島海峡に面している。周辺には久根津集落や油井集落がある。集落の北・東・南側は山に囲まれ、集落の北・南側には山裾が迫る。西側には入り江が見られ、干潟が広がる。干潟より東側には、山裾近くまで沖積地が広がり、沖積地の海側に須佐礼集落がある。また集落の中心には須佐礼川が流れる。

油井スサレ遺跡に関する遺物は、現在の須佐礼集落内で採集でき、特に南東側の山裾近くで多く確認される。このことから油井スサレ遺跡は、須佐礼集落と同じ沖積地上に位置し、その遺跡範囲は集落南東側の山裾周辺に広がると推定される（第51図）。

油井スサレ遺跡では土器・青磁・白磁・本土産陶磁器・本土産陶器などが採集される。

第53図-1は青磁碗である。見込には印花文が見られる。釉を全面に施釉した後、外底面の釉を剥ぎ取る。

第54図　油井スサレ遺跡主要採集地

第３節　西方地区

(1) 古志集落

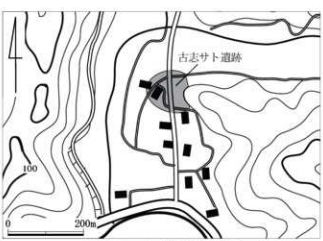
・古志サト遺跡（525-28-0）

古志集落は久慈湾の北東側に位置する。集落の北・東・西側は山で囲まれる。集落の南側は入り江となり、干潟が見られる。干潟より北側は沖積地となり、山裾近くまで広がる。古志集落はその沖積地の陸側に奥まった場所にあり、南東部より張り出した山尾根に沿って集落が展開する。

古志サト遺跡に関する遺物は、古志集落内でも特に集落の北側にあるミャー（集落の広場）周辺で採集され、集落内全体では採集されない。このことから古志サト遺跡は、古志集落と同じ沖積地上にあり、その遺跡範囲は集落北側のミャー周辺に広がると推定される（第 55 図）。

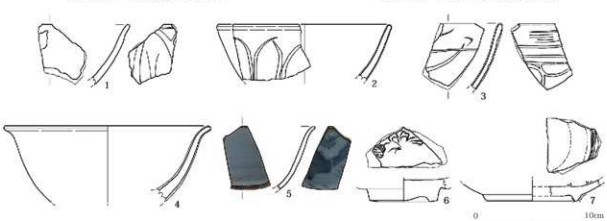
古志サト遺跡では、土器・カムィヤキ・青磁・白磁・青花・本土産陶磁器・本土産陶器などが採集される。

第 57 図 - 1 ～ 4 は青磁碗である。1 は外面に片彫の蓮弁文が見られ、弁の中心には稜を成す。大宰府Ⅱｂ類（宮崎編 2000）にあたり、年代は 13 世紀前後ないし 13 世紀前半である。2 は外面に片彫の蓮弁文が見られ、弁に稜は無い。龍泉窯産で、上田ＢⅡ類（上田 1982）にあたり、年代は 14 世紀中頃～ 15 世紀前半である。3 は外面に雷文とラマ式蓮弁文、内面に草花文が見られる。龍泉窯産で、上田ＢⅡ類（上田 1982）にあたり、年代は 14 世紀中頃～ 15 世紀前後である。4 は口縁部が外反する。上田ＤⅡ類（上田 1982）にあたり、年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。



第 55 図　古志集落内の遺跡

第 56 図　古志サト遺跡採集遺物



第 57 図　古志サト遺跡採集遺物実測図

第57図－6は白磁碗である。見込に印花文が見られる。釉を内面に施釉し、外面は露胎している。ピロースクタイプⅢ類にあたり、14世紀後半～15世紀前半である。

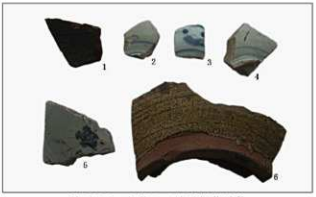
第57図－5・7は青花である。5は碗で、内外面に文様が見られる。徳化窯系（福建）のもので、年代は18世紀後半～19世紀初頭である。7は皿である。釉を全面に施釉した後、畳付および内底面の釉を輪状に剥ぎ取る。

(2) 伊目集落

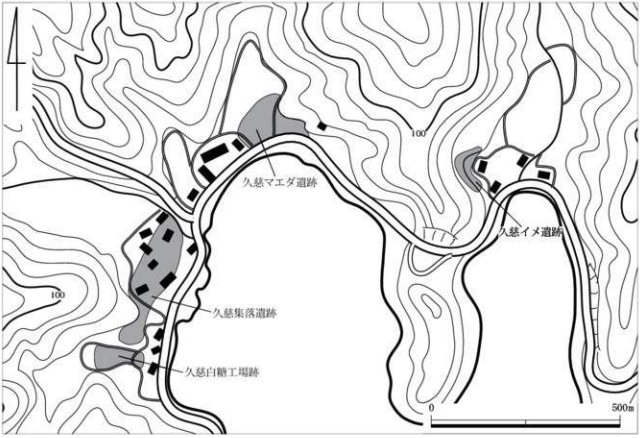
・久慈イメ遺跡（525-29-0）

伊目集落は久慈湾の北側に位置する。集落の北・東・西側は山で囲まれ、南側は入り江となる。入り江には干潟が見られ、干潟より北側には沖積地が広がる。伊目集落はその沖積地の海側にあり、集

第58図　久慈イメ遺跡



第59図　久慈イメ遺跡採集遺物



第60図　伊目集落・久慈集落内の遺跡

落の中心には伊目川が流れる。

久慈イメ遺跡に関する遺物は、伊目集落内の西側、山尾根に挟まれた沖積地で採集される。また遺物の採集される一帯は傾斜地となる。このことから久慈イメ遺跡は、伊目集落の西側の沖積地上にあり、その遺跡範囲は傾斜地一帯に広がると推定される（第 60 図）。

久慈イメ遺跡では本土産陶磁器・本土産陶器・沖縄産陶器などが採集される。また久慈イメ遺跡のある伊目集落内では、後述する久慈白糖工場跡に使用されていた耐火煉瓦や白糖石が、塀や貯水槽の材料として、使用されている。

(3) 久慈集落

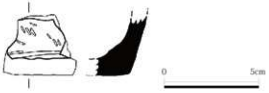
・久慈集落の概要

久慈集落は久慈湾の北西側に位置する。集落の北・西・南側は山に囲まれ、東側が入り江となる。入り江には干潟が見られ、干潟より西側に沖積地が広がる。久慈集落はその沖積地上にある。集落内を久慈川が流れており、久慈川より南側が集落の中心部となる。

・久慈マエダ遺跡（525-30-0）

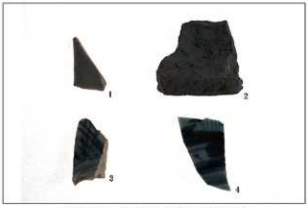
久慈マエダ遺跡に関する遺物は、久慈集落の北端にある沖積地の海側で採集される。このことから久慈マエダ遺跡は、久慈集落北端の沖積地上にあり、その遺跡範囲は海側に近い沖積地に広がると推定される（第 60 図）

久慈マエダ遺跡では、須恵器・本土産陶磁器などが採集される。第 65 図は須恵器で、器種は壺か甕と推測される。外面のタタキ目はナデ消され、内面には平行当て具痕が若干残る。年代は 9 世紀後半～ 10 世紀代である。



第 65 図　久慈マエダ遺跡採集遺物実測図

第 61 図　久慈マエダ遺跡



第 62 図　久慈マエダ遺跡採集遺物

第 63 図　久慈集落遺跡

第 64 図　久慈集落遺跡採集遺物

第66図　久慈白糖工場跡推定地

第67図　白糖石（旧久慈小学校塀）

第68図　耐火煉瓦採集状況（久慈集落）

第69図　赤煉瓦再利用例（芝集落）

・久慈集落遺跡（525-31-0）

久慈集落遺跡に関する遺物は、現在の久慈集落内で採集される。このことから久慈集落遺跡は、久慈集落と同じ沖積地上にあり、その遺跡範囲は久慈集落の中心部から、集落の南側に広がると推定される（第60図）

久慈集落遺跡では、布目圧痕土器・カムィヤキ・青磁・沖縄産陶器などが採集される。カムィヤキの器壁は薄手で、内外面のタタキ目・当て具痕はナデ消される。カムィヤキA群（新里編2005）で、11世紀後半～13世紀前半のものである。

・久慈白糖工場跡

薩摩藩統治時代末期、黒糖の価格下落を受け、より高価な白糖を生産することを目的に、薩摩藩がグラバー商会の援助を得て、奄美大島に四つの白糖工場を建設した。そのうちの一つが久慈白糖工場跡である。白糖工場建設には、グラバー商会より派遣された、イギリス人建築技師のトーマス・ウォートルスと製糖技師のマッキンタイラーが携わった。白糖工場には奄美大島で生産された赤煉瓦、イギリスより輸入された耐火煉瓦や白糖石と呼ばれる凝灰岩の切り石が、建築材として使用された。そして白糖の精製には蒸気機関を使用した機器が用いられた。

久慈白糖工場跡は、1866（慶応2）年から1867（慶応3）年にかけて建設が行われ、1867（慶応3）年から1871（明治4）年まで操業した。建物の規模は縦90m、横27mのトタン葺の二階建て、煙突は7本あり、その内、36mの煙突が1本、残り6本は18mあったと言われている。ただ壁材が煉瓦か材木かは不明である。

久慈白糖工場跡の操業終了後、工場の建築材は民間に払い下げられた。赤煉瓦や耐火煉瓦、白糖石は、久慈集落を中心に周辺の集落で再利用されており、加計呂麻島の芝集落でも、赤煉瓦が石垣の一部として使用されている（第67・69図）。このような建築材の分布は、久慈集落の中心部より、山尾根を挟んで南側の沖積地に顕著である。そのため、この沖積地に久慈白糖工場跡があ

ると推定される（第 60 図）。そして 2016（平成 28）年の鹿児島県立埋蔵文化財センターの調査により、久慈白糖工場跡の位置が、明らかになりつつある（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2016）。

(4) 管鈍集落

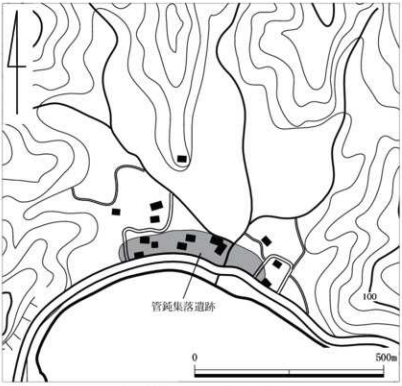
・管鈍集落遺跡（525-8-0）

管鈍集落は奄美大島側の西側に位置する集落で、大島海峡に面している。集落の北・東・西側は山に囲まれ、集落の後方は沖積地となり、山裾近くまで広がっている。集落の南側は入り江となる。入り江に沿って砂丘地が発達しており、その砂丘地上に管鈍集落が位置する。管鈍集落からは、加計呂麻島の実久集落が目視できるほか、外洋も見える。また集落の南西側には管鈍川が流れる。

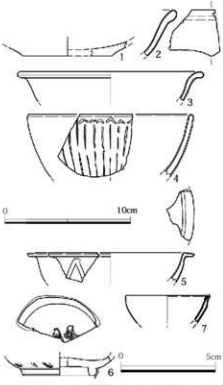
管鈍集落遺跡は 1988（昭和 63）年に、鹿児島県教育委員会によって発見された（鹿児島県教育委員会 1990）。管鈍集落遺跡に関する資料は、現在の管鈍集落内で採集できることから、管鈍集落遺跡は管鈍集落と同じ砂丘地上に位置し、その遺跡範囲は集落の範囲に近いものと推定される（第 72 図）。

第 70 図　管鈍集落遺跡遠景

第 71 図　管鈍集落遺跡採集遺物



第 72 図　管鈍集落内の遺跡

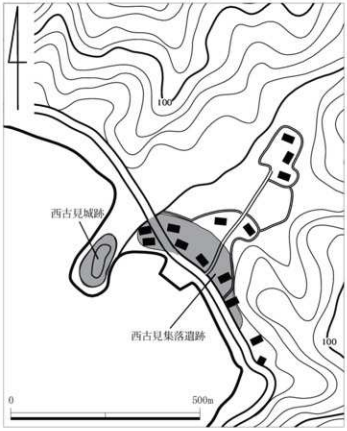


第 73 図　管鈍集落遺跡採集遺物実測図

管鈍集落遺跡では、兼久式土器・布目圧痕土器・土師器・滑石混入土器・青磁・白磁・輸入陶磁器・本土産陶磁器・沖縄産陶器などが採集される。

第73図-1は土師器坏である。第73図-2～4は青磁碗である。2･3は口縁部が外反し、上田DⅡ類(上田1982）にあたる。年代は14世紀後半～15世紀前半である。4は外面に細蓮弁文が見られ、上田BⅣ類（上田1982）にあたる。年代は15世紀後半～16世紀前半である。第73図‐5・6は青磁皿である。5は鍔縁状の口縁部をもつ。外面には蓮弁文が見られ、年代は14世紀後半～15世紀前半である。6は外面に鎬蓮弁文、見込に陽圏線と双魚文が見られる。釉を内面から畳付の一部まで施釉する。年代は14世紀前半～14世紀中頃である。第73図‐7は輸入陶磁器の小坏である。瑠璃釉を外面に施釉し、内面には失透釉を掛け分け、口唇部の釉を剝ぎ取る。徳化窯産の可能性があり、年代は18世紀以降である。

第74図　西古見城跡遠景



第75図　西古見集落内の遺跡

(5) 西古見集落

・西古見集落の概要

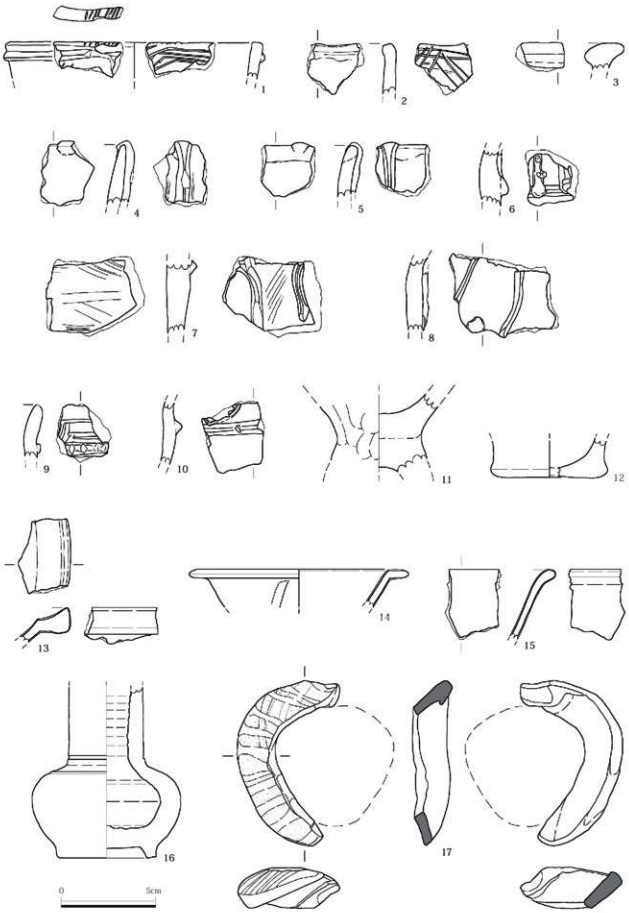
西古見集落は、奄美大島側の諸集落で最も西側に位置する集落である。集落の北･東･南側は山に囲まれる。集落後方から山裾にかけて沖積地が広がる。集落の南西側には入り江が広がり、外洋を望む。そして入り江に沿うように砂丘地が発達し、その砂丘地上に西古見集落が位置している。また集落の北西側には西古見川が流れる。

・西古見城跡（525-2-0）

西古見城跡は、西古見集落の南西側にある岬にあったとされるが（第74図）、西古見城跡に関連する遺物は未だ採集されていない。遺跡そのものは、すでに消失したとも指摘され（鹿児島県教育委員会1987）、西古見城跡の内容は不明である。また西古見城跡はウミグスクとも呼ばれている（西古見慰霊碑建立実行委員会1994）。

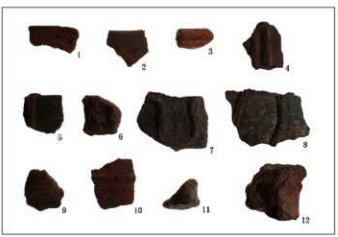
・西古見集落遺跡（525-9-0）

西古見集落遺跡は1988（昭和63）年に、鹿児島県教育委員会による分布調査によって発見された（鹿児島県教育委員会1990）。西古見集落遺跡に関連する遺物は、現在の西古見集落内で採集されることから、西古見集落遺跡は西古見集落と同じ砂丘地上に位置し、その遺跡範囲は集落範囲と同規模のものと推



第 76 図　西古見集落遺跡採集遺物実測図

第 77 図　西古見集落遺跡遠景



第 78 図　西古見集落遺跡採集遺物 1

第 79 図　西古見集落遺跡採集遺物 2

第 80 図　西古見集落遺跡
採集フイゴの羽口

第 81 図　西古見集落遺跡
採集貝輪

定される（第 75 図）。

西古見集落遺跡では、弥生系土器・スセン當式土器・兼久式土器・青磁・褐釉陶器・沖縄産陶器・貝製品・フイゴの羽口・鉄滓などが採集される。

第 76 図－ 1 ～ 3 は弥生系土器の甕で、貝塚時代後 1 期前半のものである。1 は口縁部が外傾する。口唇部には沈線文を施す。外面には、細い突帯を貼り付け、その下に沈線文を施し、内面にも沈線文を施す。2 は口縁部が直口し、外面に沈線文を施す。3 は口縁部が外反し、内面の屈曲部が張り出す。

第 76 図－ 4 ～ 8・11 はスセン當式土器の甕で、貝塚時代後 1 期後半のものである。4・5 は口縁部がやや外傾し、外面に突帯を縦位に貼り付ける。6 は外面に突帯を縦位・横位に貼り付ける。7 は逆 U 字状の突帯を貼り付ける。8 は斜位か逆 U 字状の突帯と浮文を貼り付ける。11 は中空脚台の底部である。

第 76 図－ 9・10・12 は兼久式土器の甕で、貝塚時代後 2 期のものである。9 は口縁部がやや外傾する。9・10 は共に刻目突帯を貼り付け、その上に沈線文を施す。12 は平底の底部である。

第 76 図－ 13 ～ 15 は青磁である。13 は鍔縁の盤で、15 世紀代のものである。14 は鍔縁の皿で、外面に蓮弁文が見られる。14 世紀後半～ 15 世紀代のものである。15 は碗で、口縁部が外反する。龍泉窯産で、上田 D Ⅱ類（上田 1982）にあたり、14 世紀後半～ 15 世紀前半のものである。第 76 図－ 16 は沖縄産陶器で、壺屋焼の渡名喜瓶である。

第 76 図－ 17 は貝製品で、ゴホウラ製の貝輪である。ゴホウラの背面を利用する。破損面が研磨されており、二次加工の痕跡が見られる。西古見集落遺跡の採集遺物から、貝塚時代後期のものと推測される（第 81 図）。

第４節　実久地区

(1) 実久集落

・実久集落遺跡（525-10-0）

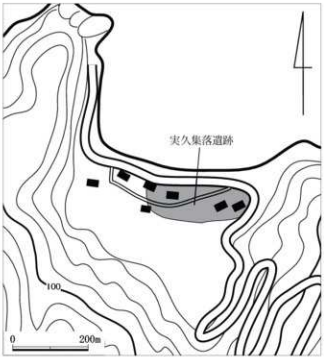
実久集落は加計呂麻島側の諸集落の中で、最も西側に位置する集落である。集落の東・西・南側は山に囲まれ、集落の東西には山裾が迫る。集落後方には沖積地が見られ、山裾近くまで広がる。北側には入り江が見られ、入り江に沿って砂丘地が発達している。その砂丘地上に実久集落が位置している。実久集落からは、奄美大島の管鈍集落を目視できるほか、外洋を望むこともできる。

実久集落遺跡は 1988（昭和 63）年に、鹿児島県教育委員会による分布調査の際、発見された（鹿児島県教育委員会 1990）。

実久集落遺跡に関する遺物は、現在の実久集落内で採集され、特に中心部から東側にかけて多く確認される。このことから実久集落遺跡は、現在の実久集落と同じ砂丘地上にあり、実久集落遺跡の遺跡範囲は現在の集落中心部周辺から、集落の東側、山裾近くまで広がると推定される（第 82 図）。

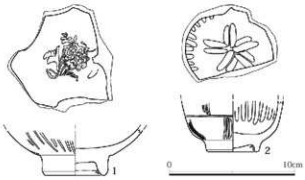
実久集落遺跡では、土器・カムィヤキ・青磁・白磁・青花・本土産陶磁器・沖縄産陶器などが採集される。

第 85 図 - 1・2 は青磁碗である。1 は外面に細蓮弁文、見込に印花文が見られる。釉を全面に施釉した後、外底面の釉を一部剥ぎ取る。年



第 82 図　実久集落内の遺跡

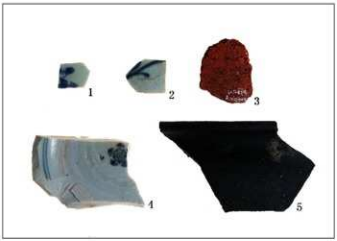
第 83 図　実久集落遺跡遠景



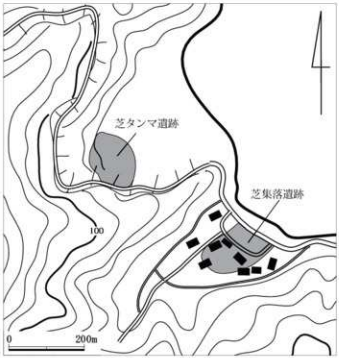
第 85 図　実久集落遺跡採集遺物実測

第 84 図　実久集落遺跡採集遺物

第86図　芝タンマ遺跡遠景



第87図　芝タンマ遺跡採集遺物



第88図　芝集落内の遺跡

代は15世紀後半である。2は外面に圏線と細蓮弁文が見られる。内面には蓮弁文、見込に捻花文がそれぞれ見られる。釉を内面全体と、外面には胴部から高台にかけて施釉する。年代は16世紀代である。

(2) 芝集落

・芝集落の概要

芝集落は加計呂麻島側の北西側に位置する集落で、大島海峡に面している。周辺には実久集落や薩川集落がある。集落の東・西・南側は山に囲まれ、集落の東西には山裾が迫る。集落の後方は沖積地となり、山裾近くまで広がる。集落の北西側には入り江が見られ、入り江に沿って砂丘地が形成されている。その砂丘地上に芝集落がある。また芝集落の西側には芝川が流れている。

・芝タンマ遺跡（525-32-0）

芝タンマ遺跡に関する遺物は、芝集落より山尾根を挟んで、北西方向にある沖積地にて採集される。遺物が採集できる一帯は、沖積地の中でも山裾に近く、周囲より標高が高い平坦地となる。これらのことから、芝タンマ遺跡は芝集落より北西方向にある沖積地上にあり、その遺跡範囲は沖積地の中でも、山裾近くの平坦地一帯になると推定される（第88図）。

芝タンマ遺跡では土器・カムィヤキ・白磁・青花・本土産陶磁器などが採集される。

第91図－1はカムィヤキの壺である。口縁部が外反し、口縁部下端は垂下せず、丸みをおびる。外面のタタキ目はナデ消されるが、内面には格子目当て具痕が見られる。器壁は薄手で、カムィヤキA群（新里編2005）にあたる。年代は11世紀後半～13世紀前半である。

・芝集落遺跡（525-33-0）

芝集落遺跡に関する遺物は、現在の芝集落内、特に集落のミャー（集落の広場）周辺

を中心に、採集され、芝川より西側では未だ遺物は確認できていない。このことから芝集落遺跡は、現在の芝集落と同じ砂丘地上に位置していると考えられる。そして、その遺跡範囲はミャー付近を中心に、芝川より東側に広がると推定される（第 88 図）。

芝集落遺跡では、カムィヤキ・青磁・白磁・青花・褐釉陶器・本土産陶磁器などが採集される。

第 90 図 - 5 はカムィヤキである。外面に平行文タタキ目、内面に格子目当て具痕が見られる。器壁は薄手で、カムィヤキ A 群（新里編 2005）にあたり、年代は 11 世紀後半～ 13 世紀前半である。

第 91 図 - 2 ～ 4 は青磁碗である。2 は外面に蓮弁文が見られ、年代は 13 世紀ごろである。3 は口縁部外面に雷文、胴部外面に蓮弁文が見られる。年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。4 は外面に圏線と細蓮弁文、内面には圏線と見込に印花文がそれぞれ見られる。釉を全面に施釉した後、外底面の釉を蛇の目状に剥ぎ取る。年代は 16 世紀前半ごろである。

第 90 図 - 2 は白磁である。見込に印花文が見られる。年代は 14 世紀代である。

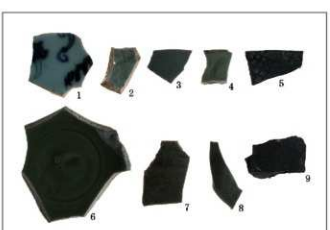
第 89 図　芝集落遺跡遠景

(3) 薩川集落

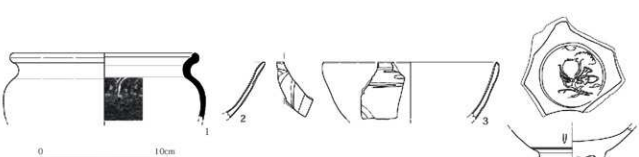
・薩川集落遺跡（525-34-0）

薩川集落は薩川湾の北西側に位置する集落である。周囲には芝集落や瀬武集落がある。集落の北・西・南側は山に囲まれ、集落の北・南側は山裾に接する。集落の東側は入り江となり、干潟が見られる。干潟より西側には沖積地が広がり、沖積地上に薩川集落がある。また集落の南側を薩川川が流れる。

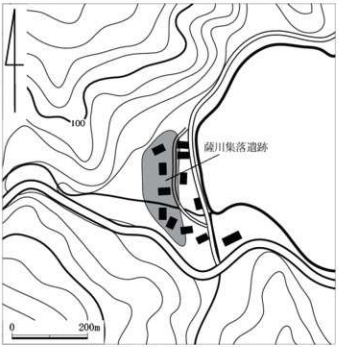
薩川集落遺跡に関する遺物は、現在の薩川集落内で採集され、特に集落北側の山裾近くにある、ミャー付近を中心に多く確認される。このことから薩川集落遺跡は、現在の薩川集落と同



第 90 図　芝集落遺跡採集遺物



第 91 図　芝タンマ遺跡・芝集落遺跡採集遺物実測図



第 92 図　薩川集落内の遺跡

第 93 図　薩川集落遺跡遠景

第 94 図　薩川集落遺跡採集遺物

じ沖積地上にあり、その遺跡範囲はミャー付近を中心に、集落の南端に接する山裾近くまで広がると推定される（第 92 図）。

薩川集落遺跡では、仲原式土器・カムィヤキ・青磁・白磁・本土産陶磁器・本土産陶器などが採集される。

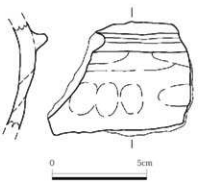
第 95 図は仲原式土器の深鉢で、貝塚時代前 5 期～後 1 期のものである。胴部が強く張り、胴部には突帯を張り付ける。

カムィヤキの器壁は薄手で、外面にタタキ目、内面に当て具痕を残すものが多くみられる。これらはカムィヤキ A 群（新里編 2005）にあたり、年代は 11 世紀後半～ 13 世紀前半である。

第 94 図 - 2・3・7 は青磁碗である。3 は外面に稜の無い片彫蓮弁文が見られる。上田 B Ⅰ類（上田 1982）にあたり、年代は 13 世紀後半～ 14 世紀初頭である。7 は外面に雷文が見られる。上田 C 類（上田 1982）にあたり、年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前後である。2 は口縁部が外反する。上田 D Ⅱ類（上田 1982）にあたり、14 世紀後半～ 15 世紀初頭のものである。

第 94 図 - 11 は青磁盤である。鍔縁状の口縁部をもつ。

第 94 図 - 5 は白磁碗である。内面全体に釉を施釉し、外面は露胎している。大宰府Ⅳ類（宮崎編 2000）にあたり、年代は 11 世紀後半～ 12 世紀前半である。



第 95 図　薩川集落遺跡採集遺物実測図

(4) 瀬武集落

・瀬武サト遺跡（525-35-0）

瀬武集落は薩川湾の南西側に位置する集落である。周囲には薩川集落や木慈集落がある。集落の北・西・南側は山に囲まれる。集落の東側は入り江となり、入り江には干潟が見られる。干潟より西側は沖積地となり、その沖積地上に瀬武集落がある。

瀬武サト遺跡に関する遺物は、瀬武集落内の北西側で採集され、特に山裾近くの周囲より、やや標高の高い一帯で多く確認される。また集落中心部にあるミャー周辺でも、若干遺物が採集される。このことから瀬武サト遺跡は、瀬武集落と同じ沖積地上にあり、その遺跡範囲は集落の北西側を中心としつつ、ミャー周辺まで広がると推定される（第 96 図）。

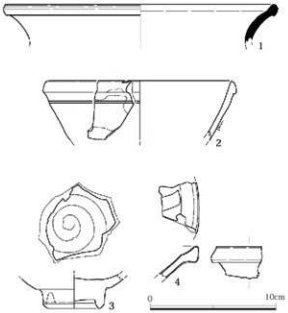
瀬武サト遺跡では、カムィヤキ・青磁・白磁・本土産陶磁器・本土産陶器・沖縄産陶器などが採集される。

第 99 図 - 1 はカムィヤキの壺である。口縁部は外反し、口縁部下端はやや垂下気味である。器壁は薄手で、カムィヤキＡ群（新里編 2005）にあたり、年代は 11 世紀後半～ 13 世紀前半である。

第 99 図 - 2 は白磁碗である。口縁部が玉縁状

第 96 図　瀬武集落内の遺跡

第 97 図　瀬武サト遺跡遠景図



第 99 図　瀬武サト遺跡採集遺物実測図

第 98 図　瀬武サト遺跡採集遺物

第 100 図　阿多地イバタ遺跡範囲

第 101 図　阿多地イバタ遺跡遠景図

第 102 図　阿多地イバタ遺跡採集遺物 1

に肥厚している。釉を内面全体に施釉し、外面には口縁部から、胴上部のみに施釉する。大宰府Ⅳ類（宮崎編 2000）にあたり、年代は 11 世紀後半～ 12 世紀前半である。

第 99 図 - 3 は青磁碗である。釉を内面全体に施釉し、外面には高台まで施釉する。年代は 15 世紀後半～ 16 世紀前半である。これと同時期の資料として、第 98 図 - 6 の碗がある。外面に細蓮弁文が見られる。上田 B Ⅳ類（上田 1982）にあたる。第 99 図 - 4 は青磁盤である。鍔縁状の口縁部をもち、内面には蓮弁文が見られる。

（5）阿多地集落

・阿多地イバタ遺跡（525-36-0）

阿多地集落は加計呂麻島の西側に位置する集落で、外洋に面している。集落の北・東・南側は山に囲まれ、集落の南東側には山裾が迫る。集落後方には沖積地が見られ、山裾近くまで広がる。集落の西側には南北に長い入り江が見られ、その入り江に沿って砂丘地が発達する。砂丘地の内、山尾根を挟んで北側の砂丘地上に阿多地集落がある。また阿多地集落の南側には阿多地川が流れている。

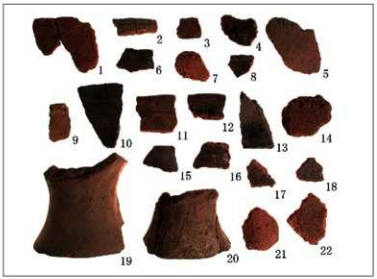
阿多地イバタ遺跡に関する資料は、阿多地集落内で採集される。このことから阿多地イバタ遺跡は、阿多地集落と同じ砂丘地上に位置し、その遺跡範囲は集落の範囲と大きくかわらないものと推定される（第 100 図）。

阿多地イバタ遺跡では、弥生系土器・スセン當式土器・兼久式土器・布目圧痕土器・滑石混入土器・カムィヤキ・青磁・褐釉陶器・本土産陶磁器・本土産陶器・貝製品・石器などが採集される。

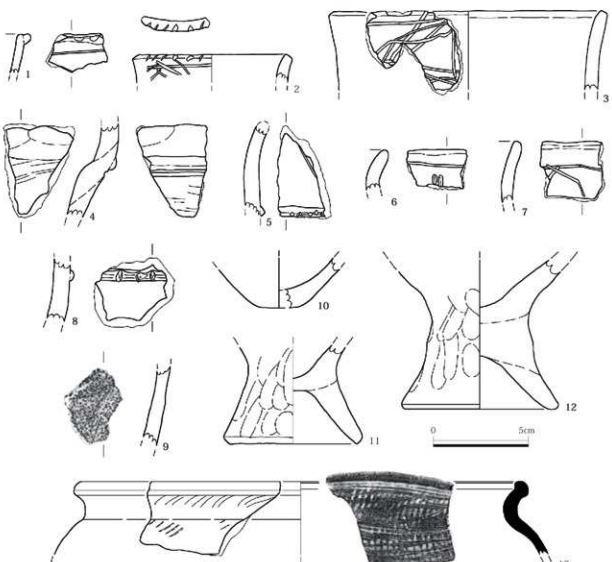
第 104 図 - 1 ～ 3 は弥生系土器の甕で、貝塚時代後 1 期前半のものである。1 は口縁部が外傾する。口唇部近くに刻目突帯を

貼りつけ、口縁部には沈線文を施す。2は口縁部が外傾する。口唇部には刻目、口縁部には不規則な沈線文を施す。3は口縁部が外傾し、口縁部には不規則な沈線文を施す。

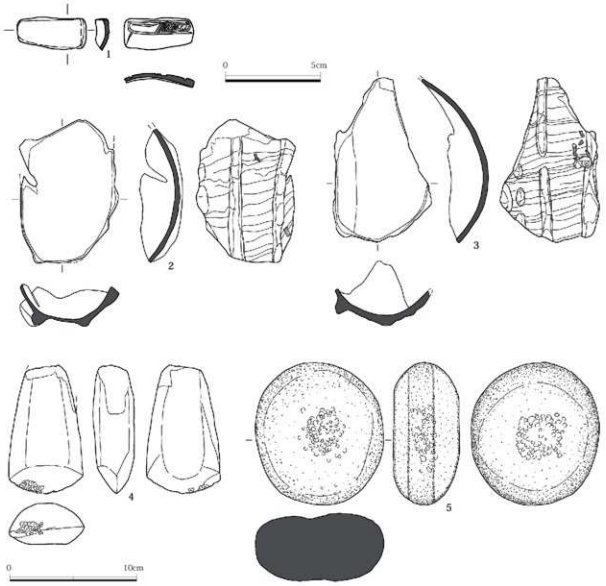
第104図-4・11・12はスセン當式土器の甕で、貝塚時代後１期後半のものである。4は胴部に突帯を貼りつけ、突帯の部分で胴部が外側に張り出し、立ち上がる。11・12は脚台状の底部で、11は丸底に脚台を取り付ける。12は丸底と脚台の間に、粘土板を挟んで底部を成形している。第104図-10は尖底の底部



第103図　阿多地イバタ遺跡採集遺物２



第104図　阿多地イバタ遺跡採集遺物実測図１



第 105 図　阿多地イバタ遺跡採集遺物実測図 2

第 106 図　阿多地イバタ遺跡採集遺物 3（貝符のみ変倍）

である。具体的な型式は不明である。ただ阿多地イバタ遺跡の遺物の状況から、貝塚時代後 1 期の土器の可能性がある。

第 104 図 - 5 ～ 8 は兼久式土器の甕で、貝塚時代後 2 期のものである。5 は口縁部が弱く外反する。口縁部には沈線文が施し、胴部には刻目突帯を貼りつける。6 は口縁部が外反し、口縁部に沈線文と刺突文を施す。7 は口縁部が外傾し、口縁部には沈線文を施す。第 104 図 - 9 は布目圧痕土器で、年代は 9 世紀後半～ 10 世紀代である。

第 104 図 - 13 はカムィヤキの壺である。口縁部は外反し、口縁部下端は垂下せず、丸

みを帯びる。外面には頸部にしぼり痕と、胴部に平行文タタキ目が見られる。内面には頸部から胴部にかけて、格子目当て具痕が見られる。器壁は薄手で、カムィヤキＡ群（新里編 2005）にあたり、年代は 11 世紀後半～ 13 世紀前半である。

第 105 図 - 1 ～ 3 は貝製品である。1 はイモガイ製の貝符である。方形状の線刻を施した後に、方形内の右半分に縦を線刻を施す。2・3 はヤコウガイ製の貝匙で、内面は研磨される。第 105 図 4・5 は石器である。4 は磨製石斧である。5 は敲石である。

(6) 須子茂集落

・須子茂集落遺跡（525-11-0）

須子茂集落は加計呂麻島の北西側に位置する集落で、外洋に面している。須子茂集落の北・東・南側は山に囲まれ、集落の東側は山裾に接している。集落の後方は沖積地となり、山裾近くまで広がる。集落の西側は入り江となり、入り江に沿って砂丘地が発達する。その砂丘地上に須子茂集落がある。

須子茂集落遺跡は 1988（昭和 63）年に、鹿児島県教育委員会による分布調査によって発見された（鹿児島県教育委員会 1990）。

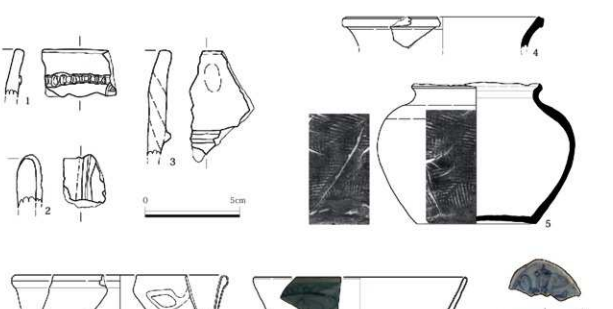
その後、須子茂集落遺跡では瀬戸内町教育委員会によって、2005（平成 16）年に道路工事並びに側溝設置工事に伴う試掘調査や、2006（平成 17）年に住宅建設に伴う試掘調査が行われた。2007（平成 18）年には、瀬戸内町教育委員会による範囲確認調査が実施され、須子茂集落遺跡の範囲、およびその性格が明らかとなった（鼎編 2010）。

須子茂集落遺跡は、現在の須子茂集落のある砂丘地上に位置している。遺跡はやや山側に近く、遺跡範囲の北限は集落の中心部周辺、南限は砂丘地の縁あたりまで広がる（第 107 図　瀬戸内 2010）。現在でも、その遺跡範囲の周辺で、遺物が採集できる。

第 107 図　須子茂集落内の遺跡

第 108 図　須子茂集落遺跡遠景

第 109 図　須子茂集落遺跡主要採集地点



第 110 図　須子茂集落遺跡採集遺物実測図

第 111 図　須子茂集落遺跡採集遺物

第 112 図　須子茂集落遺跡伝世カムィヤキ

須子茂集落遺跡では、弥生系土器・スセン當式土器・兼久式土器・カムィヤキ・青磁・青花・本土産陶磁器・本土産陶器・沖縄産陶器・滑石片などが採集される。

第 110 図 - 1 は弥生系土器で、貝塚時代後 1 期前半のものである。口縁部は外傾し、口縁部に細い刻目突帯を貼りつける。第 110 図 2・3 はスセン當式土器で、貝塚時代後 1 期後半のものである。2 は口縁部に、突帯を縦位に張り付ける。3 は口縁部が直口し、胴部に突帯を横位に張り付ける。

第 110 図 - 4・5 はカムィヤキの壺である。4 は口縁部が外傾し、口縁部下端はわずかに垂下する。5 は口縁部が外反し、口縁部下端は垂下せず、丸みを帯びる。外面には平行文タタキ目、内面には格子目当て具痕が見られる。また胴部には「ノ」字状のヘラ記号が見られる（第 112 図）。4・5 は共にカムィヤキ A 群（新里編 2005）にあたり、年代は 11 世紀後半～ 13 世紀前半である。

第 110 図 - 6 は龍泉窯産の青磁碗である。玉縁状の口縁部を有する。内面には文様が見られるが、不明である。年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。

第 110 図 - 7・8 は青花である。7 は碗で、外面に蓮葉文が見られ、内面にも施文する。素地に白土を塗布した後、施文し、透明釉を施釉する。漳州窯産で、16 世紀末～ 17 世紀前半である。8 は皿で、外面に圏線、見込には十字花文が見られる。釉を全面に施釉した後、畳付の釉を剥ぎ取る。釉下には白土を塗布する。景徳鎮窯産で、15 世紀後半～ 16 世紀前半である。

また瀬戸内町教育委員会による過去の調査では、先述した遺物のほかに、喜念Ⅰ式土器・弥生土器（山ノ口式土器含む）・中津野式土器・布目圧痕土器・須恵器・滑石混入土器・白磁・褐釉陶器・陶質土器・石器や貝類・動物骨などが出土している（鼎編 2010）。

(7) 知之浦集落

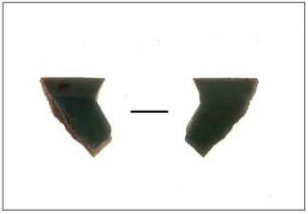
・武名チノウラ遺跡（525-37-0）

知之浦集落は、加計呂麻島から大島海峡のほぼ中央部に張り出した半島にある。知之浦集落の北・東・南側は山に囲まれ、集落後方に山裾が迫る。集落の西側は入り江となり、干潟が見られる。干潟より東側は沖積地となり、山裾の間を埋めるように広がる。知之浦集落はその沖積地上にあり、山裾に沿うように集落が展開している。

武名チノウラ遺跡に関する遺物は、知之浦集落の北端にある、丘陵地で採集される。遺物が採集される地点は、丘陵地のなかでも平坦地となるため、武名チノウラ遺跡はその丘陵地の平

第 113 図　武名チノウラ遺跡遠景

第 114 図　武名チノウラ遺跡主要採集地

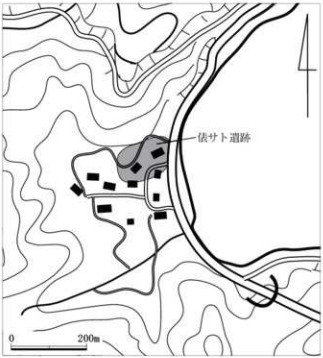


第 116 図　武名チノウラ遺跡採集遺物

第 115 図　知之浦集落内の遺跡

第 117 図　俵サト遺跡遠景

第 118 図　俵サト遺跡主要採集地



第 119 図　俵集落内の遺跡

坦地一帯と推定される（第 115 図）。なお、武名チノウラ遺跡がある丘陵地は、集落の人々から「グスコ」と呼ばれている。

武名チノウラ遺跡では青磁が採集される。第 116 図は青磁碗である。口縁部が外反する。上田 D 類（上田 1982）にあたり、年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。

(8) 俵集落

・俵サト遺跡（525-38-0）

俵集落は加計呂麻島のほぼ中央に位置する集落で、大島海峡に面している。集落の北・西・南側は山に囲まれ、北側の山裾は集落に接している。集落の東側は入り江となり、干潟が見られる。干潟より西側には沖積地が広がり、その沖積地上の北側に俵集落がある。また俵集落のほぼ中央には俵川が流れている。

俵サト遺跡に関する遺物は、俵集落北西側にある、ミャー周辺を中心に採集されている。このことから俵サト遺跡は、俵集落のある海側の沖積地上に位置すると考えられ、遺跡範囲はミャー周辺を中心に、俵川より北側になると推定される（第 119 図）。

俵サト遺跡では、青磁・褐釉陶器・本土産陶磁器・本土産陶器などが採集される。

図示できなかったが、第 120 図 - 4 は青磁である。見込に印花文が見られる。年代は 14 世紀代である。

第 120 図　俵サト遺跡採集遺物

第 121 図　瀬相ムラウチ遺跡採集主要地

第 122 図　瀬相ムラウチ遺跡遠景

(9) 瀬相集落

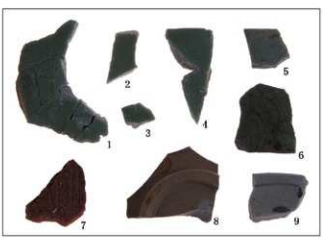
・瀬相ムラウチ遺跡（525-39-0）

瀬相集落は加計呂麻島のほぼ中央に位置する集落で、大島海峡に面している。集落の北・西・南側は山に囲まれ、集落の南側は山裾に接する。集落の東側は入り江となり、干潟が見られる。干潟より西側には、沖積地が山裾近くまで広がり、その沖積地上に瀬相集落が位置する。また瀬相集落の北側には瀬相川が流れる。

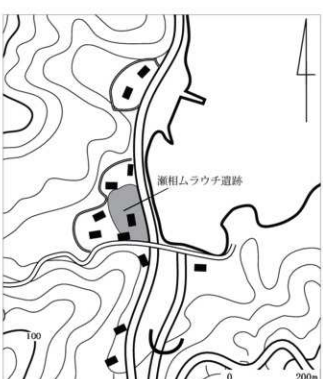
瀬相ムラウチ遺跡に関する遺物は、集落の中心部にある、ミャー周辺で多く採集される。このことから瀬相ムラウチ遺跡は、瀬相集落と同じ沖積地上にあり、その遺跡範囲は集落中心部のミャー周辺に広がると推定される（第 124 図）。

瀬相ムラウチ遺跡では、青磁・本土産陶磁器・本土産陶器が採集される。

第 123 図 - 1 は青磁碗である。龍泉窯産で、15 世紀代のものである。



第 123 図　瀬相ムラウチ遺跡採集遺物



第 124 図　瀬相集落内の遺跡

(10) 西阿室集落

・西阿室集落遺跡（525-12-0）

西阿室集落は、加計呂麻島のほぼ中央に位置する集落で、外洋に面している。西阿室集落の北・東・西側は山に囲まれ、集落後方には山裾が迫る。集落より北東側にある、谷地には沖積地が見られる。集落の南側には、南北に長い入り江が見られ、入り江の中心では砂丘地が発達

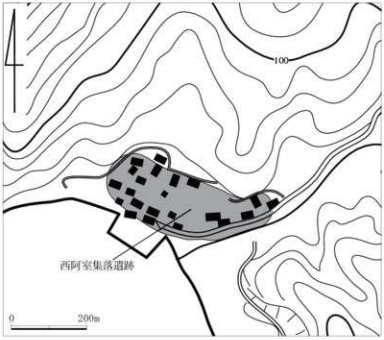
している。その砂丘地上に西阿室集落が位置している。また西阿室集落の南側には西阿室川が流れている。

西阿室集落遺跡は 1988（昭和 63）年に、鹿児島県教育委員会による分布調査によって発見された（鹿児島県教育委員会 1990）。西阿室集落遺跡に関する遺物は、現在の西阿室集落内全域で採集される。このことから西阿室集落遺跡は、現在の西阿室集落と同じ砂丘地上にあり、その遺跡範囲は現在の集落範囲とほぼ同規模のものと推定される（第 126 図）。

西阿室集落遺跡では、兼久式土器・カムィヤキ・青磁・白磁・褐釉陶器・青花・本土産陶磁器・本土産陶器などが採集される。特に青磁は、瀬戸内町域における、その他の遺跡よりも多く確認される。

第 127 図 - 1 は兼久式土器の甕で、貝塚時代後 2 期のものである。平底の底部で、外底面に木葉痕が見られる。

第 125 図　西阿室集落遺跡遠景

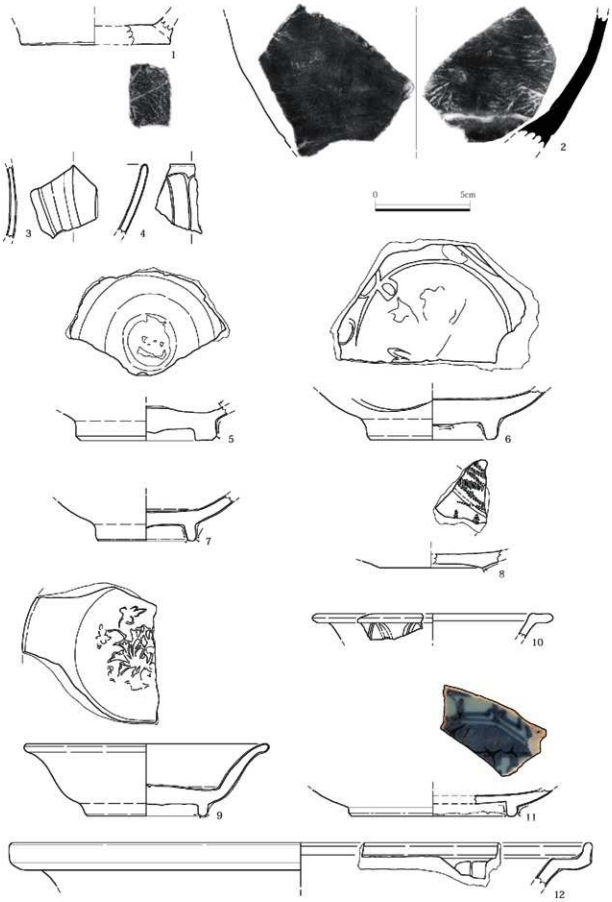


第 126 図　西阿室集落内の遺跡

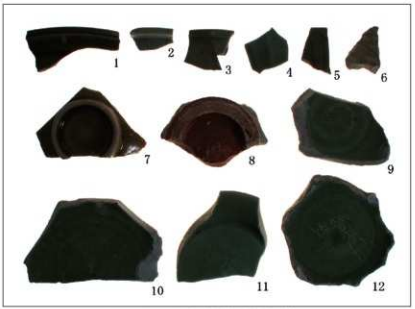
第 127 図 - 2 はカムィヤキで、器種は壺の可能性がある。外面には平行文タタキ目が見られるが、多くはナデ消されている。内面には綾杉目文当て具痕が、明瞭に見られる。器壁は薄手で、カムィヤキ A 群（新里編 2005）にあたる。年代は 11 世紀後半～ 13 世紀前半である。

青磁は碗・皿・盤が確認される。第 127 図 - 3 ～ 7 は青磁碗である。3 は外面に片彫の鎬蓮弁文が見られる。上田 B Ⅰ類（上田 1982）にあたり、年代は 13 世紀中頃～ 14 世紀初頭である。これに近い時期のものとして、5 は胴部外面から畳付まで釉を施釉した後、畳付の釉を剥ぎ取る。内面は胴部まで釉を施釉するが、見込は露胎している。見込中央には溶着物も見られる。福建系の窯産で、年代は 13 世紀前半～ 14 世紀前半である。

4 は外面に細蓮弁文が見られる。龍泉窯産で、上田 B Ⅳ類（上田 1982）にあたる。年代は 15 世紀後半～ 16 世紀前半である。7 は釉を全面に施釉した後、畳付の釉を剥ぎ取る。口縁部が直口する無文の青磁碗と推定される。龍泉窯産で、上田 E 類（上田 1982）にあたる可能性がある。年代は 14 世紀代である。



第 127 図　西阿室集落遺跡採集遺物実測図



第 128 図　西阿室集落遺跡採集遺物 1

第 129 図　西阿室集落遺跡採集遺物 2

6 は外面にラマ式蓮弁文、胴部内面にはラマ式蓮弁文と、見込に印花文がぞれぞれ見られる。全面に釉を施釉した後、外底面の釉を蛇の目状に剥ぎ取る。龍泉窯産で、年代は 15 世紀代である。

その他、図示できなかったが第 128 図 - 3 は青磁碗である。口縁部を玉縁状に肥厚させている。年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。

第 127 図 - 8 ～ 10 は青磁皿である。8 は見込にヘラ状工具による文様と、櫛状工具による鋸歯状の点描文が見られる。釉を全面に施釉した後、外底面の釉を剥ぎ取る。莆田窯（同安窯系）産で、大宰府 XⅣ類か XⅤ類（宮崎編 2000）にあたる。年代は 12 世紀中頃～ 12 世紀後半である。

9 は口縁部が外反し、見込に印花文が見られる。釉を内面全体と、外面には畳付まで施釉する。龍泉窯産で、年代は 14 世紀代である。10 は鍔縁状の口縁部をもつ。外面には蓮弁文が見られる。龍泉窯産で、年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。

第 127 図 - 11 は青磁盤である。鍔縁状の口縁部を持ち、内面には片彫の蓮弁文が見られる。龍泉窯産で、年代は 14 世紀後半～ 15 世紀代である。

青花は碗・皿・瓶が確認される。第 127 図 - 11 は青花の皿である。外底面に圏線、見込には区画文がそれぞれ見られる。釉を全面に施釉した後、畳付の釉を剥ぎ取る。徳化窯産で、年代は 18 世紀末～ 19 世紀代である。第 129 図 - 8 は青花の碗である。徳化窯産で、年代は 19 世紀代である。第 129 図 - 11 は青花の瓶である。明代のものである。

なお、鹿児島県の農政分布調査では、前述した遺物のほか、輸入陶磁器の色絵も採集される。

第５節　鎮西地区

(1) 花富集落

・花富ヒラタ遺跡（525-20-0）

花富集落は加計呂麻島のほぼ中央、伊子茂湾の西側に位置する集落である。集落の北・東・西側は山に囲まれる。集落後方より北西側には、沖積地が見られ、山裾近くまで広がる。集落の南側には、入り江が見られ、入り江に沿って砂丘地が形成される。またこの砂丘地の後方には、沖積地を挟んで山裾近くにも、小規模な砂丘地が形成される。これらの砂丘地上に花富集落はある。

花富ヒラタ遺跡は 1999（平成 11）年、鹿児島県教育委員会による農政分布調査の際発見された。

花富ヒラタ遺跡に関する遺物は、花富集落のある海岸沿いの砂丘地と、山裾近くの砂丘地でそれぞれ採集される。このことから花富ヒラタ遺跡は、花富集落と同じ砂丘地上にあり、遺跡範囲は集落範囲に近いものと推定される（第 132 図）。

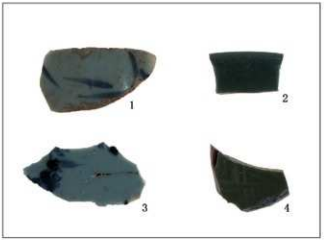
花富ヒラタ遺跡では、土器・青磁・本土産陶磁器などが採集される。

第 131 図 - 2 は青磁碗である。口縁部が外反する。上田 D 類（上田 1982）にあたり、年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前後になる。

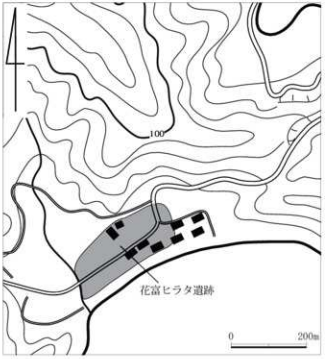
また農政分布調査では、貝塚時代前期の土器や青花が採集されている。

第 133 図　花富ヒラタ遺跡主要採集地

第 130 図　花富ヒラタ遺跡遠景



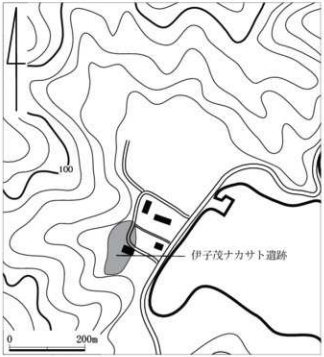
第 131 図　花富ヒラタ遺跡採集遺物



第 132 図　花富集落内の遺跡

第 134 図　伊子茂ナカサト遺跡遠景

第 135 図　伊子茂ナカサト遺跡主要採集地



第 136 図　伊子茂集落内の遺跡

(2) 伊子茂集落

・伊子茂ナカサト遺跡（525-40-0）

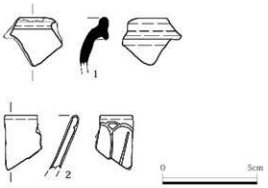
伊子茂集落は加計呂麻島のほぼ中央、伊子茂湾の西側に位置する集落である。集落の北・西・南側は山に囲まれる。集落の東側は入り江となり、干潟が見られる。干潟より西側には、沖積地が山裾近くまで広がる。その沖積地上の山裾近くに伊子茂集落があり、山裾に沿うように集落が展開している。また伊子茂集落からは、対岸にある勢里集落が目視できる。

伊子茂ナカサト遺跡に関する遺物は、伊子茂集落内の南西側にある、山尾根に挟まれた沖積地上で採集される。遺物が採集される一帯は、周辺より一段標高が高く、平坦地となる。このことから伊子茂ナカサト遺跡は、伊子茂集落と同じ沖積地上に位置し、その遺跡範囲は集落の南西側にある、山尾根に挟まれた平坦地一帯に広がるものと推定される（第 136 図）。

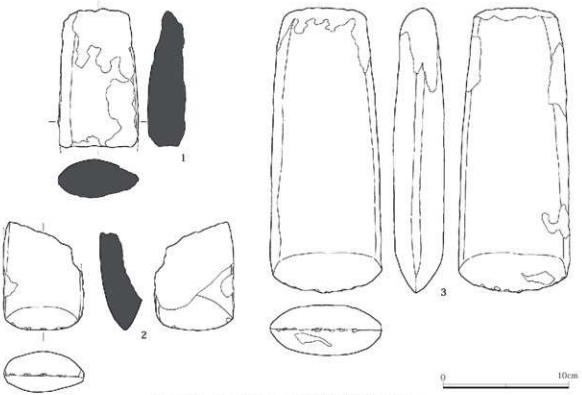
伊子茂ナカサト遺跡では、土器・カムィヤキ・青磁・白磁・本土産陶磁器・本土産陶器・沖縄産陶器・石器などが採集される。

第 137 図 - 1 はカムィヤキの壺である。口縁部が外反し、口縁部下端が垂下する。カムィヤキ A 群（新里編 2005）にあたり、年代は 11 世紀後半～ 13 世紀前半である。

青磁は碗と盤が確認される。第 137 図 - 2 は青磁碗で、外面に細蓮弁文が見られる。上田 B Ⅳ類（上田 1982）にあたり、年代は 15 世紀後半～ 16 世紀前半である。第 139 図 - 2 は青磁



第 137 図　伊子茂ナカサト遺跡採集遺物実測図 1



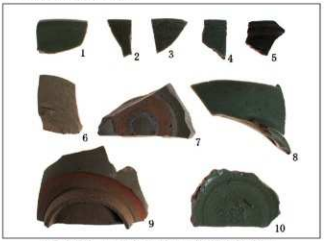
第 138 図　伊子茂ナカサト遺跡採集遺物実測図 2

碗で、外面に雷文とラマ式蓮弁文が見られる。上田ＣⅡ類（上田 1982）にあたり、年代は 14 世紀後半～ 15 世紀中頃である。第 139 図 - 7 は青磁碗で、釉を全面に施釉した後、見込の釉を輪状に剥ぎ取る。年代は 14 世紀代となる。第 139 図 - 10 は青磁碗で、見込には印花文が見られる。釉を全面に施釉した後、見込の釉を輪状に剥ぎ取る。

第 139 図 - 1 は青磁盤である。口縁部が外反する。15 世紀代のものである。

第 139 図 - 6 は白磁の坏である。高台を持ち、口縁部が外傾する。釉を全面に施釉する。森田勉による分類のＤ群（以下、森田○群に省略、森田 1982）にあたる。漳武窯産で、年代は 14 世紀末から 15 世紀代である。

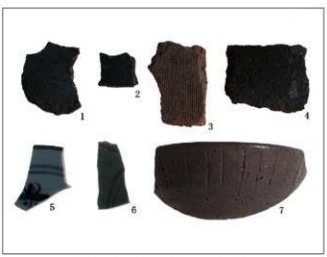
第 138 図 - 1 ～ 3 は磨製石斧である。1 は基部が残存し、2 は刃部が残存する。1・2 は幅、厚み共にほぼ同じであるため、両者の大きさは近いものと推測される。3 は長さ 22.6 ㎝、幅 8.8 ㎝、厚みが最大 4 ㎝の大型品である。



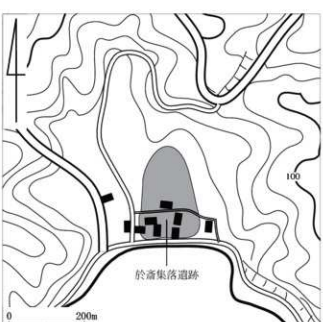
第 139 図　伊子茂ナカサト遺跡採集遺物 1

第 140 図　伊子茂ナカサト遺跡採集遺物 2

第 141 図　於斎集落遺跡遠景



第 142 図　於斎集落遺跡採集遺物



第 143 図　於斎集落内の遺跡

(3) 於斎集落

・於斎集落遺跡 (525-22-0)

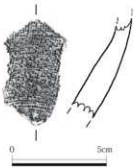
於斎集落は伊子茂湾の北側、伊子茂湾の奥に位置する集落である。集落の北・東・西側は山に囲まれる。集落後方は沖積地となり、山裾近くまで広がる。集落の南側は入り江となり、入り江にそって砂丘地が形成される。その砂丘地上に於斎集落が位置する。

於斎集落遺跡は 1999（平成 11）年、鹿児島県教育委員会による農政分布調査の際、発見された。農政分布調査では、現在の於斎集落がある砂丘地上と、集落後方の沖積地の一部で、於斎集落遺跡に関する遺物が採集された。

一方、瀬戸内町教育委員会による分布調査では、主に集落のある砂丘地上で遺物を採集している。これらのことから於斉集落遺跡は、現在の於斎集落がある砂丘地上を中心に位置し、その遺跡範囲は砂丘地上から集落後方の沖積地まで広がると推定される（第 143 図）。

於斎集落遺跡では土器・布目圧痕土器・カムィヤキ・青磁・本土産陶磁器などが採集される。

第 144 図は布目圧痕土器で、年代は 9 世紀後半～ 10 世紀代である。第 142 図 - 7 は青磁碗である。外面に剣頭が省略された細蓮弁文が見られる。上田 B Ⅳ' 類（上田 1982）にあたり、年代は 16 世紀代である。



第 144 図　於斎集落遺跡採集遺物実測図

(4) 勢里集落

・於斎セリ遺跡（525-51-0）

勢里集落は、伊子茂湾の東側に位置する集落である。周辺には於斎集落がある。勢里集落の北・東・南側は山に囲まれる。集落後方には沖積地が見られ、山裾近くまで広がる。集落の西側には砂浜が広がり、砂浜より東側には幅の狭い砂丘地が形成される。その砂丘地上に勢里集落がある。また勢里集落からは対岸の伊子茂集落を目視できる。

於斎セリ遺跡に関する遺物は、現在の勢里集落内で採集され、特に集落の中心より南側で多く確認されている。このことから於斎セリ遺跡は、勢里集落と同じ砂丘地上に位置しており、その遺跡範囲は勢里集落の南側に広がるものと推定される（第147図）。

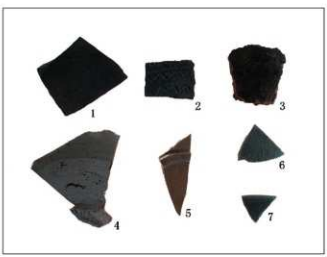
於斎セリ遺跡では、土器・カムィヤキ・青磁・白磁・本土産陶器などが採集される。

於斎セリ遺跡では、ほぼ完形のカムィヤキの壺が出土している（第148図）。発見者によると、勢里集落のほぼ中央の位置から、焼けた骨（人骨かは不明）を伴って出土したという（鼎 2007）。

第148図の口縁部は外反し、口縁部下端はわずかに垂下する。肩部に波状文を施す。外面に平行文タタキ目、内面には格子目当て具痕が見られる。カムィヤキA群（新里編 2005）で、年代は11世紀後半～13世紀前半である。

第146図－4は白磁碗である。見込には陰圏

第145図　於斎セリ遺跡遠景



第146図　於斎セリ遺跡採集遺物

第148図　於斎セリ遺跡出土カムィヤキ

第147図　勢里集落内の遺跡

第 149 図　押角集落内の遺跡

第 150 図　押角ムラウチ遺跡採集遺物

線と印花文が見られる。釉を内面全体に施釉する。外面には、釉を胴下部より上に施釉する。

(5) 押角集落

・押角ムラウチ遺跡（525-41-0）

押角集落は加計呂麻島のほぼ中央に位置する集落で、大島海峡に面している。周辺には勝能集落がある。集落の東・西・南側は山に囲まれ、集落の南西側は山裾に接している。集落の北側は入り江となり、そこには干潟が見られる。干潟より南側は山裾近くまで沖積地が広がり、その沖積地の海側に押角集落が位置する。また集落の中央には押角川が流れている。

押角ムラウチ遺跡に関する遺物は、押角集落内で採集され、特に集落の東側にあるミャー周辺で、遺物が多く確認される。このことから押角ムラウチ遺跡は押角集落のある沖積地上にあり、遺跡範囲はミャー周辺に広がるものと推定される（第 149 図）。

押角ムラウチ遺跡では、青磁・本土産陶磁器・本土産陶器などが採集される。青磁は碗と盤が確認される。第 150 図 - 7 は青磁盤である。釉を全面に施釉した後に、外底面の釉を剥ぎ取る。

第 151 図　押角ムラウチ遺跡遠景

第 152 図　押角ムラウチ遺跡主要遺物採集地

(6) 勝能集落

・勝能集落の概要

勝能集落は加計呂麻島の北東側に位置する集落で、大島海峡に面する。周辺には押角集落がある。集落の東・西・南側は山に囲まれ、集落の西・南側は山裾に接する。集落の北側は入り江となり、干潟が広がる。干潟より南側には山裾近くまで沖積地が広がる。その沖積地上に勝能集落がある。また集落の中央には小河川が流れる。

・勝能サト遺跡（525-42-0）

勝能サト遺跡に関する資料は、勝能集落内でも小河川より東側、集落の中心部で採集される。このことから勝能サト遺跡は、勝能集落のある沖積地上にあり、その遺跡範囲は集落の中心部周辺に広がるものと推定される（第 156 図）。

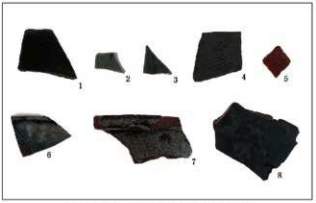
勝能サト遺跡では、土器・カムィヤキ・青磁・白磁・本土産陶磁器・本土産陶器・沖縄産陶器などが採集される。

・勝能イザネク遺跡

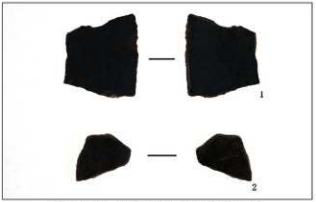
勝能集落より西側には、勝能集落の脇浜と伊砂根久がある。各地区は、山尾根により区切られ、周辺の地形は勝能集落本体と変わらない。

その内、伊砂根久では小字地の中心から、山裾に接する小字地の東端にかけて遺物が採集される。このことから勝能イザネク遺跡は伊砂根久地区と同じ沖積地上にあり、その遺跡範囲は伊砂根久地区の東側に広がると推定される（第

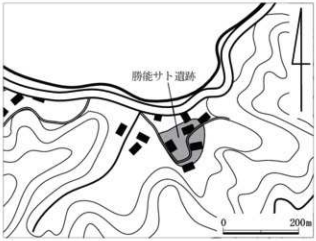
第 153 図　勝能サト遺跡（奥）・勝能イザネク遺跡



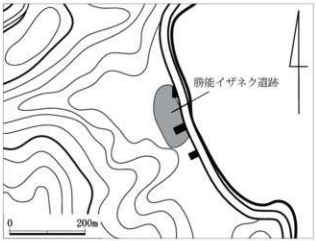
第 154 図　勝能サト遺跡採集遺物



第 155 図　勝能イザネク遺跡採集遺物



第 156 図　勝能集落内の遺跡 1



第 157 図　勝能集落内の遺跡 2

第 158 図　諸数集落遺跡遠景

第 159 図　諸数集落遺跡採集遺物

第 160 図　諸数集落内の遺跡

157 図)。

勝能イザネク遺跡は、土器・カムィヤキが採集される。第 155 図 - 1 はカムィヤキである。外面に平行文タタキ目、内面に格子目当て具痕が見られる。器壁は薄手で、カムィヤキ A 群(新里編 2005) にあたる。年代は 11 世紀後半～ 13 世紀前半である。

(7) 諸数集落

・諸数集落遺跡 (525-43-0)

諸数集落は加計呂麻島の北東側に位置する集落で、大島海峡に面する。周辺には本生間集落がある。集落の東・西・南側は山に囲まれ、集落の西側は山裾に接する。集落の北側は入り江となり、砂浜が見られる。砂浜より南側には沖積地が見られ、山裾近くまで広がる。その沖積地上に諸数集落が位置する。また諸数集落からは奄美大島側の清水集落を目視できる。

諸数集落遺跡に関する遺物は、現在の諸数集落内でも南東側で採集され、特に集落の東端にあるミャー周辺で多く確認される。このことから諸数集落遺跡は、現在の諸数集落と同じ沖積地上にあり、その遺跡範囲はミャー周辺、諸数集落の南東側に広がると推定される (第 160 図)。

諸数集落遺跡では、土器・カムィヤキ・青磁・白磁・青花・本土産陶磁器・本土産陶器などが確認される。第 159 図 - 6 は青磁碗である。釉を内面全体から高台外面の途中まで施釉し、畳

第 161 図　諸数集落遺跡 (諸数集落内)

付含め外底面には施釉しないものがある。年代は 16 世紀代である。

第 159 図 - 2 は青花碗である。外面には草花文と圏線、内面に圏線と見込に草花文が見られる。広東系のもので、年代は 17 世紀後半～ 18 世紀である。

(8) 本生間集落

・生間ミタ遺跡（525-44-0）

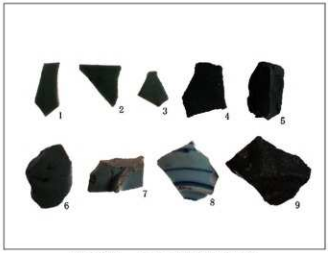
本生間集落は加計呂麻島の北東側に位置する集落で、大島海峡に面する。周辺には渡連集落や諸数集落がある。本生間集落の北・東・南側は山に囲まれ、集落後方には山裾が迫る。集落の西側は入り江となり、砂浜が見られる。砂浜より東側は沖積地となり、山裾近くまで広がる。その沖積地の海側に本生間集落は位置する。

生間ミタ遺跡に関する遺物は、本生間集落内でも西側で採集される。このことから生間ミタ遺跡は、本生間集落と同じ沖積地上にあり、その遺跡範囲は本生間集落の西側に広がるものと推定される（第 164 図）。

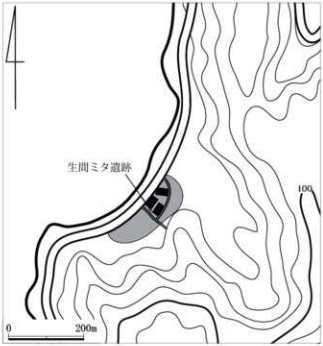
生間ミタ遺跡では、カムイヤキ・青磁・本土産陶磁器・本土産陶器などが採集される。

第 165 図はカムィヤキで、壺か甕の把手になると推定される。第 163 図 - 4 はカムィヤキの壺と推測され、外面に波状文が見られる。内面には平行文当て具痕が見える。器壁は薄手で、カムィヤキ A 群（新里編 2005）にあたり、年代は 11 世紀後半～ 13 世紀前半である。おそら

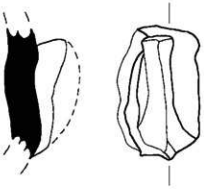
第 162 図　生間ミタ遺跡遠景



第 163 図　生間ミタ遺跡採集遺物



第 164 図　本生間集落内の遺跡



第 165 図　生間ミタ採集遺物実測図（等倍）

第166図　渡連ムラウチ遺跡遠景

第167図　渡連ムラウチ遺跡採集遺物

第168図　渡連集落内の遺跡

く第165図のカムィヤキも近い年代のものと推測される。

(9) 渡連集落

・渡連ムラウチ遺跡（525-21-0）

渡連集落は加計呂麻島の東側に位置する集落で、大島海峡に面している。周辺には本生間集落と安脚場集落がある。渡連集落の北・東・南側は山に囲まれ、集落の北側は山裾に接している。集落後方は沖積地となり、山裾近くまで広がる。集落の北側は、東西に長い入り江となり、その入り江に沿って砂丘地が形成される。その砂丘地の東側一帯に渡連集落が位置している。また渡連集落からは奄美大島の清水集落や嘉鉄集落を目視することができる。

渡連ムラウチ遺跡は1999（平成11）年、鹿児島県教育委員会による農政分布調査の際、発見された。この調査では、渡連ムラウチ遺跡に関する遺物を、渡連集落のある砂丘地上のほか、集落後方の沖積地でも採集している。

一方、瀬戸内町教育委員会による分布調査では、渡連集落内の全域で遺物を採集している。これらのことから渡連ムラウチ遺跡は、渡連集落のある砂丘地上の中心に位置し、その遺跡範囲は集落のある砂丘地から、集落後方の沖積地まで広がるものと推定される（第168図）。

渡連ムラウチ遺跡では、土器・カムィヤキ・青磁・本土産陶磁器・本土産陶器・沖縄産陶器などが採集される。

第169図　渡連ムラウチ遺跡主要採集地

第 167 図 - 4 はカムィヤキである。外面に平行文タタキ目、内面には格子目当て具痕を見られる。内面の当て具痕は若干ナデ消されている。器壁は薄手で、カムィヤキA群（新里編 2005）にあたり、年代は 11 世紀後半～ 13 世紀前半である。

第 167 図 - 3 は青磁皿である。鍔縁状の口縁部をもつ。外面には蓮弁文が見られる。年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。第 167 図 - 6 は青磁皿の可能性がある。釉を外底面以外の外面全体と、内面全体に施釉した後、見込の釉を輪状に剥ぎ取る。

(10) 安脚場集落

・渡連アンキャバ遺跡（525-13-0）

安脚場集落は大島海峡に面する加計呂麻島の諸集落の中で、最も東側に位置する集落である。安脚場集落の東・西・南側は山に囲まれる。集落の後方には沖積地が見られ、山裾近くまで広がる。集落の北側は、南北に長い入り江となり、入り江に沿って砂丘地が発達する。特に南側の砂丘地の発達は著しく、その砂丘地の斜面上に安脚場集落は位置する。また安脚場集落からは、奄美大島側の蘇刈集落や、嘉鉄カイツ遺跡のある砂丘地を目視できる。

渡連アンキャバ遺跡は 1988(昭和 63)年に、鹿児島県教育委員会の分布調査により発見された（鹿児島県教育委員会 1990）。

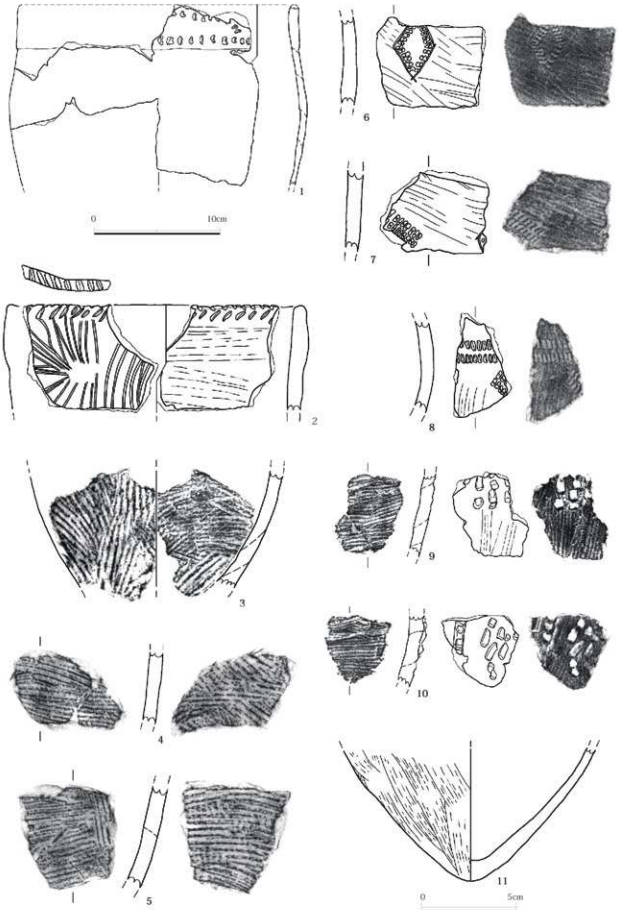
渡連アンキャバ遺跡に関する遺物は、安脚場集落内全域で採集される。また砂丘地の北西端、山裾に接している周辺では、海岸に遺物包含層が露出している。これらの遺物の採集状況は、過去の調査でも指摘されている（鹿児島県教育委員会 1990）。

これらのことから渡連アンキャバ遺跡は安脚場集落のある砂丘上に位置し、その遺跡範囲は、安脚場集落のある砂丘地全体に広がるものと推定される（第 170 図）。

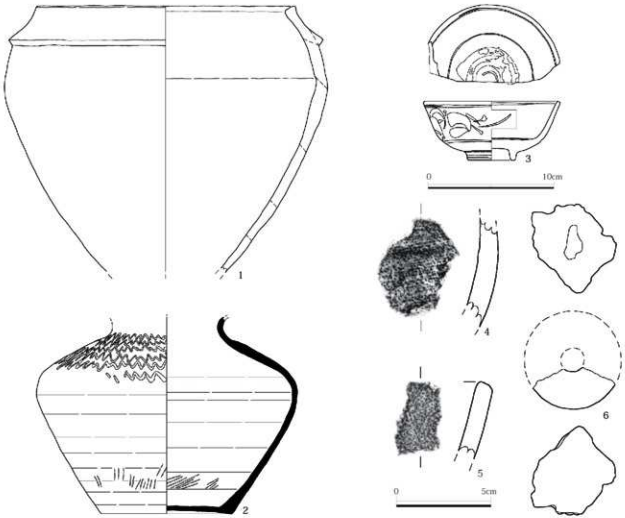
第 170 図　安脚場集落内の遺跡

第 171 図　渡連アンキャバ遺跡遠景

第 172 図　渡連アンキャバ遺跡遺物包含層露出地点



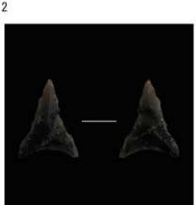
第173図　渡連アンキャバ遺跡採集遺物実測図1



第 174 図　渡連アンキャバ遺跡採集遺物実測図 2

渡連アンキャバ遺跡では採集地点によって遺物の性格が異なる。海岸に露出した遺物包含層周辺では、条痕文土器･室川下層式土器･面縄前庭土器・神野 B 式類似土器・嘉徳式土器・阿波連浦下層式土器など、貝塚時代後期以前の遺物が採集される。具体的な状況は不明だが、石鏃もこの地点から採集された可能性がある（第 175 図）。

一方、布目圧痕土器・カムィヤキ・青磁・本土産陶磁器・本土産陶器・フイゴの羽口など、貝塚時代後期以降のものは安脚場集落内で採集される。



第 175 図　渡連アンキャバ遺跡出土石鏃

第 173 図-1 は嘉徳式土器の深鉢で、貝塚時代前 4 期のものである。口縁部は直口し、胴部が弱く張る。口縁部が肥厚し、口縁部の上下には刺突文を施す。第 173 図 - 2 は室川下層式土器の深鉢で、貝塚時代前 2 期のものである。口縁部は直口し、胴部は張らない。口唇部には刻目を施す。外面には口縁上部に刺突文、口縁下部から胴部にかけて沈線文を放射状に施す。内面には口縁上部に刺突文を施す。第 173 図 3 ～ 5 は条痕文土器で、貝塚時代前 2 期のものである。内外面に貝殻条痕が見られる。第 173 図 6 ～ 8 は神野 B 式類似土器で、貝塚時代前 2 期末のものとなる可能性がある。6 は外面に沈線文を菱形状に施した後、沈線文に沿って菱形の中に刺突文を施す。7 は外面に刺突文を斜位に施す。8 は外面に刺突文を横位と斜位に施す。

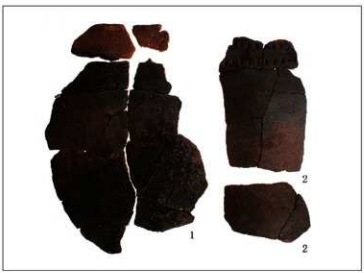
第 173 図 - 9・10 は型式不明の土器で、貝塚時代前期の土器の可能性がある。9 は外面に刺突文を施す。10 は外面に縦位の刻目突帯を貼りつけ、その横に刺突文を施す。第 173 図-11 は尖底の底部で、具体的な型式は不明である。胎土などは前述した貝塚時代前 2 期の土器とは異なる。ただ、過去の調査では面縄前庭式土器も出土しているため（鹿児島県教育委員会 1990）、11 は面縄前庭式土器の底部の可能性がある。

第 174 図 - 1 は阿波連浦下層式土器の甕で、貝塚時代後 1 期前半のものである（新里・鼎 2013）。口縁部が内傾し、胴部が強く張る。口縁部下には突帯を貼りつける。

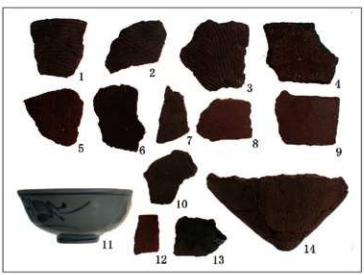
第 174 図 - 2 はカムィヤキの壺である。頸部に波状文を施す。外面には平行文タタキ目、内面には平行文当て具痕が見られる。器壁は薄く、器面の色調は赤褐色で、焼成が悪い。カムィヤキ A 群（新里編 2005）にあたり、年代は 11 世紀後半～ 13 世紀前半である。

第 174 図 - 3 は本土産陶磁器の染付碗である。外面に草花文が見られる。釉を全面に施釉した後、見込の釉を蛇の目状に削り取り、畳付の釉も剥ぎ取る。

第 174 図 - 4・5 は布目圧痕土器で、口唇部は方形状となり、口縁部が外傾する。年代は 9 世紀後半～ 10 世紀代である。第 174 図 - 6 はフイゴの羽口である。



第 176 図　渡連アンキャバ遺跡採集遺物 1



第 177 図　渡連アンキャバ遺跡採集遺物 2

(11) 徳浜集落

・諸鈍トクハマ遺跡（525-15-0）

徳浜集落は加計呂麻島の南東側に位置する集落で、外洋に面する。徳浜集落の北・東・西側は山に囲まれ、集落の北西側は山裾に接する。集落の後方から北東方向には、山裾近くまで沖積地が広がる。集落の南側には、北東方向から南西方向にかけて長い砂浜が見られる。そして砂浜の後方には砂丘地が発達しており、その砂丘地上に徳浜集落が位置する。また海には小規模ではあるが、リーフも見られる。

諸鈍トクハマ遺跡は 1999（平成 11）年、

第 178 図　渡連アンキャバ遺跡出土カムィヤキ

鹿児島県教育委員会による農政分布調査の際発見された。

諸鈍トクハマ遺跡に関する遺物は、徳浜集落内で採集できるが、現在集落の北側で多く確認される。また農政分布調査では集落の砂丘地上のほか、集落後方の沖積地でも遺物が採集される。これらのことから諸鈍トクハマ遺跡は徳浜集落と同じ砂丘地上を中心に位置しており、その遺跡範囲は徳浜集落の北側周辺から、集落後方の沖積地まで広がるものと推定される（第181図）。

また徳浜集落の海岸では水摩を受けた遺物が採集されるが、これらの遺物が諸鈍トクハマ遺跡に関連するかどうかは不明である。

諸鈍トクハマ遺跡では、本土産陶磁器・本土産陶器・沖縄産陶器などが採集される。

また農政分布調査では、カムィヤキと青花が採集されている。

(12) 諸鈍集落

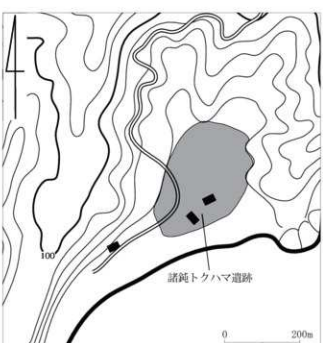
・諸鈍集落の概要

諸鈍集落は加計呂麻島の南東側、諸鈍湾の奥に位置する集落である。集落の北・東・南側は山に囲まれ、集落の南側は入り江となる。入り江に沿って砂丘地が発達しているほか、その砂丘地より沖積地をはさんで、さらに東側の山裾近くにも砂丘地が形成される。この二つの砂丘地上に諸鈍集落が位置している。

第179図　諸鈍トクハマ遺跡遠景

第180図　諸鈍トクハマ遺跡採集遺物

第182図　諸鈍トクハマ遺跡主要採集地



第181図　徳浜集落内の遺跡

・諸鈍城跡（525-3-0）

諸鈍城跡は 1988（昭和 63）年に、鹿児島県教育委員会の分布調査の際発見された（鹿児島県教育委員会 1990）。諸鈍城跡は、諸鈍集落より東側の山頂周辺にあると言われている（第 185 図）。諸鈍城跡があったとされる場所一帯は、比較的平坦な地形が広がり、東側は断崖絶壁となる。ただ堀や廓などの施設は確認されておらず、諸鈍城跡に関する遺物も採集されていない。そのため諸鈍城跡はその位置も含めて不明な点が多い。諸鈍城跡は在地首長のナングモリバラの拠点とされ、同じく諸鈍の在地首長のグリャバラが琉球王国軍と共に諸鈍城を攻め、ナングモリバルを滅ぼした伝承が残る。

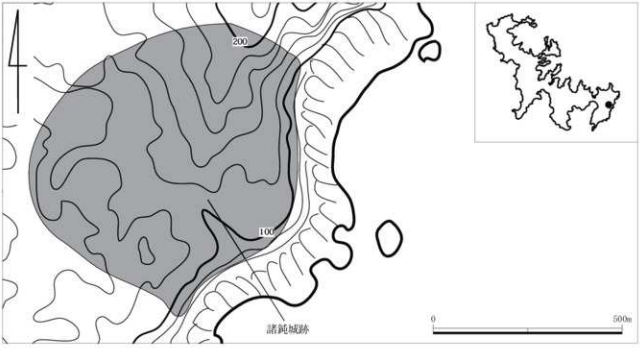
・諸鈍クリ遺跡（525-16-0）

諸鈍クリ遺跡は 1999（平成 11）年、鹿児島県教育委員会による農政分布調査の際、発見された。諸鈍クリ遺跡に関する遺物は、諸鈍集落のある海岸近くの砂丘地上で採集される。ただし、遺物はその砂丘地の中心部より北西側で多く採集される。このことから諸鈍クリ遺跡は、諸鈍集落のある海岸近くの砂丘地上に立地し、その範囲は砂丘地の中心より北西側に広がると推定される（第 186 図）。

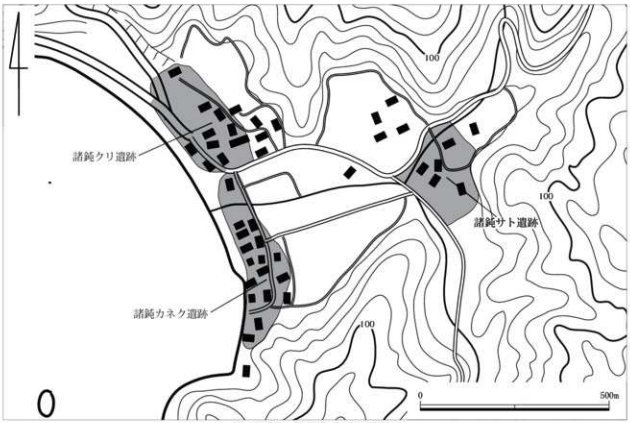
諸鈍クリ遺跡では、土器・カムィヤキ・本土産陶器などが採集される。

第 183 図　諸鈍城跡遠景

第 184 図　諸鈍クリ遺跡・諸鈍カネク遺跡遠景（左が北）



第 185 図　諸鈍集落内の遺跡 I



第 186 図　諸鈍集落内の遺跡 2

第 187 図　諸鈍サト遺跡遠景

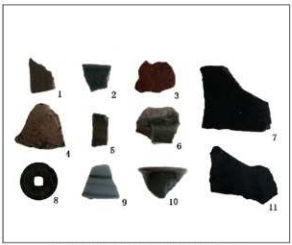
第 188 図　諸鈍クリ遺跡採集遺物

・諸鈍カネク遺跡（525-17-0）

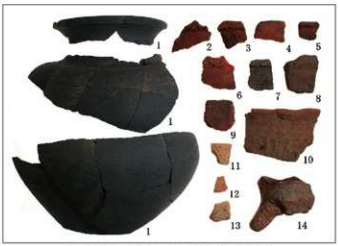
諸鈍カネク遺跡は 1999（平成 11）年、鹿児島県教育委員会による農政分布調査の際発見された。諸鈍カネク遺跡に関する遺物は、諸鈍集落のある海岸近くの砂丘地上で採集される。ただし、遺物はその砂丘地の中心部より南東側で多く採集される。このことから、諸鈍カネク遺跡は諸鈍集落のある海岸近くの砂丘地上に位置し、その遺跡範囲は砂丘地の中心より南東側に広がると推定される（第 186 図）。

諸鈍カネク遺跡では、弥生系土器・スセン當式土器・兼久式土器・布目圧痕土器・土師器・滑石混入土器・カムィヤキ・青磁・白磁・本土産陶器・沖縄産陶器・滑石製品・貝製品・フイゴの羽口などが採集される。

第 193 図－1・2 は弥生系土器の甕で、貝塚時代後 1 期前半のものである。1 は口縁部が肥厚し、やや外傾する。口唇部には刻目を施す。2 は口縁部がやや外傾し、口縁部には波状文を二つ施す。第



第 189 図　諸鈍サト遺跡採集遺物



第 190 図　諸鈍カネク遺跡採集遺物 1

第 191 図　諸鈍カネク遺跡採集遺物 2

第 192 図　諸鈍カネク遺跡採集遺物 3

193 図 3 ～ 5 は貝塚時代後期の土器と推定され、4 はスセン當式土器の可能性がある。

第 193 図 - 11 はスセン當式土器の甕で、脚台状の底部である。貝塚時代後 1 期後半のものである。第 193 図 - 6・7・10 は兼久式土器の甕で、貝塚時代後 2 期のものである。6・7 は胴部に刻目突帯を貼りつけ、6 は突帯の上、7 は突帯の下にそれぞれ沈線文を施す。10 は口縁部がやや外傾し、胴部はやや張る。

第 193 図 - 8 は土師器の坏である。年代は後述する布目圧痕土器に近いものと推定される。第 193 図 - 9 は布目圧痕土器である。口唇部が舌状となり、口縁部が外傾する。年代は 9 世紀後半～ 10 世紀代である。

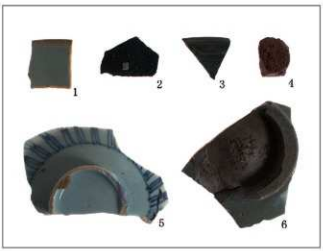
第 193 図 - 12 はカムィヤキの壺で、諸鈍カネク遺跡で人骨と共に出土したとされるが、詳細は不明である（人骨の所見は後述する）。口縁部が外反し、口縁部下端が垂下する。頸部から胴上部にかけて波状文を施す。外面には平行文タタキ目が見られるが、ほぼナデ消される。内面には格子目当て具痕が見られ、一部ナデ消される。器壁は薄手で、カムィヤキ A 群（新里編 2005）にあたり、年代は 11 世紀後半～ 13 世紀前半である。

13 は白磁碗で、口縁部が玉縁状に肥厚する。大宰府Ⅳ類（宮崎編 2000）にあたり、年代は 11 世紀後半～ 12 世紀前半である。第 193 図 - 14 は青磁碗である。釉を全面に施釉した後、外底面の釉を剥ぎ取る。上田 D Ⅱ類（上田 1982）にあたり、年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。

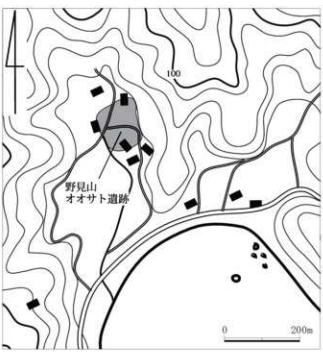
第 193 図 - 15 はフイゴの羽口である。下部にはガラス質の付着物が見られる。第 193 図 - 16・17

第 193 図　諸鈍カネク遺跡・諸鈍サト遺跡採集遺物実測図（10 ～ 15・17 は S ＝ 1/3、他は S ＝ 1/2）

第 194 図　野見山オオサト遺跡遠景



第 195 図　野見山オオサト遺跡採集遺物



第 196 図　野見山集落内の遺跡

は滑石製品である。16 はバレン状製品である。17 は滑石製石鍋の破片だが、部位は不明である。破片になった後に火を受けており、二次加工痕も見られる。第 193 図 - 18・19 は貝製品で、イモガイ製貝珠である。全面が研磨される。

・諸鈍サト遺跡（525-45-0）

諸鈍サト遺跡に関する遺物は、諸鈍集落の一部がある山裾近くの砂丘地で採集される。このことから諸鈍サト遺跡は、山裾近くの砂丘地上に立地し、遺跡範囲はその砂丘地一帯に広がると推定される（第 186 図）。

諸鈍サト遺跡では、土器・カムィヤキ・青磁・白磁・本土産陶磁器・本土産陶器・寛永通宝などが採集される。第 193 図 - 20 は寛永通宝である。

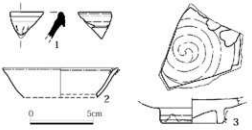
(13) 野見山集落

・野見山オオサト遺跡（525-46-0）

野見山集落は、諸鈍湾の北西側に位置する集落で、周辺には秋徳集落がある。野見山集落の北・東・西側は山に囲まれ、集落の北・東側は山裾に接する。集落の南側は入り江となり、砂浜が見られる。砂浜より北側は沖積地となり、山裾近くまで広がる。この沖積地の内、北東側の山裾近くには、周囲より標高の高い一帯があり、その一帯に野見山集落が位置する。

野見山オオサト遺跡に関する遺物は、野見山集落の中心部にあるミャー周辺で採集される。このことから野見山オオサト遺跡は野見山集落と同じ沖積地上にあり、遺跡範囲は集落のミャー周辺に広がると推定される（第 196 図）。

野見山オオサト遺跡では、滑石混入土器・カ



第 197 図　野見山オオサト遺跡採集遺物実測図

ムィヤキ・青磁・白磁・本土産陶磁器・本土産陶器などが採集される。

第 197 図 - 1 はカムィヤキの壺である。口縁部は外傾し、口縁部下端が垂下する。内面には平行文当て具痕が見られる。カムィヤキ A 群（新里編 2005）にあたり、年代は 11 世紀後半～ 13 世紀前半である。

第 197 図 - 2 は白磁の皿である。釉を全面に施釉した後、口唇部から口縁上部内面にかけての釉を剥ぎ取る。大宰府Ⅸ類（宮崎編 2000）にあたり、年代は 13 世紀後半～ 14 世紀前半である。第 197 図 - 3 は青磁の碗である。見込に圏線が見られる。釉を内外面に施釉するが、畳付から外底面にかけては施釉しない。

(14) 秋徳集落

・秋徳集落遺跡（525-47-0）

秋徳集落は、諸鈍湾の北西側に位置する集落で、周辺には野見山集落がある。秋徳集落の北・西・南側は山に囲まれ、集落の北・南西側は山裾に接する。集落後方には沖積地が見られ、山裾近くまで広がる。集落の東側は入り江となり、入り江に沿って砂丘地が形成される。その砂丘地上に秋徳集落が位置している。

秋徳集落遺跡に関する遺物は、現在の秋徳集落の北側にあるミャー周辺で採集される。このことから秋徳集落遺跡は、秋徳集落と同じ砂丘地上に位置しており、遺跡範囲はミャー周辺、集落の北側に広がると推定される（第 200 図）。

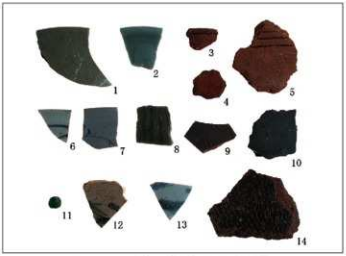
第 198 図　秋徳集落遺跡遠景

第 199 図　秋徳集落遺跡採集遺物 1

第 201 図　秋徳集落遺跡採集遺物 2

第 200 図　秋徳集落内の遺跡

第 202 図　請阿室集落遺跡遠景



第 203 図　請阿室集落遺跡採集遺物

第 204 図　請阿室集落内の遺跡

秋徳集落遺跡では、土器・青磁・青花・本土産陶磁器・本土産陶器・骨製品などが採集される。

第 199 図 - 3 は青磁碗である。外面にはラマ式蓮弁文が見られる。釉を内外面に施釉し、高台内の一部にも釉がかかる。上田 C Ⅱ類（上田 1982）にあたり、年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前後である。骨製品は独鈷状の形態をなし、荒く加工がなされる。素材は馬の骨の可能性がある（第 201 図、樋泉岳二氏ご教授による）。

(15) 請阿室集落

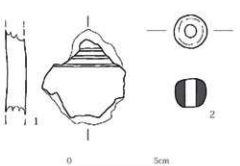
・請阿室集落遺跡（525-48-0）

請阿室集落は請島の北東側に位置する集落である。集落の東・西・南側は山に囲まれ、集落の後方、西・南側には沖積地が山裾近くまで広がる。集落の北側は入り江となり、入り江に沿って砂丘地が形成される。その砂丘地上に請阿室集落が位置している。

請阿室集落遺跡に関する遺物は、現在の請阿室集落内全域で採集される。このことから請阿室集落遺跡は、請阿室集落と同じ砂丘地上に位置し、遺跡範囲は集落範囲とほぼ同規模のものと推定される（第 204 図）。

請阿室集落遺跡ではスセン當式土器・カムィヤキ・青磁・本土産陶磁器・本土産陶器・沖縄産陶器・ガラス玉などが採集される。

第 205 図 - 1 はスセン當式土器の甕で、貝塚時代後 1 期後半のものである。胴部に横位



第 205 図　請阿室集落遺跡採集遺物実測図

の沈線文を３つ施す。第 205 図 - 2 はガラス玉である。

青磁は碗と皿が確認され、第 203 図 - 2 は青磁皿である。鍔縁状の口縁部をもち、外面に蓮弁文が見られる。年代は 14 世紀後半～15 世紀代である。

(16) 池地集落

・池地集落の概要

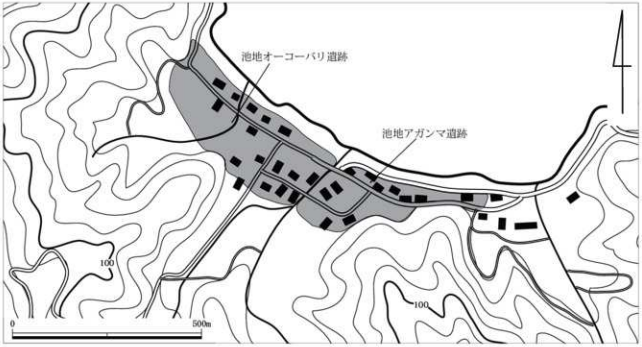
池地集落は請島の北西側に位置する集落である。集落の東・西・南側は山に囲まれ、集落の後方、西側には沖積地が山裾近くまで広がる。集落の北側は入り江となり、入り江に沿って砂丘地が形成される。その砂丘地上に池地集落が位置している。また集落の中心には、池地川が流れる。

・池地オーコーバリ遺跡 (525-18-0)

池地オーコーバリ遺跡は 1999(平成 11)年、鹿児島県教育委員会による農政分布調査の際、発見された。池地オーコーバリ遺跡に関する遺物は、池地川より北西側で多く採集される。このことから池地オーコーバリ遺跡は、池地集落と同じ砂丘地上に位置し、

第 206 図　池地アガンマ遺跡遠景

第 207 図　池地オーコーバリ遺跡遠景



第 208 図　池地集落内の遺跡 1

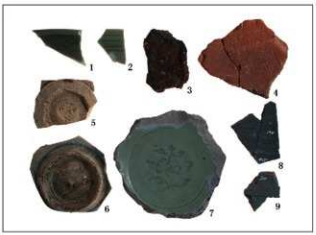
遺跡範囲は池地川より北西側に広がると推定される（第 208 図）。

池地オーコーバリ遺跡では、土器・布目圧痕土器・滑石混入土器・カムィヤキ・青磁・白磁・青花・本土産陶磁器・本土産陶器などが採集される。

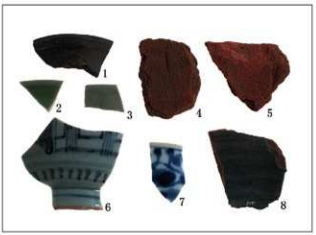
第 211 図 - 1 は布目圧痕土器で、年代は 9 世紀後半～ 10 世紀代である。

第 211 図-5 はカムィヤキの壺で、水道工事中に発見された。口縁部は外反し、口縁部下端は垂下する。外面には平行文タタキ目が見られる。内面には格子目当て具痕が見られるが、多くはナデ消される。器壁は薄手で、カムィヤキ A 群（新里編 2005）にあたり、年代は 11 世紀後半～ 13 世紀前半である。

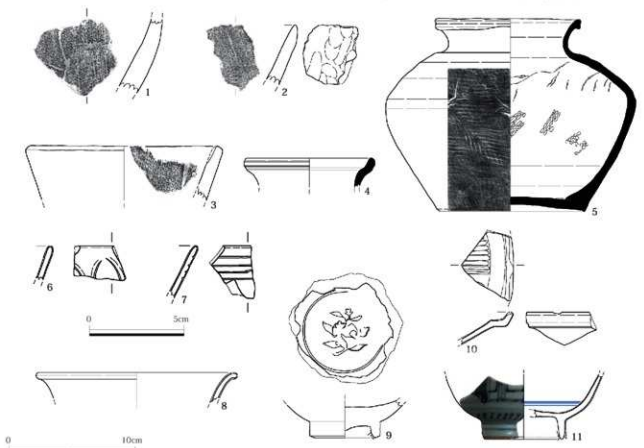
第 211 図 - 7 ～ 9 は青磁碗である。7 は外面に雷文が見られる。上田 C Ⅰ類（上田 1982）にあたり、



第 209 図　池地オーコーバリ遺跡採集遺物



第 210 図　池地アガンマ遺跡採集遺物



第 211 図　池地集落関連遺跡採集遺物実測図（6・7 のみ S ＝ 1/2、他は S ＝ 1/3）

第 212 図　池地集落伝世カムィヤキ

年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。8 は口縁部が外反する。上田ＤⅡ類（上田 1982）にあたり、年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。9 は見込に印花文が見られる。釉を全面に施釉した後、外底面の釉を剥ぎ取る。年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。

・池地アガンマ遺跡（525-19-0）

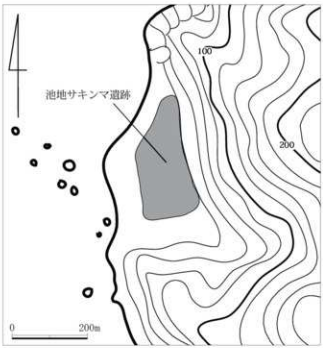
池地アガンマ遺跡は 1999（平成 11）年、鹿児島県教育委員会による農政分布調査の際、発見された。池地アガンマ遺跡に関する遺物は、池地川より南東側で多く採集される。このことから池地アガンマ遺跡は、池地集落と同じ砂丘地上に位置し、遺跡範囲は池地川より南東側に広がると推定される（第 208 図）。

池地アガンマ遺跡では、土器・布目圧痕土器・カムィヤキ・青磁・青花・本土産陶磁器・本土産陶器などが採集される。

第 211 図 - 2・3 は布目圧痕土器で、口縁部が外傾する。2 は口唇部が舌状、3 は口唇部が方形状となる。年代は 9 世紀後半～ 10 世紀代である。

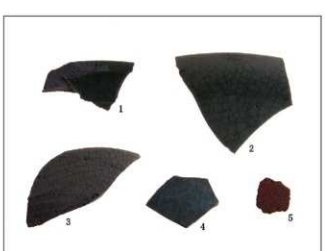
第 211 図 - 4 はカムィヤキの壺である。口縁部は外反し、口縁部下端は垂下しない。

第 211 図 - 6 は青磁碗で、外面に蓮弁文が見られる。上田ＢⅡ類（上田 1982）にあたり、年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。第 211 図-11 は青花の碗である。外面には寿字文・蓮弁文・圏線、内面には圏線が見られる。釉

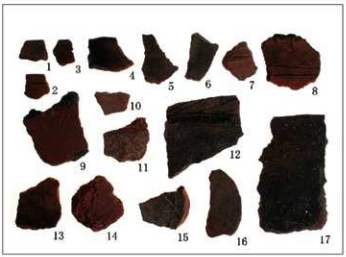


第 213 図　池地集落内の遺跡 2

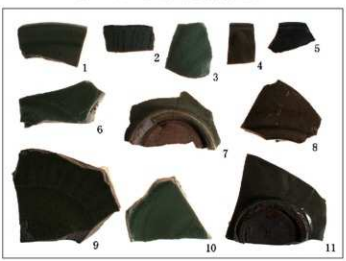
第 214 図　池地サキンマ遺跡遠景



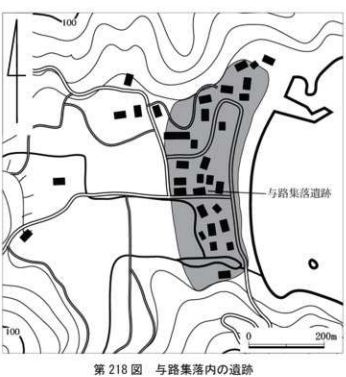
第 215 図　池地サキンマ遺跡採集遺物



第216図　与路集落遺跡採集遺物1



第217図　与路集落遺跡採集遺物2



第218図　与路集落内の遺跡

を全面に施釉した後、畳付の釉を剥ぎ取る。徳化窯系（福建）で、年代は18世紀後半～19世紀初頭である。

・池地サキンマ遺跡（525-52-0）

池地サキンマ遺跡は池地集落の西側、請島の最西端にある砂丘地上に位置している。砂丘地上で遺物が採集されることから、その遺跡範囲は砂丘地一帯に広がると推定される（第213図）。遺跡周辺の地形としては、遺跡後方には山裾が迫り、遺跡のある砂丘地は海岸近くに形成されている。また遺跡からは与路集落が目視できる。

池地サキンマ遺跡では、土器・青磁・白磁などが採集される。第211図-10は青磁盤である。鍔縁状の口縁部をもち、内面に蓮弁文が見られる。龍泉窯産で、14世紀後半～15世紀である。

(17) 与路集落

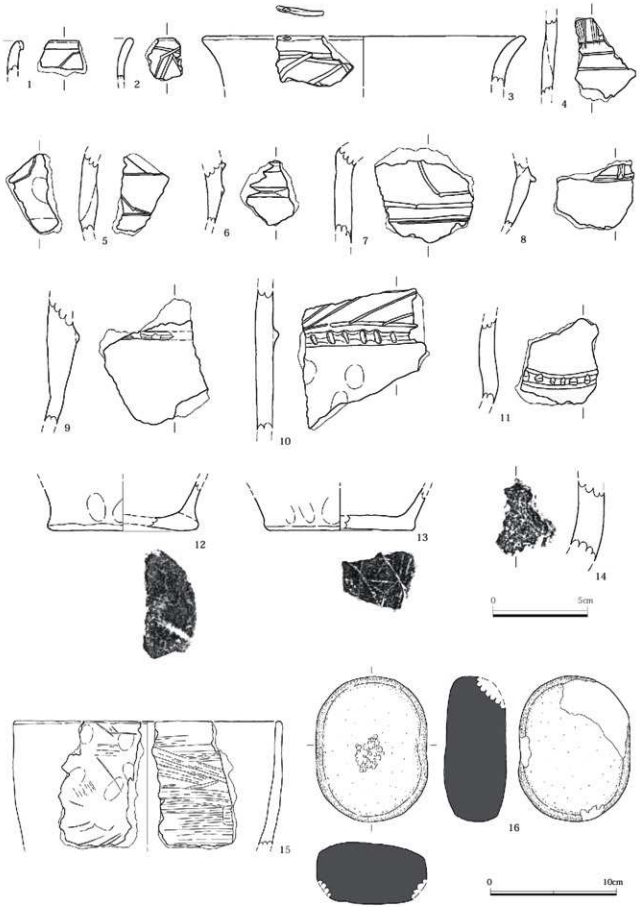
・与路集落遺跡（525-49-0）

与路集落は、与路島の東側に位置する集落である。集落の北・西・南側は山に囲まれ、集落後方には、沖積地が山裾近くまで広がる。集落の東側は入り江となり、入り江に沿って砂丘地が発達する。その砂丘地上に与路集落が位置している。

与路集落遺跡に関する遺物は、現在の与路集落内全域で採集される。このことから与路集落遺跡は現在の集落と同じ砂丘地上に位置し、遺跡範囲は集落範囲とほぼ同規模のものと推定される（第218図）。

与路集落遺跡では、弥生系土器・スセン當式土器・兼久式土器・布目圧痕土器・滑石混入土器・グスク土器・カムィヤキ・青磁・白磁・青花・本土産陶磁器・本土産陶器・沖縄産陶器・石器などが採集される。

第219図1～6は弥生系土器の甕で、貝塚時代後1期前半のものである。1は口縁上部を肥厚させ、口縁部が直口する。口縁部



第 219 図　与路集落遺跡採集遺物実測図 1（15・16 は S=1/3、他は S=1/2）

第 220 図　与路集落遺跡採集遺物 3

第 221 図　与路集落遺跡採集遺物 4

には沈線文を施す。2･3 は口縁部が外反し、口縁部に不定形の沈線文を施す。3 は口唇部に刻目を施す。4 は胴部に横位の沈線文を 3 つ施す。5 は内外面に沈線文が施す。6 は胴部に細い突帯を 2 つ張り付ける。

第 219 図 7 ～ 9 はスセン當式土器の甕で、貝塚時代後 1 期後半のものである。7 は胴部に L 字状と横位の沈線文をそれぞれ施す。8 は縦位・横位、9 は横位にそれぞれ突帯を貼りつける。

第 219 図 - 10・12・13 は兼久式土器の甕で、貝塚時代後 2 期のものである。10 は胴部に刻目突帯を貼りつけ、刻目突帯の上部に沈線文を施す。12･13 はくびれ平底の底部で、底面に木葉痕が見られる。11 は胴部に沈線文を 2 つ施した後、沈線文の間に刺突文を充填する。貝塚時代後期の土器である。

第 219 図-15 はグスク土器の鍋である。口縁部は直口する。器面調整が荒く、工具痕が多く見られる。また器面には混和剤の白砂が多数露出している。沖縄諸島のグスク土器の特徴（具志堅 2014）を参考にすると、年代は 12 世紀後半～ 13 世紀前半の可能性がある。

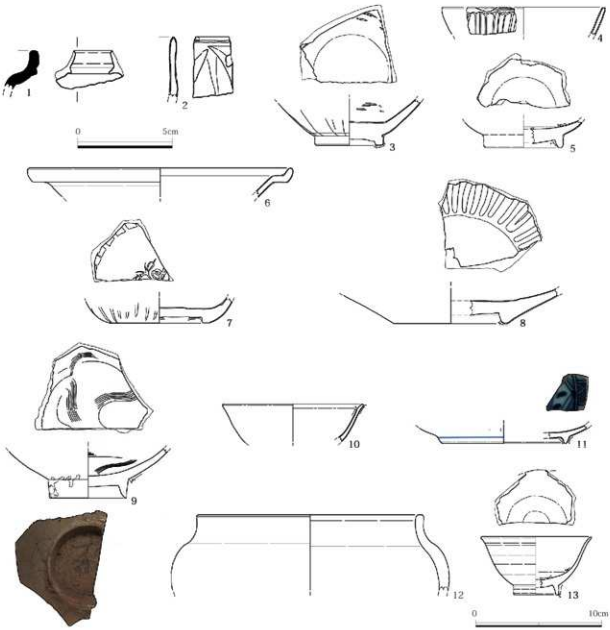
第 222 図 - 1 はカムィヤキの壺である。口縁部は外反し、口縁部下端は垂下する。

第 222 図 - 2 ～ 8 は青磁である。2 ～ 5 は碗である。2 は外面に片彫の鎬蓮弁文が見られる。上田 B Ⅰ類（上田 1982）にあたり、年代は 13 世紀後半～ 14 世紀初頭である。3 は外面に鎬蓮弁文が見られる。釉を内面全体と体部外面から高台まで施釉し、畳付の一部にも釉がかかる。大宰府Ⅱ b 類（宮崎編 2000）にあたり、年代は 13 世紀前後～ 13 世紀前半である。4 は外面に細蓮弁文が見られる。上田 B Ⅲ類（上田 1982）にあたり、年代は 15 世紀代である。5 は釉を内面全体と体部外面から高台内の一部に施釉した後、見込の釉を蛇の目状に剝ぎ取る。年代は 15 世紀代である。

6･8 は盤である。6 は鍔縁状の口縁部を持ち、年代は 14 世紀代である。8 は内面に蓮弁文が見られる。釉を全面に施釉した後、外底面の釉を剝ぎ取る。龍泉窯産で、年代は 14 世紀後半～ 15 世紀代である。7 は坏である。底部は碁筒底で、外面にはヘラ描の線刻蓮弁文が見られる。内面にはヘラ描による幅広の蓮弁文、見込には印花文が見られる。釉を全面に施釉した後、外底面の釉を輪状に剝ぎ取る。年代は 13 世紀後半～ 14 世紀前半である。

第 222 図 - 9・10 は白磁である。9 は碗である。内面には短い櫛目による花文が見られる。外底面には墨書文字が見られる（第 223 図）。文字は「荘綱」の可能性がある（永山修一氏ご教授による）。釉を内面全体から体部外面に施釉し、一部高台に釉が流れる。大宰府Ⅴ 4b 類（宮崎編 2000）で、年代は 12 世紀中頃～ 12 世紀後半である。10 は皿である。釉を全面に施釉した後、口唇部から口縁内面の釉を剝ぎ取る。大宰府Ⅸ 1c 類（宮崎編 2000）で、年代は 13 世紀後半～ 14 世紀前半である。

第 222 図 - 11 は青花の皿である。高台外面に圏線が見られ、体部にも施文される。見込にも文様



第 222 図　与路集落遺跡採集遺物実測図２（1・2 のみ S=1/2、他は S=1/3）

が見られる。釉を全面に施釉した後、畳付の釉を剥ぎ取る。年代は 17 世紀後半である。第 222 図 - 12 は無釉陶器の壺である。口縁部は直口する。沖縄産陶器の可能性があり、年代は 17 世紀ごろと推測される。第 222 図 - 13 は沖縄産陶器で、壺屋焼の小碗である。口縁部はゆるく外反する。釉を内面全体から高台外面まで施釉した後、見込の釉を蛇の目状に剥ぎ取る。年代は 18 世紀前半である。

第 219 図 - 16 は石器で、全面が研磨される。用途は不明で、人骨・カムィヤキと共に出土したと言われている。

第 223 図　墨書白磁赤外線写真

第 6 節　加計呂麻島諸鈍カネク遺跡出土の焼人骨（概報）

鹿児島女子短期大学　竹中正巳

はじめに

諸鈍カネク遺跡（鹿児島県瀬戸内町諸鈍金久原）は加計呂麻島の諸鈍集落の南側にある砂丘上に立地し、沖縄貝塚時代後期（弥生時代相当期）から近世にかけて営まれた遺跡である。これまでに、弥生系土器・スセン宮式土器・兼久式土器・布目圧痕土器・土師器・滑石混入土器・カムィヤキ・青磁・白磁・本土産陶器・沖縄産陶器・滑石製品・貝製品・フイゴの羽口などが採集される。

2009 年に諸鈍カネク遺跡を通る道路の工事中に焼人骨とほぼ完形のカムィヤキの壺 1 個が発見され、瀬戸内町教育委員会に届けられた。焼人骨とカムィヤキの関係は不明であるが、焼人骨に副葬された可能性も考えられない訳ではない。今回、この焼人骨について人類学的精査を行った結果を報告する。

所見と考察

焼人骨は 27 片で、総重量は 69.1g である。焼人骨の破片の部位同定を行ったところ、部位の重複はみとめられなかった。1 体分の乾燥人骨の重量は約 3kg と言われており、今回の焼人骨の総重量は 69.1g と少ない。しかし、工事中の不時発見であり、遺跡に遺存していたすべての人骨片が取り上げられたのかは検証のしようもなく、総重量や何体分の焼人骨なのかについての考察は差し控える。

一般に、軟組織が残っている時に焼かれたのであれば、長骨には外面の深いひび割れ、横方向の輪状の亀裂、長軸方向の裂開、著しい捩れが生ずるが、白骨を焼くと長軸方向の裂開と表面の浅いひび割れだけにとどまり、形が歪むことはないと言われている（Buikstra, 1973）。そのため、亡くなって遺体を火葬にすれば、ひび割れや亀裂、裂開、捻転が認められるはずである。本遺跡の焼人骨は、大きな変形は認められない。これは、軟部組織が残っている時に焼かれた（亡くなった遺体を火葬した）火葬骨ではなく、白骨化した人骨を焼いた焼人骨であるからである。

第 224 図に示した人骨番号 15 や 27 の破片の割れた断面には焼けた痕跡が確認できる。このことからも、これらの破片が焼かれる際には、現在の破片の大きさ程度に細片化されていたことがわかる。細片化されるにあたっては、当然のことながら、遺体は既に白骨化していたのである。

中世の奄美大島や喜界島では火葬が行われた。喜界島の城久遺跡群では土葬の後、骨になった遺骨を掘り上げ、その遺骨を焼いてから再び同じ墓坑に安置する焼骨再葬という葬法が行われた可能性が考えられている。ただ、城久遺跡群の焼けた骨の分析においては、確実に白骨化した骨を焼いた証拠は得られていなかった。諸鈍カネク遺跡の焼人骨は、人骨の性状の観察からは、確実に骨になった（白骨になった）人骨を細片化し、焼いたものであり、焼人骨の研究の面から焼人骨の再葬を支持できる初めての事例である。カムィヤキの壺も近くから発見されていることから、中世の焼人骨である可能性も考えられる。今後、この諸鈍カネク遺跡の焼人骨の年代測定を行い、再度、焼人骨の再埋葬について考えたい[※1]。

第 224 図　諸鈍カネク遺跡から出土した焼人骨（上：人骨番号 15　下：人骨番号 27）
（両焼人骨片の割れた断面が白く焼けていることから、白骨になった人骨が細片化され、焼かれたことがわかる）

第5章　総括

現在、瀬戸内町内では貝塚時代前期～薩摩藩統治時代までの各遺跡が確認されており、その総数は54遺跡にのぼる。瀬戸内町の地形的特徴として、町内全域で山地が発達しており、人々が生活を営むことができる平坦地は非常に限られている。そのため城郭などの特殊な遺跡を除けば、遺跡の周辺地形は各時代を通しておおむね共通している。多くの遺跡の場合、3方向は山に囲まれ、遺跡の前方には入り江が見られる。遺跡は入り江を単位として存在し、1つの入り江に対して1～3つの遺跡が形成される。ただ時代によって遺跡分布・立地に違いがあるため、各時代ごとの分布・立地状況を概観する。

貝塚時代前期

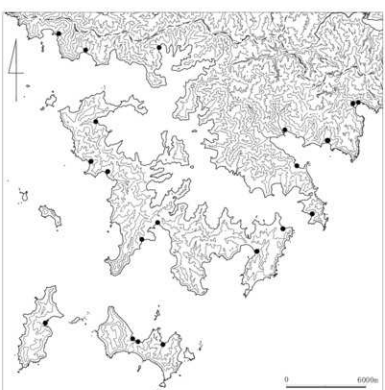
貝塚時代前期の遺跡は6遺跡確認されており、貝塚時代前2期の土器が採集された渡連アンキャバ遺跡が最も古い。当該期の遺跡は全て外洋に面した場所に分布しており、遺跡の多くは山裾に近い砂丘地上に形成される傾向にある。

貝塚時代後1期

貝塚時代後1期の遺跡は11遺跡確認されており、須子茂集落遺跡のように後1期の前半から後半にかけて遺跡が形成されるものが多い。当該期の遺跡の多くは外洋に面した場所か外洋に近い場所に分布する。そして遺跡の大半は、入り江に沿って形成された海岸近くの砂丘地上に立地する。

貝塚時代後2期

貝塚時代後2期の遺跡は16遺跡確認されており、遺跡分布や立地の特徴は貝塚時代後1期のものと共通する。ただし久慈マエダ遺跡・久慈集落遺跡のみ外洋には面しない大島海峡内にあり、沖積地上に立地している。



第225図　瀬戸内町内の遺跡分布1（貝塚時代前期～後期）

これらの遺跡では兼久式土器といった在地の製品は見つかっておらず、布目圧痕土器と須恵器といった島外の製品が見つかり、当該期におけるその他の遺跡とは異なる状況にある。

グスク時代

グスク時代になると遺跡数は大幅に増加し、49遺跡確認され、その中には西古見城跡や諸鈍城跡といった城郭も含まれる。この頃より外洋に面した場所だけではなく、大島海峡内にも遺跡が多数出現し、遺跡分布が瀬戸内町内全域に拡大する。また遺跡が海岸近くの砂丘地に加え、山裾近くの砂丘地や沖積地、丘陵地でも確認される。

琉球王国統治時代以降

琉球王国統治時代以降の遺跡は50

遺跡確認され、遺跡分布や立地の傾向はグスク時代のものと共通する。ただし現状では丘陵地に当該期の遺跡は確認されていない。また久慈白糖工場跡のように、遺跡の出現背景に為政者の存在が大きく関わる特殊な遺跡もある。そして当該期の遺跡のほとんどは、グスク時代より継続して形成された可能性があり、当該期の遺跡は現在の集落位置と重なることも多い。

以上、瀬戸内町域における各時代の遺跡分布および立地について概観した。瀬戸内町内の遺跡分布および遺跡立地の変遷には 2 つの画期がある。1 つは貝塚時代前期から貝塚時代後 1 期にかけてである。遺跡分布の傾向は変わらず、外洋に面したままだが、遺跡立地が山裾近くの砂丘地から海岸近くの砂丘地へと変わる（第 225 図）。

貝塚時代後 1 期には奄美・沖縄において南海産大型貝を交易物として、本土弥生文化との交易が活発に行われており、奄美・沖縄では当該期の遺跡がより海に近い砂丘地上で展開する（新里ほか 2014）。瀬戸内町内の遺跡分布・立地も同様な傾向があり、須子茂集落遺跡では搬入土器もいくつか見つかっている（鼎編 2010）。すなわち瀬戸内町域の貝塚時代後 1 期における、遺跡立地の変化の背景には、本土弥生文化との貝交易の存在が想定される。

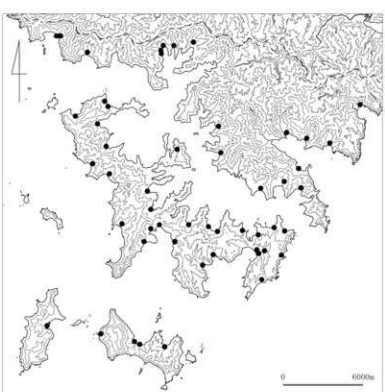
残りの 1 つは貝塚時代後 2 期からグスク時代にかけてである。グスク時代になると、遺跡分布が外洋に面した場所だけではなく、大島海峡内の外洋がまったく見えない場所にも見られるようになる。また遺跡は砂丘地のほか、沖積地や丘陵地でも形成され、遺跡立地が多様化する（第 226 図）。

グスク時代は奄美群島以南の島々で人々の生活・文化、島内の社会構造に大きな変化が見られ、具体的には本格的農耕・家畜飼育の普及、金属器の生産と普及、主に中国を対象とした交易の活発化、按司といった在地首長の出現などがある（新里ほか 2014）。

瀬戸内町域のグスク時代にみられる遺跡分布の拡大や、遺跡立地の多様化の背景には、農耕などで利用可能な土地が拡大したことが想定される。また大島海峡内には現在でも、水深が深くかつ波がおだやかな良港が見られる。このことから、グスク時代より遺跡分布が大島海峡内に拡大する背景には、農耕だけではなく、交易の活発化による瀬戸内町域に訪れる船舶の増加も想定できる。

瀬戸内町内では、本書で報告した遺跡以外の場所においても遺物が採集されているが、遺跡として判断するほどの量には至っていない。また遺跡の存在が想定される場所で、必ずしも遺跡を確認できていない。そのため今後も瀬戸内町内における遺跡の分布調査は継続しなければならない。

そして現状確認している遺跡の多くは、遺跡の表面を踏査したに過ぎない。今後は試掘調査などを行い、遺跡のより詳細な情報を蓄積していく必要がある。



第 226 図　瀬戸内町内の遺跡分布 2（グスク時代以降）

参考文献

上田　秀夫　1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』2　貿易陶磁研究会　pp. 55 ～ 70
鹿児島県教育委員会　1987『鹿児島県の中世城郭跡』
鹿児島県教育委員会　1990『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅱ』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（54）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2016『久慈白糖工場跡　現地説明会資料』
鼎丈太郎編　2005『瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書』瀬戸内町文化財調査報告書第 1 集　鹿児島県大島郡瀬戸内町教育委員会
鼎丈太郎　2007「瀬戸内町出土の完形品カムィヤキ」『瀬戸内町立図書館・郷土館　紀要』第 2 号　瀬戸内町立図書館・郷土館　pp. 1 ～ 28
鼎丈太郎編　2010『須子茂集落遺跡 - 範囲確認調査報告書』瀬戸内町文化財調査報告書第 3 集　鹿児島県大島郡瀬戸内町教育委員会
河口貞徳　1974「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』9　鹿児島考古学会　pp. 12 ～ 68
河口貞徳　上村俊雄　多々良友博　平島勇夫　肱岡隆夫　1974『嘉徳遺跡』　大島郡瀬戸内町教育委員会
具志堅　亮　2014「グスク土器の変遷」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究　研究論文集第 1 集　六一書房　pp. 215 ～ 226
新里亮人編　2005『カムィヤキ古窯跡群Ⅳ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書 12 伊仙町教育委員会
新里貴之　鼎丈太郎　2013「瀬戸内町安脚場遺跡採集土器（阿波連浦下層式土器）」『奄美考古』第 7 号　奄美考古学会　pp. 44 ～ 60
新里貴之　伊藤慎二　宮城弘樹　新里亮人　2014「琉球先史・原史文化の考古学的画期」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究　研究論文集第 1 集　六一書房　pp. 305 ～ 311
高宮広土　千田寛之　2014「琉球列島先史･原史時代における植物食利用-奄美･沖縄諸島を中心に」『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究　研究論文集第 2 集　六一書房　pp. 127 ～ 142
西古見慰霊碑建立実行委員会　1994『西古見集落誌』奄美共同印刷
森田　勉　1982「14 ～ 16 世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』2　貿易陶磁研究会　pp. 47 ～ 54
宮崎亮一編　2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ - 陶磁器分類編 - 』太宰府市の文化財 49　太宰府市教育委員会

注釈

※ 1　諸鈍カネク遺跡の人骨が出土したとされる一帯には、近世墓やそれに関わる伝承等は存在しない。そのため人骨が近世に関わる可能性は低い。

第４表　掲載遺物観察表１

遺物写真	遺物実測図	遺跡名	遺物名	器種	諸特徴
	第4図－1	嘉徳遺跡	面縄前庭式土器	深鉢	内外面：ナデ
	第4図－2	嘉徳遺跡	嘉徳式土器	深鉢	内外面：ナデ・ユビオサエ
	第4図－3	嘉徳遺跡	面縄東堂式土器	二重口縁	内外面：ナデ
	第4図－4	嘉徳遺跡	面縄東堂式土器	深鉢	内外面：ナデ・ヘラナデ
	第4図－5	嘉徳遺跡	嘉徳Ⅰ式A土器	深鉢	内外面：ナデ・ヘラナデ
	第4図－6	嘉徳遺跡	嘉徳Ⅱ式土器	深鉢	内外面：ナデ・ユビオサエ
	第4図－7	嘉徳遺跡	凹線文土器	深鉢	内外面：ナデ
	第5図－1	嘉徳遺跡	石器	石斧	礫面を多分に残す
	第5図－2	嘉徳遺跡	石器	石斧	磨製石斧
	第5図－3	嘉徳遺跡	石器	石斧	頁岩製　鑿型
	第5図－4	嘉徳遺跡	石器	砥石	砂岩製
	第5図－5	嘉徳遺跡	石器	鑿型石器	頁岩製　小型品
	第5図－6	嘉徳遺跡	石器	錘飾	変成岩製
第9図－1	第10図－3	嘉徳集落遺跡	白磁	碗	内外面：灰白色釉
第9図－2	第10図－2	嘉徳集落遺跡	白磁	碗	内外面：灰白色釉
第9図－3		嘉徳集落遺跡	カムィヤキ	－	外面：回転ナデ　内面：格子目タタキ痕
第9図－4	第10図－1	嘉徳集落遺跡	布目圧痕土器	－	外面：ナデ　内面：布目
第9図－5	第10図－4	嘉徳集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰オリーブ色釉
第9図－6	第10図－5	嘉徳集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　外底蛇の目釉剥ぎ
第9図－7	第10図－6	嘉徳集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　見込・外底釉剥ぎ
第9図－8		嘉徳集落遺跡	本土産陶器	壺か甕	外面：黒褐色　内面：無釉　輪轆成形
第9図－9		嘉徳集落遺跡	本土産陶磁器	皿	内外面：浅黄色釉　細貫入あり
第9図－10	第10図－7	嘉徳集落遺跡	青花	皿	内外面：明緑灰色釉　畳付釉剥ぎ
第12図－1	第17図－6	節子集落遺跡	カムィヤキ	不明	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ・格子目当て具痕
第12図－2	第17図－3	節子集落遺跡	布目圧痕土器	－	外面：ナデ　内面：布目
第12図－3	第17図－2	節子集落遺跡	弥生系土器	甕	内外面：ナデ・ユビオサエ
第12図－4	第17図－1	節子集落遺跡	嘉徳式土器	不明	内外面：ナデ
第12図－5	第17図－7	節子集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　外底蛇の目釉剥ぎ
第12図－6	第17図－5	節子集落遺跡	青磁	香炉	内外面：明緑灰色釉
第12図－7		節子集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　無文 上田D類　14世紀後半～15世紀前半
第12図－8	第17図－9	節子集落遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　内外面：灰白色釉　畳付釉剥ぎ
第12図－9	第17図－8	節子集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　外底蛇の目釉剥ぎ
第14図	第17図－4	節子集落遺跡	カムィヤキ	壺	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ・格子目当て具痕
第15図		節子集落遺跡	カムィヤキ	壺	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ
第16図		節子集落遺跡	カムィヤキ	壺	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ
第19図－1		網野子サト遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉 外面に鎬蓮弁文　13C後半～14C前半
第19図－2		網野子サト遺跡	白磁	皿	内外面：灰白色釉　口唇部釉剥ぎ 大宰府IX類　13C後半～14C前半
第19図－3		網野子サト遺跡	白磁	皿	内外面：灰白色釉　外底釉剥ぎ 大宰府IX類　13C後半～14C前半
第19図－4		網野子サト遺跡	沖縄産陶器	壺か甕	内外面：黒褐色釉
第19図－5		網野子サト遺跡	沖縄産陶器	碗か鉢	外面：鉄釉 内面：白化粧と透明釉　細貫入あり
第19図－6		網野子サト遺跡	沖縄産陶器	急須	内外面：白釉　外面に鉄釉と呉須で丸文
第19図－7		網野子サト遺跡	沖縄産陶器	瓶か	内外面：白釉　外面に鉄釉と呉須で線刻文
第24図－1		勝浦集落遺跡	布目圧痕土器	－	外面：不明　内面：布目
第24図－2		勝浦集落遺跡	布目圧痕土器	－	外面：不明　内面：布目
第24図－3		勝浦集落遺跡	滑石片	－	二次加工痕あり
第24図－4		勝浦集落遺跡	青磁	不明	内外面：灰オリーブ色釉　外面に蓮弁文
第24図－5		勝浦集落遺跡	青磁	碗	内外面：緑灰色釉　無文
第24図－6	第25図－1	勝浦集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　外底蛇の目釉剥ぎ
第24図－7		勝浦集落遺跡	本土産陶器	不明	内外面：黒褐色釉　輪轆成型
第24図－8		勝浦集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰オリーブ色釉　無文
第24図－9	第25図－2	勝浦集落遺跡	沖縄産陶器	碗	内外面：灰釉　胴下部まで施釉
第27図－1		伊須集落遺跡	本土産陶磁器	杯	染付　内外面：灰白色釉 外面に施文(措絵か)　外底「巨鹿城製」
第27図－2	第28図－2	伊須集落遺跡	青磁	碗	内外面：緑灰色釉

第５表　掲載遺物観察表２

遺物写真	遺物実測図	遺跡名	遺物名	器種	諸特徴
第27図・3		伊須集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰オリーブ色釉　無文
第27図・4	第28図・1	伊須集落遺跡	搬入土器	不明	外面：ナデ・工具ナデ　内面：ナデ
第27図・5		伊須集落遺跡	本土産陶磁器	碗蓋	染付　内外面：明緑灰色釉　畳付釉剝ぎ 外面に施文(漢数字のハか)
第27図・6	第28図・3	伊須集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　外底蛇の目釉剝ぎ
第31図・1		蘇刈集落遺跡	本土産陶器	瓶か	外面：褐色釉　内面：轆轤痕顕著
第31図・2		蘇刈集落遺跡	青磁	皿	内外面：緑灰色釉　外底釉剝ぎ　無文
第31図・3		蘇刈集落遺跡	カムィヤキ	壺か甕	外面：不明　内面：平行文当て具痕
第31図・4		蘇刈集落遺跡	本土産陶磁器	不明	内外面：灰白色釉　無文
第31図・5		蘇刈集落遺跡	本土産陶磁器	急須か	内外面：乳白色釉　細貫入あり
第35図・1	第36図・1	嘉鉄サト遺跡	青磁	盤	内外面：灰白色釉
第35図・2	第36図・2	嘉鉄サト遺跡	青磁	皿	内外面：オリーブ灰色釉　畳付・外底無釉
第35図・3		嘉鉄サト遺跡	カムィヤキ	壺か甕	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ・格子目当て具痕
第35図・4		嘉鉄サト遺跡	土器	不明	内外面：不明
第35図・5		嘉鉄サト遺跡	土器	不明	内外面：不明
第35図・6	第36図・4	嘉鉄サト遺跡	輸入陶磁器	皿	色絵　内外面：灰白色釉 見込・畳付釉剝ぎ
第35図・7	第36図・6	嘉鉄サト遺跡	本土産陶磁器	鉢	内外面：暗灰黄色釉
第35図・8	第36図・5	嘉鉄サト遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　内外面：灰白釉
第35図・9	第36図・3	嘉鉄サト遺跡	白磁	皿	内外面：透明釉　畳付釉剝ぎ
第40図・1	第42図・1	嘉鉄カイツ遺跡	スセン當式土器	甕	外面：ナデ・ヘラナデ・ユビオサエ 内面：ナデ・ユビオサエ
第40図・2	第42図・2	嘉鉄カイツ遺跡	貝塚後期系土器	不明	内外面：ナデ・ユビオサエ
第40図・3	第42図・3	嘉鉄カイツ遺跡	兼久式土器	甕	内外面：ナデ・ユビオサエ
第40図・4	第42図・6	嘉鉄カイツ遺跡	兼久式土器	甕	外面：ナデ・ヘラナデ・ユビオサエ 内面：ナデ・ユビオサエ
第40図・5	第42図・4	嘉鉄カイツ遺跡	兼久式土器	甕	外面：ナデ・ヘラナデ・ユビオサエ 内面：ナデ・ヘラナデ・ユビオサエ
第40図・6	第42図・5	嘉鉄カイツ遺跡	兼久式土器	甕	内外面：ナデ・ユビオサエ
第41図・1	第42図・7	嘉鉄カイツ遺跡	兼久式土器	甕	内外面：ナデ・ユビオサエ
第41図・2	第42図・8	嘉鉄カイツ遺跡	兼久式土器	甕	内外面：ナデ・ユビオサエ
第41図・3	第42図・9	嘉鉄カイツ遺跡	兼久式土器	甕	内外面：ナデ・ユビオサエ
第41図・4	第42図・11	嘉鉄カイツ遺跡	布目圧痕土器	－	外面：不明　内面：布目
第41図・5	第42図・10	嘉鉄カイツ遺跡	布目圧痕土器	－	外面：ナデ　内面：布目
第41図・6	第42図・12	嘉鉄カイツ遺跡	布目圧痕土器	－	外面：不明　内面：布目
第45図・1	第44図・1	清水集落遺跡	白磁	碗	内外面：明緑灰色釉
第45図・2		清水集落遺跡	カムィヤキ	不明	外面：回転ナデ　内面：平行文タタキ目
第45図・3	第44図・5	清水集落遺跡	青磁	皿	内外面：オリーブ褐色釉
第45図・4	第44図・6	清水集落遺跡	青磁	皿	内外面：オリーブ灰色釉
第45図・5	第44図・4	清水集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　外底蛇の目釉剝ぎ
第45図・6	第44図・2	清水集落遺跡	青磁	皿	内外面：オリーブ灰色釉　外底無釉
第45図・7	第44図・3	清水集落遺跡	青花	碗	内外面：灰白色釉 見込蛇の目釉剝ぎ　高台無釉
第50図		手安集落遺跡	カムィヤキ	不明	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ
第53図－1		油井スサレ遺跡	青磁	碗	内外面：灰オリーブ色釉　外底無釉 外面に運弁文か　見込に印花文
第53図－2		油井スサレ遺跡	土器	不明	内外面：不明
第53図－3		油井スサレ遺跡	土器	不明	内外面：不明
第53図－4		油井スサレ遺跡	土器	不明	内外面：不明
第53図－5		油井スサレ遺跡	青磁	不明	内外面：灰オリーブ色釉　無文
第53図－6		油井スサレ遺跡	白磁か	不明	内外面：灰白色釉　無文　轆轤成型
第53図－7		油井スサレ遺跡	青磁	不明	内外面：オリーブ灰色釉　外面に運弁文
第53図－8		油井スサレ遺跡	青磁	不明	内外面：オリーブ灰色釉　無文
第53図－9		油井スサレ遺跡	本土産陶器	壺か甕	内外面：黒褐色釉　轆轤成形
第56図・1	第57図・5	古志サト遺跡	青花	碗	内外面：明緑灰色
第56図・2	第57図・2	古志サト遺跡	青磁	碗	内外面：明オリーブ灰色釉
第56図・3	第57図・1	古志サト遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉
第56図・4		古志サト遺跡	カムィヤキ	不明	内外面：回転ナデ
第56図・5	第57図・7	古志サト遺跡	青花	皿	内外面：灰白色釉 畳付釉剝ぎ　見込蛇の目釉剝ぎ
第56図・6	第57図・6	古志サト遺跡	白磁	碗	内面：灰白色透明釉　高台無釉
第56図・7	第57図・4	古志サト遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉
第56図・8	第57図・3	古志サト遺跡	青磁	碗	内外面：灰オリーブ色釉
第59図・1		久慈イメ遺跡	沖縄産陶器	壺か甕	無釉陶器　外面：灰褐色　内面：灰色

第６表　掲載遺物観察表３

遺物写真	遺物実測図	遺跡名	遺物名	器種	諸特徴
第59図・2		久慈イメ遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　内外面：明緑灰色釉 見込蛇の目釉剥ぎか 外面に圏線　見込に圏線2条
第59図・3		久慈イメ遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　内外面：明緑灰色釉 外面に施文(文様不明)
第59図・4		久慈イメ遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　内外面：明緑灰色釉　見込輪状釉剥ぎ 外面に圏線
第59図・5		久慈イメ遺跡	本土産陶磁器	皿	染付　内外面：明緑灰色釉　見込に五弁花文
第59図・6		久慈イメ遺跡	本土産陶磁器	不明	内外面：浅黄色釉　高台無釉
第62図・1		久慈マエダ遺跡	本土産陶磁器	不明	内外面：灰白色釉　無文
第62図・2	第65図	久慈マエダ遺跡	須恵器	甕・壺	外面：回転ナデ　内面：平行当て具
第62図・3		久慈マエダ遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　内外面：白化粧と透明釉　畳付釉剥ぎ 外面に格子文か　見込に圏線1条
第62図・4		久慈マエダ遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　内外面：明緑灰色釉 外面に施文(文様不明)　見込に圏線1条
第64図・1		久慈集落遺跡	布目圧痕土器	－	外面：不明　内面：布目
第64図・2		久慈集落遺跡	青磁	盤	内外面：オリーブ灰色釉　無文
第64図・3		久慈集落遺跡	カムィヤキ	不明	内外面：回転ナデ
第64図・4		久慈集落遺跡	沖縄産陶器	碗	内外面：白化粧と透明釉　見込蛇の目釉剥ぎ
第71図・1		管鉈集落遺跡	兼久式土器	甕	内外面：ナデ
第71図・2		管鉈集落遺跡	布目圧痕土器	－	外面：不明　内面：布目
第71図・3	第73図・1	管鉈集落遺跡	土師器	坏	内外面：回転ナデ
第71図・4		管鉈集落遺跡	滑石混入土器	不明	内外面：ナデ
第71図・5	第73図・5	管鉈集落遺跡	青磁	皿	内外面：明緑灰色釉
第71図・6	第73図・3	管鉈集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉
第71図・7		管鉈集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　無文
第71図・8	第73図・7	管鉈集落遺跡	輸入陶磁器	小坏	外面：瑠璃釉　内面：失透釉
第71図・9	第73図・2	管鉈集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰オリーブ色釉
第71図・10	第73図・4	管鉈集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉
第71図・11	第73図・6	管鉈集落遺跡	青磁	皿	内外面：明オリーブ灰色釉　畳付・外底無釉
第78図・1	第76図・1	西古見集落遺跡	弥生系土器	甕	内外面：ナデ
第78図・2	第76図・2	西古見集落遺跡	弥生系土器	甕	内外面：ナデ
第78図・3	第76図・3	西古見集落遺跡	弥生系土器	甕	内外面：不明
第78図・4	第76図・4	西古見集落遺跡	スセン當式土器	甕	外面：ナデ・ヘラナデ　内面：ナデ
第78図・5	第76図・5	西古見集落遺跡	スセン當式土器	甕	内外面：ナデ
第78図・6	第76図・6	西古見集落遺跡	スセン當式土器	甕	外面：ナデ　内面：不明
第78図・7	第76図・7	西古見集落遺跡	スセン當式土器	甕	外面：ヘラナデ 内面：ナデ・ヘラナデ
第78図・8	第76図・8	西古見集落遺跡	スセン當式土器	甕	内外面：ナデ
第78図・9	第76図・9	西古見集落遺跡	兼久式土器	甕	内外面：ナデ
第78図・10	第76図・10	西古見集落遺跡	兼久式土器	甕	内外面：ナデ
第78図・11	第76図・12	西古見集落遺跡	スセン當式土器	甕	外面：ナデ・ユビオサエ　内面：ナデ
第78図・12	第76図・11	西古見集落遺跡	兼久式土器	甕	内外面：ナデ
第79図・1	第76図・16	西古見集落遺跡	沖縄産陶器	瓶	渡名喜瓶　外面：黒褐色釉　内面：無釉
第79図・2	第76図・13	西古見集落遺跡	青磁	盤	内外面：灰オリーブ色釉
第79図・3	第76図・14	西古見集落遺跡	青磁	皿	内外面：オリーブ灰色釉
第79図・4		西古見集落遺跡	褐釉陶器	壺か甕	内外面：褐色釉　素地：砂粒多 磁竈窯　15～16C
第79図・5	第76図・15	西古見集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰オリーブ色釉
第80図		西古見集落遺跡	フイゴの羽口	－	内外面：不明
第81図	第76図・17	西古見集落遺跡	貝製品	貝輪	ゴホウラ製
第84図・1		実久集落遺跡	沖縄産陶器	瓶	内外面：白化粧に透明釉 外面に鉄釉で線刻格子文
第84図・2		実久集落遺跡	青花か	碗	内外面：灰白色釉　外面に圏線と花文
第84図・3		実久集落遺跡	本土産陶磁器	不明	染付 内外面：灰白色釉 外面施文(文様不明)
第84図・4		実久集落遺跡	本土産陶磁器	不明	染付　内外面：明緑灰色釉 外面施文(文様不明)
第84図・5		実久集落遺跡	カムィヤキ	壺	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・格子目当て具痕
第84図・6		実久集落遺跡	土器	不明	内外面：不明
第84図・7		実久集落遺跡	土器	不明	内外面：不明
第84図・8	第85図・2	実久集落遺跡	青磁	小碗	内外面：灰オリーブ色釉　外底無釉
第84図・9	第85図・1	実久集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色　外底釉剥ぎ
第84図・10		実久集落遺跡	カムィヤキ	不明	内外面：回転ナデ
第84図・11		実久集落遺跡	土器	不明	内外面：不明

第７表　掲載遺物観察表４

遺物写真	遺物実測図	遺跡名	遺物名	器種	諸特徴
第84図・12		実久集落遺跡	白磁か	不明	内外面：オリーブ灰色釉　無文
第87図・1		芝タンマ遺跡	青花か	不明	内外面：灰白色釉 外面に牡丹唐草文
第87図・2		芝タンマ遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　内外面：明緑灰色釉 外面に草文
第87図・3		芝タンマ遺跡	土器	不明	内外面：不明
第87図・4		芝タンマ遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　内外面：明緑灰色釉　畳付釉剥ぎ 外面に圏線　内面に圏線2条と五弁花文
第87図・5	第91図・1	芝タンマ遺跡	カムィヤキ	壺	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・格子目当て具痕
第90図・1		芝集落遺跡	青花	皿	内外面：明緑灰色釉　畳付釉剥ぎ 外面に唐草文か　見込に玉取獅子文か
第90図・2		芝集落遺跡	白磁か	碗	内外面：明緑灰色釉　内面に印花文　14C
第90図・3		芝集落遺跡	青磁	皿	内外面：オリーブ灰色釉　無文
第90図・4		芝集落遺跡	青磁	碗	内外面：明オリーブ灰色釉　外面に雷文か
第90図・5		芝集落遺跡	カムィヤキ	不明	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：格子目当て具痕
第90図・6	第91図・4	芝集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰オリーブ色釉　外底蛇の目釉剥ぎ
第90図・7	第91図・3	芝集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰オリーブ色釉
第90図・8	第91図・2	芝集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色
第90図・9		芝集落遺跡	カムィヤキ	壺か甕	内外面：回転ナデ
第94図・1		薩川集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰オリーブ色釉　無文 上田ＤⅡ類　14C後半～15C前半
第94図・2		薩川集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　無文 上田ＤⅡ類　14C後半～15C前半
第94図・3		薩川集落遺跡	青磁	碗	内外面：明オリーブ灰色釉 外面に片彫鎬蓮弁文 上田ＢⅠ類　13C後半～14C初
第94図・4	第95図	薩川集落遺跡	仲原式土器	深鉢	内外面：ナデ・ユビオサエ
第94図・5		薩川集落遺跡	白磁	碗	内面：灰白色釉 胴上部外面まで施釉か 無文　大宰府Ⅳ類　11C後半～12C前半
第94図・6		薩川集落遺跡	青花	碗	内外面：明緑灰色釉　畳付釉剥ぎ 見込に草花文
第94図・7		薩川集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰白色釉　外面に雷文 上田Ｃ類　14C後半～15C初
第94図・8		薩川集落遺跡	カムィヤキ	壺か甕	内外面：回転ナデ
第94図・9		薩川集落遺跡	カムィヤキ	壺	外面：回転ナデ　内面：回転ナデ ・格子目当て具痕　外面に波状文
第94図・10		薩川集落遺跡	沖縄産陶器	碗	内外面：灰オリーブ色釉　胴下部まで施釉
第94図・11		薩川集落遺跡	青磁	盤	内外面：灰オリーブ色釉　細貫入　無文
第94図・12		薩川集落遺跡	カムィヤキ	壺か甕	内外面：回転ナデ
第94図・13		薩川集落遺跡	沖縄産陶器	皿	内外面：灰オリーブ色釉 胴下部まで施釉　無文
第94図・14		薩川集落遺跡	カムィヤキ	不明	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ・格子目当て具痕
第98図・1	第99図・2	瀬武サト遺跡	白磁	碗	内外面：灰白色釉　胴下部外面無釉
第98図・2	第99図・1	瀬武サト遺跡	カムィヤキ	壺	内外面：回転ナデ
第98図・3		瀬武サト遺跡	カムィヤキ	壺か甕	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ・格子目当て具痕
第98図・4	第99図・3	瀬武サト遺跡	青磁	碗	内外面：灰色釉　畳付～外底無釉
第98図・5		瀬武サト遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　内外面：灰白色釉 外面に圏線2条　内面に圏線1条
第98図・6		瀬武サト遺跡	青磁	碗	内外面：明オリーブ色釉 外面に細蓮弁文　上田ＢⅣ類　15C後半～16C
第98図・7		瀬武サト遺跡	カムィヤキ	不明	外面：平行文タタキ目　内面：当て具痕
第98図・8		瀬武サト遺跡	カムィヤキ	不明	内外面：回転ナデ
第98図・9	第99図・4	瀬武サト遺跡	青磁	盤	内外面：灰オリーブ色釉
第98図・10		瀬武サト遺跡	青磁	盤	内外面：オリーブ灰色釉　内面に蓮弁文か
第98図・11		瀬武サト遺跡	青磁	皿	内外面：オリーブ灰色釉　無文 14C後半～15C前
第102図・1		阿多地イバタ遺跡	褐釉陶器	壺	外面：灰黄褐色釉　内面：無釉
第102図・2		阿多地イバタ遺跡	青磁	碗	内外面：明オリーブ灰色　無文　15C～16C
第102図・3	第104図・13	阿多地イバタ遺跡	カムィヤキ	壺	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ・格子目当て具痕
第102図・4		阿多地イバタ遺跡	青花	皿	内外面：灰白色釉　底部無釉 内外施文あり（文様不明） 碁笥底　景德鎮窯　16C前～半
第102図・5		阿多地イバタ遺跡	滑石混入土器	不明	内外面：不明
第103図・1	第104図・3	阿多地イバタ遺跡	弥生系土器	甕	内外面：ナデ

第８表　掲載遺物観察表５

遺物写真	遺物実測図	遺跡名	遺物名	器種	諸特徴
第103図－２	第104図－２	阿多地イバタ遺跡	弥生系土器	甕	内外面：ナデ
第103図－３		阿多地イバタ遺跡	弥生系土器	甕	内外面：ナデ
第103図－４		阿多地イバタ遺跡	弥生系土器	不明	外面：ナデ　内面：ナデ・ユビオサエ
第103図－５		阿多地イバタ遺跡	土器	不明	内外面：ナデ
第103図－６	第104図－１	阿多地イバタ遺跡	弥生系土器	甕	内外面：ナデ
第103図－７		阿多地イバタ遺跡	弥生系土器	不明	内外面：ナデ
第103図－８		阿多地イバタ遺跡	弥生系土器	不明	外面：ナデ　内面：ナデ・ユビオサエ
第103図－９		阿多地イバタ遺跡	土器	不明	内外面：ナデ
第103図－10	第104図－４	阿多地イバタ遺跡	スセン當式土器	甕	内外面：ナデ・ヘラナデ・ユビオサエ
第103図－11	第104図－７	阿多地イバタ遺跡	兼久式土器	甕	内外面：ナデ
第103図－12	第104図－６	阿多地イバタ遺跡	兼久式土器	不明	内外面：ナデ
第103図－13	第104図－５	阿多地イバタ遺跡	兼久式土器	不明	内外面：ナデ
第103図－14	第104図－８	阿多地イバタ遺跡	兼久式土器	甕	内外面：ナデ
第103図－15		阿多地イバタ遺跡	土器	不明	内外面：ナデ
第103図－16		阿多地イバタ遺跡	土器	不明	内外面：ナデ
第103図－17		阿多地イバタ遺跡	布目圧痕土器	－	外面：ナデ　内面：布目
第103図－18		阿多地イバタ遺跡	布目圧痕土器	－	外面：ナデ　内面：布目
第103図－19	第104図－12	阿多地イバタ遺跡	スセン當式土器	甕	外面：ナデ・ユビオサエ　内面：ナデ
第103図－20	第104図－11	阿多地イバタ遺跡	スセン當式土器	甕	外面：ナデ・ユビオサエ　内面：ナデ
第103図－21	第104図－10	阿多地イバタ遺跡	後期系土器か	不明	内外面：ナデ
第103図－22	第104図－９	阿多地イバタ遺跡	布目圧痕土器	－	外面：ナデ　内面：布目
第106図－１	第105図－１	阿多地イバタ遺跡	貝製品	貝符	イモガイ製
第106図－２	第105図－２	阿多地イバタ遺跡	貝製品	貝匙	ヤコウガイ製
第106図－３	第105図－３	阿多地イバタ遺跡	貝製品	貝匙	ヤコウガイ製
第106図－４	第105図－５	阿多地イバタ遺跡	石器	敲石	一部磨られている
第106図－５	第105図－４	阿多地イバタ遺跡	石器	石斧	磨製石斧
第111図－１		須子茂集落遺跡	沖縄産陶器	皿	湧田焼か　内外面：灰オリーブ釉 見込・高台無釉
第111図－２		須子茂集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色　無文 上田Ｄ類　14C後半～15C前半
第111図－３	第110図－２	須子茂集落遺跡	スセン當式土器	甕	内外面：ナデ
第111図－４	第110図－１	須子茂集落遺跡	弥生系土器	甕	内外面：ナデ
第111図－５	第110図－６	須子茂集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰オリーブ色釉
第111図－６	第110図－３	須子茂集落遺跡	スセン當式土器	甕	内外面：ナデ
第111図－７	第110図－８	須子茂集落遺跡	青花	皿	内外面：明緑灰色釉　畳付釉剥ぎ
第111図－８	第110図－７	須子茂集落遺跡	青花	碗	内外面：灰白色釉
第111図－９	第110図－４	須子茂集落遺跡	カムィヤキ	壺	内外面：回転ナデ
第111図－10		須子茂集落遺跡	土器	不明	外面：ミガキ　内面：不明
第112図	第110図－５	須子茂集落遺跡	カムィヤキ	壺	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ・格子目当て具痕
第116図		武名チノウラ遺跡	青磁	碗	内外面：明オリーブ灰色釉　無文 上田Ｄ類　14C後半～15C前半
第120図－１		俣サト遺跡	本土産陶磁器	碗	内外面：灰白色釉 見込蛇の目釉剥ぎ　外面に網目文
第120図－２		俣サト遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　内外面：灰白色釉　内面に圏線
第120図－３		俣サト遺跡	沖縄産陶器	壺か甕	無釉陶器　内外面：灰色
第120図－４		俣サト遺跡	青磁	碗	内外面：明オリーブ灰色釉　内面に印花文
第123図－１		瀬相ムラウチ遺跡	青磁	碗	内外面：明オリーブ灰色釉　無文 龍泉窯産　15C　第123図－３・４と同一個体
第123図－２		瀬相ムラウチ遺跡	青磁	不明	内外面：明オリーブ灰色釉　無文
第123図－３		瀬相ムラウチ遺跡	青磁	碗	内外面：明オリーブ灰色釉　無文 龍泉窯産　15C　第123図－１・４と同一個体
第123図－４		瀬相ムラウチ遺跡	青磁	碗	内外面：明オリーブ灰色釉　無文 龍泉窯産　15C　第123図－１・３と同一個体
第123図－５		瀬相ムラウチ遺跡	青磁	不明	内外面：明緑灰色釉　無文
第123図－６		瀬相ムラウチ遺跡	青磁	不明	内外面：オリーブ灰色釉　無文
第123図－７		瀬相ムラウチ遺跡	本土産陶器	擂鉢	摩耗のため、詳細は不明
第123図－８		瀬相ムラウチ遺跡	本土産陶磁器	不明	内外面：オリーブ灰色釉 体部外面・高台無釉
第123図－９		瀬相ムラウチ遺跡	本土産陶磁器	皿	染付　内外面：灰白色釉 内面に施文（文様は不明）
第128図－１	第127図－12	西阿室集落遺跡	青磁	盤	内外面：暗オリーブ灰色釉
第128図－２	第127図－10	西阿室集落遺跡	青磁	皿	内外面：オリーブ灰色釉
第128図－３		西阿室集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　無文 14C後半～15C前半

第９表　掲載遺物観察表６

遺物写真	遺物実測図	遺跡名	遺物名	器種	諸特徴
第128図－４	第127図－３	西阿室集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉
第128図－５	第127図－４	西阿室集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰オリーブ色釉
第128図－６	第127図－８	西阿室集落遺跡	青磁	皿	内外面：灰オリーブ色釉　外底釉剥ぎ
第128図－７	第127図－７	西阿室集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ色釉　畳付釉剥ぎ
第128図－８	第127図－５	西阿室集落遺跡	青磁	碗	内外面：明オリーブ灰色釉　見込・高台無釉
第128図－９		西阿室集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　外底無釉 見込に陰圏線と印花文　龍泉窯産　15C
第128図－10	第127図－６	西阿室集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉
第128図－11	第127図－９	西阿室集落遺跡	青磁	皿	内外面：オリーブ灰色釉
第128図－12		西阿室集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　外底無釉 見込に陰圏線と印花文
第129図－１		西阿室集落遺跡	白磁	不明	外面：灰白色釉　内面：無釉　把手付
第129図－２		西阿室集落遺跡	青磁	盤	外内面：オリーブ灰色釉　内面に蓮弁文
第129図－３	第127図－２	西阿室集落遺跡	カムィヤキ	壺・甕	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ・綾杉目文当て具痕
第129図－４	第127図－１	西阿室集落遺跡	兼久式土器	甕	内外面：ナデ
第129図－５		西阿室集落遺跡	カムィヤキ	不明	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・格子目当て具痕
第129図－６		西阿室集落遺跡	白磁	碗か	内外面：灰白色釉　内面に陰圏線1条
第129図－７		西阿室集落遺跡	青磁	碗	内外面：緑灰色釉　無文　15C
第129図－８		西阿室集落遺跡	青花	碗	内外面：明緑灰色釉　外面に草花文 徳化窯産　19C
第129図－９		西阿室集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　外底無釉 内面に印花文
第129図－10	第127図－11	西阿室集落遺跡	青花	皿	内外面：明緑灰色釉
第129図－11		西阿室集落遺跡	青花	瓶	外面：明緑灰色釉　内面：無釉 外面に花弁文　明代
第129図－12		西阿室集落遺跡	褐釉陶器	壺	外面：暗オリーブ灰色釉　内面：無釉
第131図－１		花富ヒラタ遺跡	本土産陶磁器	瓶	染付　外面：透明釉　内面：無釉 外面に草文
第131図－２		花富ヒラタ遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　無文 上田D類　14C後半～15C前後
第131図－３		花富ヒラタ遺跡	本土産陶磁器	皿か	染付　内外面：明緑灰色釉 内面に施文（文様不明）
第131図－４		花富ヒラタ遺跡	青磁	不明	内外面：オリーブ灰色釉 外面に蓮弁文か　内面に印花文
第139図－１		伊子茂ナカサト遺跡	青磁	盤	内外面：オリーブ灰色釉　無文　15C
第139図－２		伊子茂ナカサト遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉 外面に雷文帯とラマ式蓮弁文か 15C後半～16C前半
第139図－３		伊子茂ナカサト遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉 外面に細蓮弁文　15C後半～16C前半
第139図－４	第137図－２	伊子茂ナカサト遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉
第139図－５	第137図－１	伊子茂ナカサト遺跡	カムィヤキ	壺	内外面：回転ナデ
第139図－６		伊子茂ナカサト遺跡	白磁	坏	内外面：灰白色釉　漳武窯産 森田D群　14C末～15C
第139図－７		伊子茂ナカサト遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉 見込を蛇の目釉剥ぎ　無文　14C
第139図－８		伊子茂ナカサト遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　無文
第139図－９		伊子茂ナカサト遺跡	沖縄産陶器	碗	灰釉碗　内外面：灰白色釉 胴下部より下は無釉
第139図－10		伊子茂ナカサト遺跡	青磁	碗	内外面：灰白色釉　外底蛇の目釉剥ぎ 見込に陰圏線と印花文
第140図－１	第138図－１	伊子茂ナカサト遺跡	石器	石斧	磨製石斧
第140図－２	第138図－２	伊子茂ナカサト遺跡	石器	石斧	磨製石斧
第140図－３	第138図－３	伊子茂ナカサト遺跡	石器	石斧	大型磨製石斧
第142図－１		於斎集落遺跡	カムィヤキ	不明	内外面：ナデ
第142図－２		於斎集落遺跡	カムィヤキ	不明	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ
第142図－３	第144図	於斎集落遺跡	布目圧痕土器	－	外面：ナデ　内面：布目
第142図－４		於斎集落遺跡	土器	不明	外面：ナデ・ヘラナデ　内面：ケズリか
第142図－５		於斎集落遺跡	本土産陶磁器	皿	染付　内外面：明緑灰色釉 内面に圏線2条と花弁文
第142図－６		於斎集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　外面無文 内面に二又櫛刃で施文 大宰府分類Ⅰ4b類か　12C中～後半
第142図－７		於斎集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰黄色釉　外面に細蓮弁文 上田BⅣ´類　16C

第 10 表　掲載遺物観察表 7

遺物写真	遺物実測図	遺跡名	遺物名	器種	諸特徴
第146図－1		於斎セリ遺跡	カムィヤキ	不明	内外面：回転ナデ
第146図－2		於斎セリ遺跡	カムィヤキ	不明	内外面：回転ナデ
第146図－3		於斎セリ遺跡	土器	不明	内外面：ナデ
第146図－4		於斎セリ遺跡	白磁	碗	内外面：灰白色釉　胴下部外面から下は無釉 見込に陰圏線と印花文 ピロースクタイプⅢ類か　14C中～15C初
第146図－5		於斎セリ遺跡	青磁	皿	内外面：オリーブ黄色釉 畳付～外底は無釉　日本産か
第146図－6		於斎セリ遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　無文
第146図－7		於斎セリ遺跡	青磁	碗か	内外面：緑灰色釉　無文
第148図		於斎セリ遺跡	カムィヤキ	壺	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ・格子目当て具痕
第150図－1		押角ムラウチ遺跡	本土産陶磁器	碗か	染付　内外面：明緑灰色釉　内面に花弁文
第150図－2		押角ムラウチ遺跡	本土産陶磁器	急須	染付　外面：灰白色釉　内面無釉 外面に施文(文様不明)
第150図－3		押角ムラウチ遺跡	青磁	不明	内外面：灰色釉 外面に細蓮弁文　上田BⅣ類か
第150図－4		押角ムラウチ遺跡	本土産陶磁器	不明	内外面：灰白色釉　無文
第150図－5		押角ムラウチ遺跡	青磁	碗	内外面：明オリーブ灰色釉　無文
第150図－6		押角ムラウチ遺跡	本土産陶磁器	碗	内外面：灰白色釉 見込蛇の目釉剥ぎ 無文
第150図－7		押角ムラウチ遺跡	青磁	盤	内外面：オリーブ灰色釉　外底無釉 見込に陽圏線1条
第154図－1		勝能サト遺跡	褐釉陶器	壺か甕	内外面：黒褐色釉　轆轤成形
第154図－2		勝能サト遺跡	青磁	不明	内外面：オリーブ灰色釉　無文
第154図－3		勝能サト遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉 外面に細蓮弁文　上田BⅣ類か
第154図－4		勝能サト遺跡	カムィヤキ	不明	外面：平行文タタキ目　内面：不明
第154図－5		勝能サト遺跡	土器	不明	外面：不明　内面：不明
第154図－6		勝能サト遺跡	沖縄産陶器	急須か	外面：白化粧に透明釉 外面に呉須と鉄釉で線刻格子文
第154図－7		勝能サト遺跡	本土産陶器	擂鉢	薩摩焼
第154図－8		勝能サト遺跡	カムィヤキ	壺	内外面：不明　摩耗
第155図－1		勝能イザネク遺跡	カムィヤキ	不明	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ・格子目当て具痕
第155図－2		勝能イザネク遺跡	土器	不明	内外面：不明
第159図－1		諸数集落遺跡	本土産陶磁器	碗	染付 内外面：灰白色釉 外面に雲龍文か　見込に荒磯文か
第159図－2		諸数集落遺跡	青花	碗	内外面：明緑灰色釉 外面に梅花文と蓮弁文 徳化窯系 18C後半～19C初頃
第159図－3		諸数集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰白色釉　無文
第159図－4		諸数集落遺跡	カムィヤキ	不明	内外面：不明　摩耗
第159図－5		諸数集落遺跡	カムィヤキ	不明	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・綾杉目文当て具痕
第159図－6		諸数集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰色釉　無文　16C
第159図－7		諸数集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉 畳付・外底無釉　無文
第163図－1		生間ミタ遺跡	青磁	碗	外面：緑灰色釉　内面：灰白色釉 無文　日本産か
第163図－2		生間ミタ遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　内外面に唐草文か
第163図－3		生間ミタ遺跡	青磁	不明	内外面：明オリーブ灰色　無文
第163図－4		生間ミタ遺跡	カムィヤキ	不明	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・平行文当て具痕
第163図－5	第165図	生間ミタ遺跡	カムィヤキ	不明	内外面：回転ナデ
第163図－6		生間ミタ遺跡	青磁	不明	内外面：明緑灰色釉　無文
第163図－7		生間ミタ遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　内外面：灰白釉　見込蛇の目釉剥ぎ 外面に施文(文様不明)
第163図－8		生間ミタ遺跡	本土産陶磁器	碗	染付 内外面：白化粧に透明釉 内面に草樹文
第163図－9		生間ミタ遺跡	本土産陶器	壺か甕	薩摩焼 外面：灰褐色釉 内面：不明
第167図－1		渡連ムラウチ遺跡	青磁	皿	内外面：明緑灰色釉　無文
第167図－2		渡連ムラウチ遺跡	青磁	不明	内外面：灰オリーブ色釉　無文　日本産か
第167図－3		渡連ムラウチ遺跡	青磁	皿	鎬縁　内外面：明オリーブ灰色釉 外面に蓮弁文　14C後～15C前
第167図－4		渡連ムラウチ遺跡	カムィヤキ	壺か甕	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ・格子目タタキ痕
第167図－5		渡連ムラウチ遺跡	沖縄産陶器	壺か甕	内外面：回転ナデ　底部
第167図－6		渡連ムラウチ遺跡	青磁	皿	内外面：オリーブ灰色釉　見込蛇の目釉剥ぎ 外底無釉 無文 胎土目あり
第167図－7		渡連ムラウチ遺跡	土器	不明	内外面：ナデ

第 11 表　掲載遺物観察表 8

遺物写真	遺物実測図	遺跡名	遺物名	器種	諸特徴
第167図 - 8		渡連ムラウチ遺跡	土器	不明	内外面：不明
第175図		安脚場遺跡	石器	石鏃	チャート製
第176図 - 1	第173図 - 1	安脚場遺跡	嘉徳式土器	深鉢	内外面：ナデ・ユビオサエ
第176図 - 2	第174図 - 1	安脚場遺跡	阿波連浦下層式土器	甕	外面：ナデ・ミガキ　内面：不明
第177図 - 1	第173図 - 5	安脚場遺跡	条痕文土器	不明	内外面：貝殻条痕
第177図 - 2	第173図 - 4	安脚場遺跡	条痕文土器	不明	内外面：貝殻条痕
第177図 - 3	第173図 - 3	安脚場遺跡	条痕文土器	不明	内外面：貝殻条痕
第177図 - 4	第173図 - 2	安脚場遺跡	室川下層式土器	深鉢	外面：ナデ　内面：ヘラナデ
第177図 - 5	第173図 - 10	安脚場遺跡	土器	不明	外面：ナデ　内面：ハケ状調整
第177図 - 6	第173図 - 9	安脚場遺跡	土器	不明	外面：ナデ　内面：ハケ状調整
第177図 - 7	第173図 - 8	安脚場遺跡	神野B式類似土器	不明	外面：ヘラナデ　内面：ナデ
第177図 - 8	第173図 - 7	安脚場遺跡	神野B式類似土器	不明	外面：ヘラナデ　内面：ナデ
第177図 - 9	第173図 - 6	安脚場遺跡	神野B式類似土器	不明	外面：ヘラナデ　内面：ナデ
第177図 - 10	第174図 - 4	安脚場遺跡	布目圧痕土器	－	外面：ナデ　内面：布目
第177図 - 11	第174図 - 3	安脚場遺跡	本土産陶磁器	碗	染付碗　内外面：灰白色釉
第177図 - 12	第174図 - 5	安脚場遺跡	布目圧痕土器	－	外面：ナデ　内面：布目
第177図 - 13	第174図 - 6	安脚場遺跡	ツイゴの羽口	－	外面スス付着
第177図 - 14	第173図 - 11	安脚場遺跡	面縄前庭式土器	不明	外面：ナデ・ヘラナデ　内面：ナデ
第178図	第174図 - 2	安脚場遺跡	カムィヤキ	壺	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ・平行文当て具痕
第180図 - 1		諸鈍トクハマ遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　筒茶碗か　内外面：灰白色釉 外面に蛸唐草文と花弁文
第180図 - 2		諸鈍トクハマ遺跡	沖縄産陶器	壺か甕	軸轆成型　摩耗
第180図 - 3		諸鈍トクハマ遺跡	本土産陶器	擂鉢か	軸轆成型　摩耗
第180図 - 4		諸鈍トクハマ遺跡	本土産陶磁器	碗	染付か　釉薬不明　見込蛇の目釉剥ぎ　摩耗
第180図 - 5		諸鈍トクハマ遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　内外面：透明釉か　見込に草文か　摩耗
第180図 - 6		諸鈍トクハマ遺跡	本土産陶器	壺か甕	内外面：灰褐色釉　底部　摩耗
第188図 - 1		諸鈍クリ遺跡	本土産陶器	壺か甕	内外面：黒褐色釉　軸轆成形
第188図 - 2		諸鈍クリ遺跡	布目圧痕土器	－	外面：ナデ　内面：布目
第188図 - 3		諸鈍クリ遺跡	カムィヤキ	壺か甕	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・格子目タタキ痕
第189図 - 1		諸鈍サト遺跡	本土産陶磁器	不明	内外面：明オリーブ灰色釉　無文
第189図 - 2		諸鈍サト遺跡	青磁	皿か	内外面：明緑灰色釉　外面に蓮弁文
第189図 - 3		諸鈍サト遺跡	土器	不明	内外面：不明
第189図 - 4		諸鈍サト遺跡	白磁か	不明	外面：淡黄色釉　内面：無釉
第189図 - 5		諸鈍サト遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　無文
第189図 - 6		諸鈍サト遺跡	青磁	盤	内外面：オリーブ灰色釉　無文
第189図 - 7		諸鈍サト遺跡	カムィヤキ	不明	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ
第189図 - 8	第193図 - 20	諸鈍サト遺跡	和同開珎	－	－
第189図 - 9		諸鈍サト遺跡	本土産陶磁器	不明	染付　外面：灰白色釉　内面：無釉 外面に圏線3条
第189図 - 10		諸鈍サト遺跡	青磁	瓶	口縁部　内外面：オリーブ灰色釉 無文
第189図 - 11		諸鈍サト遺跡	カムィヤキ	不明	内外面：回転ナデ
第190図 - 1	第193図 - 12	諸鈍カネク遺跡	カムィヤキ	壺	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ・格子目当て具痕
第190図 - 2	第193図 - 5	諸鈍カネク遺跡	土器	不明	内外面：ナデ
第190図 - 3	第193図 - 3	諸鈍カネク遺跡	土器	不明	内外面：不明
第190図 - 4	第193図 - 2	諸鈍カネク遺跡	弥生系土器	甕	内外面：ナデ
第190図 - 5	第193図 - 1	諸鈍カネク遺跡	弥生系土器	甕	内外面：ナデ
第190図 - 6	第193図 - 6	諸鈍カネク遺跡	兼久式土器	甕	外面：ナデ・ヘラナデ　内面：ナデ
第190図 - 7	第193図 - 7	諸鈍カネク遺跡	兼久式土器	甕	内外面：ナデ
第190図 - 8	第193図 - 4	諸鈍カネク遺跡	土器	不明	内外面：ナデ
第190図 - 9	第193図 - 9	諸鈍カネク遺跡	布目圧痕土器	－	外面：ナデ　内面：布目
第190図 - 10	第193図 - 10	諸鈍カネク遺跡	兼久式土器	甕	外面：ナデ・ヘラナデ・ユビオサエ 内面：ナデ・ユビオサエ
第190図 - 11	第193図 - 8	諸鈍カネク遺跡	土師器	坏	内外面：回転ナデ
第190図 - 12		諸鈍カネク遺跡	搬入土器	不明	内外面：不明
第190図 - 13		諸鈍カネク遺跡	搬入土器	不明	内外面：不明
第190図 - 14	第193図 - 11	諸鈍カネク遺跡	スセン當式土器	甕	内外面：ナデ

第 12 表　掲載遺物観察表 9

遺物写真	遺物実測図	遺跡名	遺物名	器種	諸特徴
第191図 - 1	第193図 - 16	諸鈍カネク遺跡	滑石製品	バレン状製品	一部破損
第191図 - 2	第193図 - 17	諸鈍カネク遺跡	滑石製品	石鍋	二次加工痕あり
第191図 - 3	第193図 - 19	諸鈍カネク遺跡	貝製品	貝珠	イモガイ製
第191図 - 4	第193図 - 18	諸鈍カネク遺跡	貝製品	貝珠	イモガイ製
第191図 - 5	第193図 - 15	諸鈍カネク遺跡	フイゴの羽口	—	外面にガラス質の付着物あり
第192図 - 1		諸鈍カネク遺跡	輸入陶磁器	銀錠型製品	中国産
第192図 - 2	第193図 - 13	諸鈍カネク遺跡	白磁	碗	内外面：灰白色釉
第192図 - 3		諸鈍カネク遺跡	青磁	盤	内外面：明オリーブ灰色釉　外底無釉　無文
第192図 - 4	第193図 - 4	諸鈍カネク遺跡	青磁	碗	内外面：灰オリーブ色釉　外底釉剥ぎ
第192図 - 5		諸鈍カネク遺跡	青花	碗	内外面：明緑灰色釉 外面に雲龍文か　景德鎮窯　17C前
第192図 - 6		諸鈍カネク遺跡	本土産陶器	鉢	内外面：灰色釉　胴部外面無釉 内面に白土で施文　唐津窯　17C前～19C
第192図 - 7		諸鈍カネク遺跡	本土産陶磁器	皿	染付　内外面：明緑灰色釉　外面に施文 内面に芙蓉手　肥前産　17C後
第192図 - 8		諸鈍カネク遺跡	沖縄産陶器	碗	灰釉碗　内外面：灰白色釉 胴下部より下は無釉
第195図 - 1	第197図 - 2	野見山オオサト遺跡	白磁	皿	内外面：灰白色釉　口唇部釉剥ぎ
第195図 - 2		野見山オオサト遺跡	カムィヤキ	不明	外面：回転ナデ・格子目タタキ痕 内面：回転ナデ
第195図 - 3	第197図 - 1	野見山オオサト遺跡	カムィヤキ	壺	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・平行文当て具痕
第195図 - 4		野見山オオサト遺跡	滑石混入土器	不明	内外面：不明
第195図 - 5		野見山オオサト遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　内外面：灰白色釉　外面に二重網目文 見込に圏線と丸文
第195図 - 6	第197図 - 3	野見山オオサト遺跡	青磁	碗	内外面：明オリーブ灰色釉 畳付～高台内無釉
第199図 - 1		秋徳集落遺跡	本土産陶磁器	碗	染付 内外面：透明釉 外面に施文(横位太線)
第199図 - 2		秋徳集落遺跡	青花	碗	内外面：施釉（詳細不明）徳化窯系　摩耗 外面胴下部に蓮弁文　18C後半～19C初頭
第199図 - 3		秋徳集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉か 外面にラマ式蓮弁文か 見込に印花文(文様不明)　摩耗
第201図		秋徳集落遺跡	骨製品	不明	ウマ製
第203図 - 1		請阿室集落遺跡	青磁	碗	内外面：明オリーブ灰色釉 無文　上田E類　14C後～15C前
第203図 - 2		請阿室集落遺跡	青磁	皿	鎬縁　内外面：明緑灰色釉 外面に蓮弁文　14C後～15C前
第203図 - 3		請阿室集落遺跡	弥生系土器	不明	内外面：ナデ　外面に沈線文
第203図 - 4		請阿室集落遺跡	土器	不明	内外面：ナデ
第203図 - 5	第205図 - 1	請阿室集落遺跡	スセン當式土器	甕	内外面：ナデ
第203図 - 6		請阿室集落遺跡	本土産陶磁器	皿	染付　内外面：灰白色釉 内外面施文 肥前産
第203図 - 7		請阿室集落遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　内外面：明緑灰色釉　外面に草花文
第203図 - 8		請阿室集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰オリーブ色釉　外面に蓮弁文 内面に唐草文　上田BⅢ類　15C
第203図 - 9		請阿室集落遺跡	カムィヤキ	壺か	外面：回転ナデ　内面：回転ナデ・ 格子目当て具痕　外面に波状文
第203図 - 10		請阿室集落遺跡	カムィヤキ	不明	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・平行文当て具痕
第203図 - 11	第205図 - 2	請阿室集落遺跡	ガラス玉	—	緑色
第203図 - 12		請阿室集落遺跡	本土産陶器	皿	陶胎染付　内外面：灰白色釉 高台内無釉　内面施文 17C後～18C前　碁笥底　砂目付着
第203図 - 13		請阿室集落遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　内外面：明緑灰色釉 外面に雲龍文　肥前産　17C後半
第203図 - 14		請阿室集落遺跡	本土産陶器	擂鉢	薩摩焼　内外面：黒褐色釉　18C後～19C
第209図 - 1	第211図 - 8	池地オーコーバリ遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉
第209図 - 2	第211図 - 7	池地オーコーバリ遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉
第209図 - 3		池地オーコーバリ遺跡	滑石混入土器	鍋	内外面：ナデ
第209図 - 4	第211図 - 1	池地オーコーバリ遺跡	布目圧痕土器	—	外面：ナデ・ユビオサエ 内面：布目
第209図 - 5		池地オーコーバリ遺跡	白磁	碗	ピロースタイプか 外面：高台無釉　内面：灰白色釉
第209図 - 6		池地オーコーバリ遺跡	青花	碗	内外面：灰白色釉　高台内・見込無釉 鉄釉で圏線1条と見込中央に点(直径約1cm) 湯州窯　16C末～17C初
第209図 - 7	第211図 - 9	池地オーコーバリ遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　高台内無釉

第 13 表　掲載遺物観察表 10

遺物写真	遺物実測図	遺跡名	遺物名	器種	諸特徴
第209図 - 8		池地オーコーバリ遺跡	カムィヤキ	不明	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ・格子目タタキ痕
第209図 - 9		池地オーコーバリ遺跡	カムィヤキ	不明	内外面：回転ナデ
第210図 - 1	第211図 - 4	池地アガンマ遺跡	カムィヤキ	壺	内外面：回転ナデ
第210図 - 2		池地アガンマ遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　無文 上田Ⅱ類　14C後～15C前
第210図 - 3	第211図 - 6	池地アガンマ遺跡	青磁	碗	内外面：明オリーブ灰色
第210図 - 4	第211図 - 2	池地アガンマ遺跡	布目圧痕土器	－	外面：ナデ・ユビオサエ　内面：布目
第210図 - 5	第211図 - 3	池地アガンマ遺跡	布目圧痕土器	－	外面：ナデ　内面：布目
第210図 - 6	第211図 - 11	池地アガンマ遺跡	青花	碗	内外面：明緑灰色釉　畳付釉剥ぎ
第210図 - 7		池地アガンマ遺跡	本土産陶磁器	碗	染付　端反　内外面：透明釉　肥前産　19C半
第210図 - 8		池地アガンマ遺跡	カムィヤキ	不明	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ
第212図	第211図 - 5	池地オーコーバリ遺跡	カムィヤキ	壺	外面：回転ナデ・平行文タタキ目 内面：回転ナデ・格子目当て具痕
第215図 - 1		池地サキンマ遺跡	青磁	盤	内外面：オリーブ灰色釉　無文
第215図 - 2	第211図 - 10	池地サキンマ遺跡	青磁	盤	内外面：オリーブ灰色釉
第215図 - 3		池地サキンマ遺跡	白磁	碗	内外面：灰白色釉　見込に除圏線
第215図 - 4		池地サキンマ遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉　無文
第215図 - 5		池地サキンマ遺跡	土器	不明	内外面：不明
第216図 - 1	第219図 - 1	与路集落遺跡	弥生系土器	甕	内外面：ナデ
第216図 - 2		与路集落遺跡	弥生系土器	不明	内外面：ナデ
第216図 - 3	第219図 - 2	与路集落遺跡	弥生系土器	甕	内外面：ナデ
第216図 - 4	第219図 - 3	与路集落遺跡	弥生系土器	甕	内外面：ナデ・ユビオサエ
第216図 - 5	第219図 - 4	与路集落遺跡	弥生系土器	甕	内外面：ナデ・ハケ状調整
第216図 - 6	第219図 - 5	与路集落遺跡	弥生系土器	甕	外面：ナデ　内面：ナデ・ユビオサエ
第216図 - 7	第219図 - 6	与路集落遺跡	弥生系土器	甕	内外面：ナデ
第216図 - 8	第219図 - 7	与路集落遺跡	スセン當式土器	甕	内外面：ナデ・ユビオサエ
第216図 - 9	第219図 - 9	与路集落遺跡	スセン當式土器	甕	内外面：ナデ・ユビオサエ
第216図 - 10		与路集落遺跡	滑石混入土器	鍋か	内外面：ナデ
第216図 - 11	第219図 - 8	与路集落遺跡	スセン當式土器	甕	内外面：ナデ・ユビオサエ
第216図 - 12	第219図 - 10	与路集落遺跡	兼久式土器	甕	内外面：ナデ・ユビオサエ
第216図 - 13	第219図 - 11	与路集落遺跡	兼久式土器	甕	内外面：ナデ・ユビオサエ
第216図 - 14	第219図 - 14	与路集落遺跡	布目圧痕土器		外面：ナデ　内面：布目
第216図 - 15	第219図 - 13	与路集落遺跡	兼久式土器	甕	内外面：ナデ・ユビオサエ
第216図 - 16	第219図 - 12	与路集落遺跡	兼久式土器	甕	内外面：ナデ・ユビオサエ
第216図 - 17	第219図 - 15	与路集落遺跡	グスク土器	鍋	外面：ナデ・ヘラナデ・ユビオサエ 内面：ナデ・ハケ状調整
第217図 - 1	第222図 - 6	与路集落遺跡	青磁	盤	内外面：灰白色釉
第217図 - 2	第222図 - 4	与路集落遺跡	青磁	碗	内外面：オリーブ灰色釉
第217図 - 3		与路集落遺跡	青磁	碗	内外面：明緑灰色釉　外面に幅細鎬連弁文 見込に除圏線 大宰府分類Ⅲ類か　13C中～14C初
第217図 - 4	第222図 - 2	与路集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰オリーブ色釉
第217図 - 5	第222図 - 1	与路集落遺跡	カムィヤキ	壺	内外面：回転ナデ
第217図 - 6		与路集落遺跡	青磁	盤	内外面：明緑灰色釉　無文　15C
第217図 - 7	第222図 - 5	与路集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰白色釉　見込を蛇の目釉剥ぎ
第217図 - 8		与路集落遺跡	青磁	盤	内外面：灰オリーブ色釉　無文
第217図 - 9	第222図 - 8	与路集落遺跡	青磁	盤	内外面：オリーブ灰色釉　外底釉剥ぎ
第217図 - 10	第222図 - 7	与路集落遺跡	青磁	坏	内外面：オリーブ灰色釉 外底を蛇の目釉剥ぎ
第217図 - 11	第222図 - 3	与路集落遺跡	青磁	碗	内外面：灰オリーブ色釉　外底無釉
第220図 - 1	第222図 - 10	与路集落遺跡	白磁	皿	内外面：灰白色釉　口唇部釉剥ぎ
第220図 - 2		与路集落遺跡	白磁	碗	内外面：灰白色釉　無文 大宰府分類Ⅱ類か　11C後半～12C前半
第220図 - 3		与路集落遺跡	白磁	碗	内外面：灰白色釉　見込に除圏線と印花文 ピロースクタイプⅢ類か　14C中～15C初
第220図 - 4	第222図 - 11	与路集落遺跡	青花	皿	内外面：明緑灰色釉　畳付釉剥ぎ
第220図 - 5	第222図 - 12	与路集落遺跡	無釉陶器	壺	内外面：回転ナデ
第220図 - 6	第222図 - 9	与路集落遺跡	白磁	碗	内外面：灰黄色釉　高台無釉
第220図 - 7	第222図 - 13	与路集落遺跡	沖縄産陶器	小碗	内外面：透明釉 見込蛇の目釉剥ぎ　畳付～高台内無釉
第221図	第219図 - 16	与路集落遺跡	石器	不明	全面が研磨される

瀬戸内町文化財調査報告書第５集

瀬戸内町内の遺跡1
-貝塚時代～近世　分布調査編 -

2017年3月31日発行

編集・発行　瀬戸内町教育委員会

〒894-1592　瀬戸内町古仁屋船津23

印　　刷　（有）広報社

〒894-0006　奄美市名瀬小浜町31番2号